

2014年のひき縄・竿釣カツオ漁をふりかえる

- と き — 2014年12月19日(金) 午後1時から5時
- と ころ — 南郷ハートフルセンター 文化会館
- 共 催 — 宮崎県漁業協同組合連合会・一般財団法人東京水産振興会
一般社団法人漁業情報サービスセンター
- 後 援 — 日南市漁業協同組合・南郷漁業協同組合・栄松漁業協同組合・外浦漁業協同組合
全国近海かつお・まぐろ漁業協会・日南市



2015年9月

発行：一般財団法人 東京水産振興会
一般社団法人 漁業情報サービスセンター

プログラム

コーディネーター：二平 章（漁業情報サービスセンター・茨城大学人文学部）
主催者挨拶：高橋浩二（漁業情報サービスセンター） 13：00 - 13：20
来賓挨拶：崎田恭平（日南市長）
趣旨説明：コーディネーター

特別報告

WCPFC（中西部太平洋まぐろ類委員会）科学委員会におけるカツオ資源評価
13：20 - 13：50
清藤秀理（（独）水産総合研究センター 国際水産資源研究所）

《第1部》 話題提供：2014年のカツオ漁と近年の動向
衛星情報からみた今年の海況 13：50 - 14：10
矢吹 崇（漁業情報サービスセンター）
2014年西日本ひき縄カツオ漁と近年の動向 14：10 - 14：30
小林慧一（和歌山県水産試験場）
2014年カツオ竿釣漁況と近年の動向 14：30 - 14：50
平山仁斗（宮崎県水産試験場）
休憩（10分）

《第2部》 パネル討論 司会：二平 章
今年のカツオ漁場形成と操業をふりかえる：ひき縄・竿釣を中心に 15：00 - 17：00
パネラー

濱田敏雄（和歌山県すさみ町 [澄丸]漁労長）
鈴木正男（千葉県勝浦町 [天松丸]漁労長）
浅野貴浩（宮崎県南郷町 [5 清龍丸]漁労長）
上牧英男（宮崎県南郷町 [88 正丸]漁労長）
岩切孝次（宮崎県南郷町 [8 三代丸]船主）

プロフィール

【話題提供者】

清藤秀理（きよふじ・ひでただ）

1972年北海道生まれ。北海道大学大学院水産科学研究院博士課程修了後、JSPS 学術振興会特別研究員を経て、米国海洋大気庁海洋漁業局にハワイ大学博士研究員として勤務。遠洋水産研究所、国際水産資源研究所研究員を経て、現在、国際水産資源研究所かつお・まぐろ資源部かつおグループ主任研究員。主にカツオ・ビンナガ資源研究に従事。水産学博士。

矢吹 崇（やぶき・たかし）

1978年兵庫県加古川市生まれ。東北大学大学院理学研究科博士課程を修了し、海洋物理学の分野で博士（理学）の学位を取得。その後、同大学での研究員生活を経て、2012年に独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所に赴任。2013年に一般社団法人漁業情報サービスセンターに就任し、東北海域の水温図作成業務等に携わる。現在、一般社団法人漁業情報サービスセンター事業1課主事兼情報企画課主事。

小林慧一（こばやし・けいいち）

1987年大阪府和泉市生まれ。北海道大学大学院水産科学院修士課程修了後、和歌山県庁へ入庁。2012年からの2年間、農林水産部水産局資源管理課において、資源管理や共同漁業権、県漁業調整規則に関する業務に従事。その後、2014年に和歌山県水産試験場へ赴任し、カツオおよびイサキに関する資源調査・研究に携わる。現在、和歌山県水産試験場資源海洋部研究員。

平山仁斗（ひらやま・じんと）

1978年愛知県豊橋市生まれ。三重大学生物資源学部卒業後、三重県尾鷲市水産振興課にて3年間勤務。その後2007年に宮崎県庁に入庁後、2009年に水産試験場に移り、5年間、マサバやアカアマダイ等の種苗生産技術開発業務に従事。2014年度から、主にカツオ・マグロの漁場予測システムの開発・研究等を行っている。現在、宮崎県水産試験場経営流通部研究員。

濱田敏雄（はまだ・としお）

和歌山南漁業協同組合すさみ支所所属、澄（すみ）丸船長。1946 年和歌山県周参見（すさみ）町周参見生まれ。周参見中学校卒業後、会社員として勤務し、23 歳で漁業に従事、現在に至る。主にカツオひき縄（ケンケン）漁、マグロひき縄漁、スルメイカ釣漁に従事。漁業を始めたその年から長年、対馬や伊豆諸島～房総～常磐にかけて旅漁を続けた紀州を代表するひき縄漁業者のひとり。すさみ漁協（現・和歌山南漁協すさみ支所）では長年理事を務め、現在は一組合員として精力的に漁業に従事している。

鈴木正男（すずき・まさお）

千葉県新勝浦漁協所属、天松（てんしょう）丸船長。1949 年千葉県勝浦市生まれ。県立勝浦高校無線科卒業後、18 歳で父親と叔父が操業する 8 トン船に乗船。以来、カツオひき縄漁を中心に操業して青ヶ島から八丈島方面にまで出漁。勝浦の漁師仲間と同様、子供たちはカツオ漁で育て上げることができたと自負している。ひき縄のカツオ漁がおかしくなると感じて 1994 年に大型熱帯まき網船の「過剰漁獲問題」を訴えに、当時の組合長と二人で、フィリピンセブ島で開催された「世界漁民会議」に参加、日本のひき縄船の窮状を訴えた。沿岸つり漁業の安定経営のために資源管理の大切さを訴え続けている。千葉県下各漁協所属組合員の横断組織である千葉沿岸小型漁船漁業協同組合の副組合長を 12 年間務めた後、2012 年より組合長。2103 年には千葉県海区漁業調整委員に就任した。

浅野貴浩（あさの・たかひろ）

宮崎県南郷漁協所属、近海一本釣り船「5 清龍丸」漁労長。1962 年生まれ。宮崎県水産高校卒業後 18 歳でカツオ船に乗船。1993 年に第 5 清龍丸漁労長に就任。2014 年より宮崎県カツオ部会長。趣味のギターは名人級。

上牧英男（かみまき・ひでお）

宮崎県栄松漁協所属、近海かつお一本釣り船「第 88 正丸」漁労長。10 代半ばで叔父のカツオ船に乗りこみ、20 代で漁労長に。長年にわたり優秀な成績をあげ続け宮崎を代表する名漁労長に。宮崎の船頭会長としてカツオ資源をめぐる様々なシンポジウムで発言。CPU だけで資源を評価することの間違いを指摘。カツオ船装備の近代化で漁獲量を支えてきただけで、洋上でのカツオ群れは年々小さく数も少なくなってきたことを力説、熱帯まき網の漁獲量規制と近海まき網の秩序ある操業を訴えている。

岩切孝次（いわきり・こうじ）

1950 年宮崎県南郷町に生まれる。1967 年県立宮崎水産高校漁業科卒業。18 歳で父の経営するカツオ一本釣り船（39 トン）に乗船。28 歳に漁労長となり、以来 30 年間、フィリピン沖から北海道沖までの太平洋上を、カツオ・ビンナガを追って操業。2010 年に次男に漁労長

職を譲り下船。現在、有限会社「岩切水産」代表、南郷漁業協同組合理事。

【コーディネーター】

二平 章（にひら・あきら）

1948年茨城県生まれ。北海道大学水産学部卒業後、茨城県水産試験場で35年間研究員生活。その後、一貫してカツオの研究に従事。東京水産大学非常勤講師、立教大学兼任講師などを歴任。現在、茨城大学市民共創教育研究センター客員研究員、社団法人漁業情報サービスセンター技術専門員、北日本漁業経済学会会長。農学博士・技術士（水産部門）。2001年にカツオの回遊行動研究で水産海洋学会宇田賞受賞。

主催者挨拶

高橋浩二
(漁業情報サービスセンター)



皆様、こんにちは。漁業情報サービスセンターの高橋です。皆様には日頃よりお世話になっております。今年1月には、昨年のカツオ竿釣りの漁業をテーマに漁民センターでJAFIC 漁業情報研究会と、今年の漁を見通す会合を開かせていただきました。

今回は宮崎県漁業協同組合連合会様、東京水産振興会、当センターの共催により、このシンポジウムを開催いたします。シンポジウム開催に当たり、日南市様始め、全国近海かつお・まぐろ漁業協会様、カツオ船が多数所属されている南郷漁協様始め、各漁協の皆様からもご後援、ご協力いただきました。誠にありがとうございます。

ここで、私どもにつきまして、少し紹介をさせていただきます。漁業情報サービスセンターは、カツオ船の方々のご存じかと思いますが、水温情報や漁海況、水産会社向けに市況情報など、さまざまな漁業情報を提供している機関です。事務所は東京の築地市場から隅田川の対岸にある、豊海水産埠頭にございます。

同じ埠頭に、共催団体である東京水産振興会もございます。東京水産振興会さんは黄色い表紙の冊子『水産振興』を毎月発行されていて、先月11月で563号になりました。皆様も一度はご覧になったことがあるかと思いますが、約40年以上継続して発行されています。その他、全国の漁協女性部の活動支援や、食育の促進など、幅広く事業展開されています。

今年のかつお竿釣りが大変な不漁だったということで、国際水産資源研究所の清藤様、和歌山県水産試験場の小林様、宮崎県水産試験場の平山様から漁模様について報告いただき、また当センターの職員である矢吹より海の状況について説明いたします。さらに、本日は和歌山県と千葉県から船頭さんにお越しいただいております。今年の不漁で、皆様、大変苦労したと伺っております。今年を振り返りまして、様々な立場から活発に議論していただければと思います。

シンポジウム終了後、内容を報告書としてまとめる予定です。今年を正確に記録していくことで、今後のカツオ竿釣漁を守っていくことにつながるかと考えております。本日は有意義なシンポジウムとなりますよう、皆様、是非最後までお付き合いいただき、活発なご意見をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

この後、日南市長様から挨拶がございます。お忙しい中、ありがとうございます。それでは、シンポジウムが盛大なものとなり、また、皆様のますますのご発展を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

来賓挨拶

崎田恭平
(日南市長)



皆様、こんにちは。日南市長の崎田でございます。本日は県外からも多数お越しだと伺っております。日南市を代表しまして、皆様を心から歓迎申し上げます。

本日は、第28回「食」と「漁」を考える地域シンポが関係者のご参加の元、盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。このシンポジウム、宮崎県での開催は初めてと伺っております。それがこの日南市ということで、大変光栄に思っているところでございます。

日南市は昔から近海一本釣りや近海マグロはえ縄漁が盛んです。特にカツオ一本釣りは30隻が操業しておりまして、その漁獲量は日本一です。昨年12月には、この南郷ハートフルセンターで、皆様方のご協力により、カツオフォーラムを開催いたしました。全国のカツオ漁業関係者が一堂に会しまして、竿釣りの発表が行われました。フォーラムではいろいろな方々にお会いすることができ、改めてこの分野を守っていきたく感じました。

それからちょうど1年後に、同じ会場で「2014年のひき縄、竿釣カツオ漁をふりかえる」というテーマでシンポジウムを開催していただき、心から感謝申し上げます。

ご存じのようにカツオを取り巻く環境は、不漁と燃料高騰により、年々厳しさを増しており、全国の漁業者は大変な苦労をされています。さらにカツオ資源問題がございます。本日は、中西部太平洋まぐろ類委員会の科学委員会におけるカツオ資源評価についてのご報告が予定されておりますが、国を越えた世界等での資源管理が必要だと感じております。

また、このシンポジウムで、近年の動向や現場の声をお聞きすることで現状を共有し、同じ水産に携わる方々の意思が同じ方向に向かわれるものと強く期待しております。

先日、日南市議会が終わりまして、燃油費の軽減を目的としたペンドックに要する費用の一部を助成する漁船抵抗軽減対策事業が決まりました。遠洋、沖合、沿岸漁業、それぞれに厳しい状況でありながら、前向きに漁業者はじめ、皆様が頑張っていらっしゃるということに感謝しているところでございます。カツオ船を多数有しております日南市にとりまして、各家庭の台所にカツオを安心、安全、安定して供給することも使命だと考えております。今後、さらに水産業全般の活性化に取り組んでいきたいと思っております。

最後にこのシンポジウムが実りあるものとなりますよう、またご来場いただきました皆様方の健康、ご多幸を心から祈念申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

趣旨説明

二平 章

(漁業情報サービスセンター 技術専門員
茨城大学人文学部 客員研究員)



皆さん、こんにちは。漁業情報サービスセンターの二平です。皆さんには日頃から、カツオについてお世話になっています。日南市にもたびたび訪問させていただいています。

今日のお昼は、日南市の名物として売り出されている、カツオの炙り重をいただきました。このかつお炙り重は地域おこしの一つのいい事例だと思います。そこで全国いたる所で紹介させていただいています。カツオを食としてPRするいい取り組みだと感心しています。

さてこれから、本日のシンポジウムについて説明いたします。

ご存じのとおり、今年は3月から5月にかけて行われるひき縄漁が大変な不振でした。沿岸漁船によるひき縄漁は和歌山で盛んで、本日お越しいただいている濱田さんが所属されているすさみ地区では、毎年ケンケンかつお祭りが行われています。ケンケンカツオはひき縄漁で漁獲されたカツオで、非常に高く評価されているブランドです。毎回、とても賑わっているお祭りですが、今年は始まって以来、カツオの不漁が原因でお祭りが中止になりました。こんな不漁は初めてだと、紀伊民報という新聞に記事が掲載されました。和歌山県の漁業者さんは、そのうちカツオの群れが来るかもしれないとずっと待っていましたが、漁がまとまらないまま漁期が終わってしまいました。

つい先日、高知で研究会を開催しました。その際にも皆さんから報告いただきましたが、竿釣りの漁獲も最低の水準です。今年は、ひき縄も竿釣りも大変厳しい状況でした。

日本は深刻な不漁にあえいでいます。2013年の太平洋中西部全体のカツオ漁獲量は178.4万トンです。過去最高だそうです。私は熱帯の巻き網による漁獲が少し悪くなって、下がってくると考えていましたから、少し意外でした。でも、最高の水揚げという結果です。これが実態です。後から清藤さんから報告があるかと思いますが、WCPFCは、資源が良好な状況であると評価しています。まだまだ、日本の状況と国際的な機関での議論に差があると感じています。後で議論をしていただければと思います。

私なりに今年の漁を振り返り、状況を整理してみました。最終的に統計が全て出てからですが、今年は戦後最大の不漁年になると思います。先ほど申し上げたように、春のひき縄漁はどの県も壊滅的で、歴史上、最悪の漁だったと評価されるでしょう。

春先の不漁は、さかなクンも登場してテレビで報道されました。冷たい水のせいではないかという議論が飛び交いましたが、これは冷水のせいではなく、日本へ北上してくるカ

ツオの量そのものが少なかったのです。

竿釣りの春漁は、ビンナガ漁に救われた年だったのではないのでしょうか。ビンナガは 5 月から 7 月の漁がまとまっていたから、そちらで稼ぐことができました。

夏から秋に関して、三陸沖では 3kg のカツオが主群です。いわゆる戻りガツオで、秋の味覚を代表する、美味しいカツオですね。その 3kg のカツオは、群れがまったく見えなかったわけではありませんが、それに近いくらい少なく、漁業者さんは非常に苦戦をされました。後ほど、船頭さんに詳しく話していただきます。

それよりも、1.5~1.6kg のカツオが秋になってよく釣れました。本当に小さいサイズです。そういう点でも、異常な年だったと言えます。

主漁場は 10 月頃に、低気圧通過とともに消滅してしまいました。例年からすると、早すぎる終漁でした。漁がいいときは 12 月、雪がちらつく頃まで続いた時もありましたから、10 月で終漁というのは、本当に早すぎます。秋漁はまったく駄目でした。

皆さん、覚えているかもしれませんが、三陸の漁況がこういった状況、つまり小さいカツオが主で、大型のカツオが現れないという状況は今年が初めてではなく、5 年前の 2009 年も同じでした。私は当時、こういう状況は連続しないけれど、そのうちまた必ず同じような年がきて、大不漁になると話をして、新聞にも掲載されました。今年はまだそういう状況になったと思います。秋漁は、50cm を超えるような、3~4kg のカツオが非常に少なく、もっと小さなサイズが主で終わりました。こういった状況は、私は三十年以上、ずっとカツオを見続けていますが、2009 年と今年だけです。

基本的に、通常の三陸沖では、秋には 3~3.5kg のカツオが漁獲の中心になりますが、2009 年と今年には 1~1.5kg のカツオとなりました。私はカツオ資源がおかしくなっている一つの証拠だと考えます。

今日のシンポですが、国際水産資源研究所の清藤さんに特別報告をお願いしています。清藤さんは、国際会議でカツオの資源評価に関して海外の研究者の方々と議論されています。日本を代表して、科学的なデータから、先ほど私が申し上げたような日本の状況を訴えて、頑張っている方です。清藤さんからは、国際会議ではどのような議論がされているのかについて、話をさせていただきます。

それを踏まえて、漁業情報サービスセンターの矢吹さんには海の状況を、和歌山県水産試験場の小林さんにはひき縄の全体的な漁、宮崎県水産試験場の平山さんには一本釣りの漁について、それぞれ報告していただきます。今後が期待される、若手の 3 人組です。

その後、パネル討論ということで、現場でカツオを見続けていらっしゃる方々に登場いただき、今年の状況を教えていただきたいと思います。まず、和歌山県すさみからひき縄船・澄丸の漁労長を務める濱田さんに来ていただいています。次に、千葉県勝浦から天松丸の鈴木さんです。ひき縄をずっと続けられていて、千葉県小型船漁協の組合長をされています。近海竿釣りからは、皆さんご存じの地元の方々と、第 5 清龍で現役漁労長をされている浅野さんと、88 正丸の上牧さんです。皆さんにはこれまでの経験を話していただき

ます。それから、少し前まで漁労長をされていて、今は船主でいらっしゃる岩切さんには、船主の立場から話を伺いたいと考えています。

本日の討論のポイントを説明いたします。まず、私は、今年は戦後最大のカツオ不漁だったと評価しているのですが、現場から見るとどうだったのでしょうか。実際に船に乗って、海で群れを探していてどうだったのかについて、教えていただきます。

次に、宮崎県の船頭さんたちは、皆さん若くなっています。高知も同じで、どんどん若い世代が後を継いでいます。しかし、昔の漁がどうだったのか、わからない方も増えています。研究者もそうです。昔、普通に獲れていた時代のカツオの群れや漁はどういうものだったのか、ベテランの皆さんからこれからの世代に向けて話をしていただきたいです。

3番目に、今年だけではなく、以前からカツオ資源はおかしいと言われていました。船頭さんたちはいつ頃からどのように変化が起こってきたと感じていらっしゃったのか、お話しください。

4番目に、カツオの状況がおかしくなったことで、船の経営や地域経済など、どういったところにどういう問題が生じているのかについても、お話をいただけないでしょうか。

5番目に、WCPFCの評価と日本の不漁との間にギャップがあるのですが、皆さんはどのような疑問を持たれているのか、もし、質問がおありなら、清藤さんにお尋ねするような形にしたいと思います。

最後に、皆さんそれぞれお考えがあると思いますので、カツオのひき縄漁と一本釣漁業を安定させていくために、どういった要望、ご意見があるかを伺います。

私は以前からカツオを研究していきまして、各地を見て回っています。その際に感じるのは、地域漁村にとってカツオは非常に大事な魚だということです。漁業者だけでなく、その地域を支えているのは、沿岸のひき縄漁やカツオの一本釣船です。ですから、カツオを大事にすることは、地域を支えるということです。

地域創生が叫ばれて選挙もありましたが、本当の地域創生はカツオを復活させないといけないと、私自身は思っています。カツオ漁業の未来づくりのためには、関係者がもっともっと声をあげていかないといけないという思いがあります。本日は皆さんに活発な討論をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

2014年のひき縄・竿釣 カツオ漁をふりかえる

シンポ
開催趣旨

二平 章(にひら・あきら)

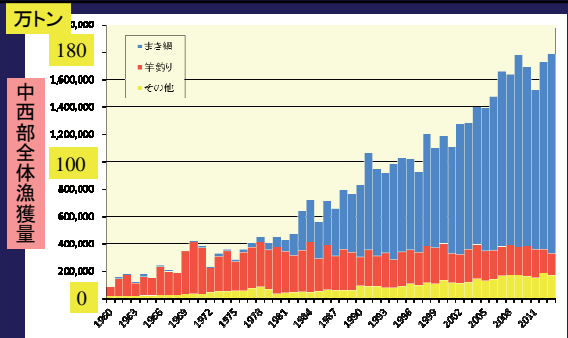


2014年12月19日 食と漁を考える地域シンポジウム(宮崎)

和歌山県のカツオひき縄大不漁



紀伊民報 2014年4月10日



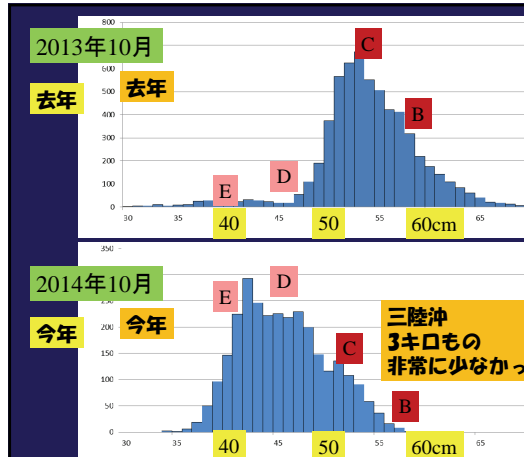
2013年178.4万トンと過去最高

WCPFCの評価(2014)

資源は良好な状態と評価

●2014年カツオ漁の特徴

- 戦後最大の不漁年
- 春のひき縄漁 壊滅 歴史上最悪 冷水のせいではない!
- 春 ビンナガ漁にすくわれた一本釣り
- 夏秋 三陸沖3キロ群れ見えず
- 1から1.5キロもの主
- 10月で漁場消滅 はやすぎる終漁
- 2009年の大不漁の再来



●本日のシンポ

●特別報告

WCPFCのカツオ資源評価

清藤さん(国際水産資源研究所)

国際的な場でどのような議論
が行われているのか?

●話題提供

今年をふりかえる

●衛星情報からみた今年の海況

矢吹さん(JAFIC)

●今年と近年のひき縄漁

小林さん(和歌山水試)

●今年と近年の一本釣り漁

平山さん(宮崎水試)

●パネル討論

●ひき縄

濱田さん(和歌山すさみ・澄丸)

鈴木さん(千葉勝浦・天松丸)

●一本釣り

浅野さん(宮崎南郷・5清龍丸)

上牧さん(宮崎栄松・88正丸)

岩切さん(宮崎南郷・8三代丸)

●本日の討論

●現場からみた戦後最大の不漁状況

●好漁時代のカツオの群れと漁

●近年つづくカツオ不漁の状況

●カツオ不漁と経営・地域経済影響

●WCPFCの評価と日本の不漁

●カツオひき縄・一本釣り漁業の安定
にむけて

地域の漁村社会の福祉と経済を
ささえてきたのが
カツオひき縄・一本釣り漁業

カツオとカツオ漁業の未来づくりに
むけて声をあげていきましょう

活発な討論をお願いします

シンポはここまで

- ・どうせ聞かれるので
- ・来年の近海カツオ動向
- ・ただし個人的な見解

鬼が笑う来年のカツオ漁見込み

- 近年の全体的低迷状況から大きく上回ることはない。
- しかし、近年のなかでは主群になる春の2キロ・1.6キロ 秋の3キロの来遊状況よい。
- 一時的集中水揚げで安値で売らぬよう生産者側の調整必要。

もっと鬼が笑うカツオ漁見通し

- 2~4月:奄美・20N亜熱帯反流北
大から特大 あまり期待できない
- 3~5月:沿岸ひき縄
1.6kgから2kg。近年のなかでは良い
- 4~5月:2.0-2.5kg 期待できる
- 5~6月(4月):1.7kg 期待できる
- 夏から秋 三陸沖 2.5・3・4kg 期待
- 各船の漁獲量 今年の1.5倍以上

- 予想があたり
和歌山・千葉のひき縄 そして
宮崎の一本釣りのおいしいカツオ
が食べられることを期待しています。
最後に、シンポにご協力いただいた
講演者の皆さん・パネラー
の皆さんに感謝します。

特別報告

WCPFC（中西部太平洋まぐろ類委員会）科学委員会に おけるカツオ資源評価

清藤秀理

（（独）水産総合研究センター 国際水産資源研究所）



皆さん、こんにちは。国際水産資源研究所の清藤と申します。中西部太平洋まぐろ類委員会科学委員会で、2014 年度に新しく実施されたカツオの資源評価の結果について、3 つの内容で話をしようと思います。

最初に、2013 年度から中西部太平洋のカツオ、マグロ類の漁獲量の状況について、主にカツオについて説明いたします。次に資源評価の結果、最後に皆様方からご協力いただきながらこれまで実施してきた、標識放流の結果について、報告いたします。

資源評価については、先週高知で話をしてきまして、専門家である二平さんの後で少しお話しにくいところもありますが、現状をお伝えすることで皆さんからいろいろ教えていただければと思います。

まず、中西部太平洋まぐろ類委員会は、太平洋の西部、概ね南緯 60 度以北で西経 150 度以西の太平洋を対象海域としていて、この海域で獲られている高度回遊性魚類のマグロ類、カツオを持続的に利用していくことを目的に、2004 年に設立されました。加盟国は、2005 年に署名をした日本をはじめ、アメリカ、中国、韓国、オーストラリア、太平洋島しょ国と EU など、全部で 26 カ国から構成されている委員会です。

実際にどういったことをしているかという点、委員会には科学委員会と行政委員会があり、研究者は科学委員会で活動をしています。26 カ国の加盟国から科学者が集まり、委員会の中でいろいろ議論をします。漁業データの収集、資源評価の実施と取りまとめなどを行い、最終的に資源管理勧告を作成します。この資源管理勧告を行政委員会でさらに議論し、カツオの管理について議論しています。

科学者の立場として、科学委員会でどういう議論をしているのか、報告いたします。

まず、2013 年の漁法別漁獲量がどれぐらいだったかという点、カツオ、マグロ類の漁獲量は 217 万 t で、過去 2 番目でした。まき網が 190 万 t で全体の 71% を占め、はえ縄は 26%、竿釣は 29 万 t で全体の約 8% でした。

カツオは、11 月に更新された最新の統計を見ると 181 万 t で過去最高でした。カツオの漁獲量は、先ほど二平さんもおっしゃっていましたが、右肩上がりにどんどん伸びていっています。全体の漁獲量では、2013 年は過去 2 番目で、そのうちカツオは約 7 割を占めています。次にキハダが多くて 52 万 t、メバチが 15 万 t、ビンナガが 14 万 t です。

国別のカツオ漁獲量をみると、インドネシアで 32.5 万 t、次に日本が 25.9 万 t、アメリカ 20 万 t、韓国 17 万 t、フィリピン 14 万 t、パプアニューギニア 13 万 t、ソロモン 1.7 万 t でした。全体で 181 万 t です。インドネシアでは最近、統計データが整備されてきています。なお、日本の中西部全体でのカツオ漁獲量は、1990 年頃から横ばいで推移しています。

さて、漁場ですが、皆さんご存じのように、多くは熱帯域のまき網で獲られています。最近ではフィリピンの西側にある、スールー海、セレベス海での漁獲量も伸びています。ここでは竿釣りや、リングネットという、まき網に似たような漁法で獲られていると報告されています。南シナ海でも、若干漁獲量があります。

2013 年に獲られたカツオの体長組成です。赤が竿釣り、水色がまき網、青が素群れで、大体 50cm から 60cm のカツオをまき網主体で漁獲しています。

2014 年 8 月に、マーシャル諸島で WCPFC 加盟国の研究者が集まり、資源評価を行いました。資源評価の方法は、海の中にどれくらいカツオがいるのかを計算で出し、その数値がこれまでと比べて多いのか、少ないのかを議論します。必要になるのはカツオの生育期の情報、特に体長などは非常に重要です。皆様方に報告していただいている漁獲量や、カツオの場合は回遊経路の情報も使われています。漁業情報もとても重要ですが、漁獲量の推定値には誤差が含まれています。正確に資源状態を把握して適切に管理するためには、できる限りきちんとした数値に近づける科学的な作業が必要です。

どういことをやるかといいますと、中西部太平洋を 5 つの海域に分けます。評価には 1972 年から 2012 年まで、2014 年から 2 年前までのデータを利用します。2 年前までのデータというのは、正確な情報がなかなかすぐには揃わないためです。

竿釣りやまき網の漁獲量など、全てのデータが資源評価に入れられます。実際、海中にカツオがどれくらいいるのかわかりませんので、どのくらいの労力を費やして、どのくらい漁獲したかを示す値である CPUE と呼ばれる豊度指数を使い、その海域のおおよその値を計算で出します。

日本の竿釣りに関しては、1972 年から継続してデータがあり、一番信頼できるだろうということで、指標として入力されています。これは皆様方が提出されている漁獲データに基づき、計算されています。2014 年の資源評価はこれまでと違い、パプアニューギニアとフィリピンでのまき網データも計算に入れられました。

海域全体のカツオの量は、体長組成などのデータと数式を使って出します。そして、日本の竿釣りで獲られるカツオから、相対的な海の中にいるカツオの数がきちんと算出できるかどうか、議論しながら進めています。

産卵親魚量は、卵を産める状態のカツオ、つまり成熟したカツオのトレンドをみようということで、計算して資源評価をしています。1972 年から 2013 年までをみると、1990 年代に少し低い値からだんだん上がっていきませんが、途中で横ばいになり、2000 年頃から下降しているという評価です。

また、漁獲によるカツオの漁獲死亡係数も計算でき、この数値は90年代からだんだん上がり、2000年からはさらに上がっています。ただ、この結果をどう判断するのかというと、科学者でもなかなか難しいです。横軸に資源がどう変化をしているのかを、縦軸に漁獲による死亡を示し、図のどこに位置するのかで、資源の状態を把握しています。つまり2011年の結果は、資源量も漁獲圧もそんなに悪くないということになっています。しかし、科学者の中では、資源状態は悪くはないかもしれないが、悪い方向に向かっているのではないかと議論されています。今の資源状態だけの話をすると、いつもそんなばかなことがあるかと言われるのですが、2000年から資源量が下がっているということは、皆さん認識されているということです。

それに加えて、われわれは東京都八丈島と和歌山県、高知県から情報をいただき、日本の沿岸での状況がどうなっているのかを示しました。中西部海域全体の資源量を計算し、出た結果に加えて、日本沿岸ではこういう状況だと科学委員会で話してきました。

科学委員会では、実際にその年に操業した船隻数と漁獲量を割った値というものは全く信用されていません。この数値は一見すると1990年代から右肩下がりになっているように見えるので、会議の場でそのままの数字で話をしても、まったく受け入れられてもらえません。さらに一工夫して、数式を使って計算したもので訴える必要があります。日本の沿岸では2006年から減少傾向を示していて、資源状態は万全かもしれないが、沿岸では少しずつ減っていると主張しました。

最終的に、行政官が科学勧告について議論をするための下地をつくらなければいけませんので、それを取りまとめるための議論があります。カツオの資源状態はどうかというと、先ほどお話ししたように、過剰に漁獲もされていないですし、逆でもありません。しかし、漁獲による死亡割合は増加しています。なおかつ、2000年以後、資源量の減少傾向が続いています。

科学委員会での検討を経て、さらに行政官の議論から勧告が出されるのですが、漁獲死亡率を増大させないように、まき網の管理成長化措置の委員会が実施されます。赤道域の大量漁獲の影響があり、カツオ資源の分布域の縮小をきちんと認識して、こういった研究をもっと進めていこうということです。

中西部太平洋全体でのカツオ資源と、実際の沿岸域でどうなっているかということの2点について、議論してきた結果が、この状態にされてきたということになります。

次は資源に直接関わってくる話です。実際、日本近海に来るのか来ないのか、そしてどうやって来るのかという、こういう結果についても資源評価モデルの数字の中に入れていくことを考えていますが、今回はその結果の概要をお話します。

熱帯域で放流しましたカツオが日本近海にどうやって来るのかということ、もう少し科学的にきちんと明らかにし、増殖させるための情報を集めていきたいということで始めました。

ただ、これまで熱帯域でなかなか放流する機会がありませんでした。そこでまず、亜熱

帯域、皆さんは中南海域の方が分かりやすいかもしれませんが、中南海域から日本近海へどのように来遊するのかということ調べるために、電子標識を使って、カツオの標識放流を実施しました。この電子標識は直径 7.8mm、長さ 26mm です。お腹に標識を入れた後に医療用のホチキスで止め、海に放します。標識は、水温と泳いでいる深さと泳いだところの光の強さをはかります。

放流したのは与那国周辺、沖ノ鳥島、硫黄島周辺、房総沖、あと八丈島の周辺で、2011年から2014年までに1,183匹に取り付けました。少し暖かいところを周りながら、徐々に水温の上昇とともに北上していきます。少し冷たいところに入ったカツオは動きが鈍くなり、西に行ったり、東に行ったり、そこに留まったりするような動きをします。

これは2月から3月、中南海域で宮崎県さんと日昇丸さんの協力を得て、放したカツオの動きになります。

与那国で放流したカツオの動きですが、黒潮に乗って東シナ海を北東の方向に動いていくカツオと、薩南海域で帰りつくカツオがいます。この辺はおそらく、皆さんが行かれています漁場になるかと思えます。

この海域にはたくさんパヤオが入っていると思うのですが、そういうところにはあまりとどまる傾向を示さないという結果でした。ここにいるカツオは、なかなか高知や太平洋へ抜けていかないという結果もでています。

もう一つ面白い結果として、先ほど冷水のせいではないという話がありました。カツオは水温が約20℃で、方向を変えるということがわかってきています。2014年は特に20℃とか18℃の海域が少し広がっていたので、西へ行ってしまったか、あるいはここに留まったのか、北上する機会を逸したのか、今後の検証が必要です。

今度は鉛直行動について、7月に房総沖で獲られたカツオの動きをみます。カツオは昼と夜で遊泳の水深が異なり、夜は表層付近を、昼は深いところを泳ぎます。瞬間的ですが、一番深くで水深600mまで潜っていると言われていています。カツオは、7月15日頃は表層に上がってきていませぬので、一本釣船が表層でカツオと出会う割合はとても低いと言えます。

北緯20度の中南海域と北緯40度の北の海域で、実際に泳いでいたカツオから得られたデータがあります。漁業者の皆さんが漁を始めるのは1月から3月頃ですが、その時期のカツオは中南海域のかなり深いところへ潜っています。ほぼ表面に上がってきていないのではないかという行動をしています。深いところを泳いでいるので、なかなか見つけにくいのではないかと思います。それが季節とともに北上すると、どんどん水深も浅くなっていきますので、三陸沖ではカツオの群れを見つけやすくなります。

標識放流の結果、北に行けばいくほど浅いところを泳いでいるので、漁船がカツオに出会う割合は増えていくのではないかということが、わかってきています。

もう少し具体的に調査を進め、冷水域の形成メカニズムと沿岸域の漁海況に使用できるかどうかということも検討していきたいと思えます。

皆様には今後も調査等にご理解とご協力をお願いいたします。ありがとうございました。

2014.12.19 (金) 南郷ハートフルセンター 文化会館
 第28回「食」と「漁」を考える地域シンポジウム
 2014年のひき縄・竿釣カツオ漁をふりかえる

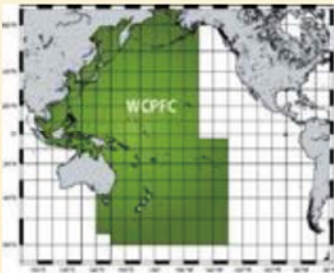
WCPFC科学委員会における カツオ資源評価結果

独) 水産総合研究センター・国際水産資源研究所
 かつお・まぐろ資源部 清藤秀理

本日の発表内容

1. 2013年中西部太平洋のかつお・まぐろ類漁獲量の現状
2. 2014年中西部太平洋カツオ資源評価結果
3. 近年のカツオ標識放流再捕結果

中西部太平洋まぐろ類委員会

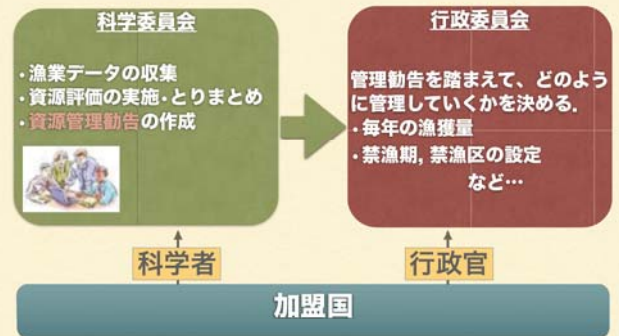


2004年6月19日 発効
 2005年7月 8日 日本署名

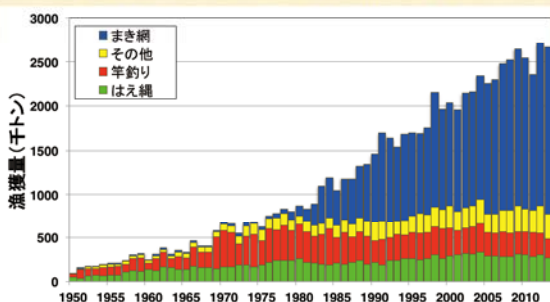
目的
 条約水域（中西部太平洋）における高度回遊性魚種（まぐろ、かつお、かじき類）の長期的な保存及び持続的な利用の確保

加盟国
 日本、米国、中国、韓国、豪州、太平洋島嶼国等 24ヶ国+EU、台湾

漁業管理機関のしくみ



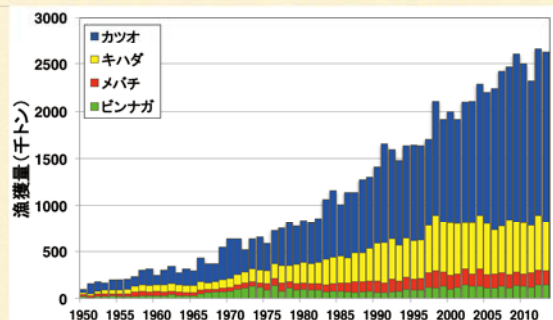
中西部太平洋における漁法別漁獲量



2013年推定漁獲量：2,673,904トン(過去2番目)

- ・巻き網：1,900,224トン (71%)
- ・はえ縄：268,038トン (10%; 1999年以降最低)
- ・竿釣：221,744トン (8%)
- ・その他：

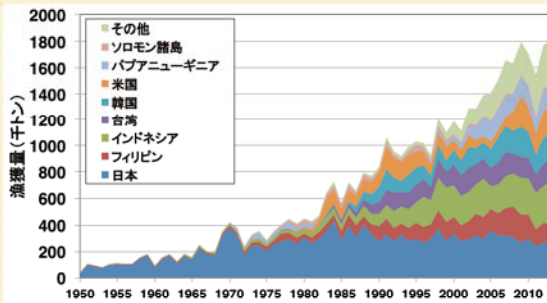
中西部太平洋における魚種別漁獲量



2013年推定漁獲量：2,627,696トン (過去2番目に高い)

- ・カツオ：1,810,166トン (69%; 過去最高)
- ・キハダ：524,022トン (20%)
- ・メバチ：150,281トン (6%; 2012年より低い(10年平均程度))
- ・ビンナガ：143,227トン (5%; 2012年より高く、2番目に高い)

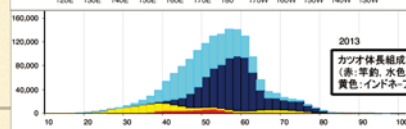
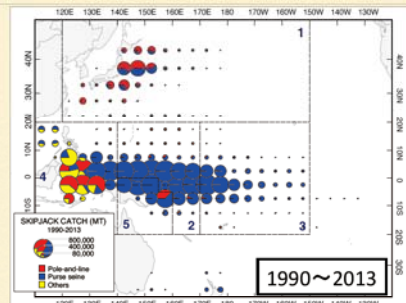
中西部太平洋における国別カツオ漁獲量



2013年カツオ漁獲量

インドネシア	: 32.5万トン	台湾	: 17.2万トン
日本	: 25.9万トン	フィリピン	: 14.5万トン
米国	: 20.6万トン	PNG	: 13.5万トン
韓国	: 17.7万トン	ソロモン	: 1.7万トン

中西部太平洋の漁法別カツオ漁獲量・位置・サイズ



本日の発表内容

1. 2013年中西部太平洋のかつお・まぐろ類漁獲量の現状
2. 2014年中西部太平洋カツオ資源評価結果
3. 近年のカツオ標識放流再捕結果

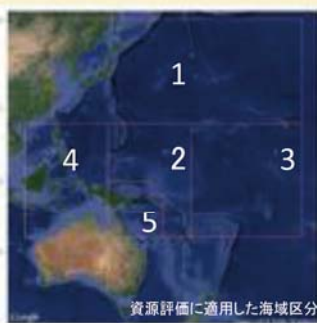
水産資源を評価するとは？

資源状態（海の中の魚の数）を知る
多いのか？少ないのか？



可能な限り正確に”資源状態”を把握し、適切な管理と持続的な利用へつなげるためのプロセス

中西部太平洋におけるカツオ資源評価



使用データ(1972-2012)

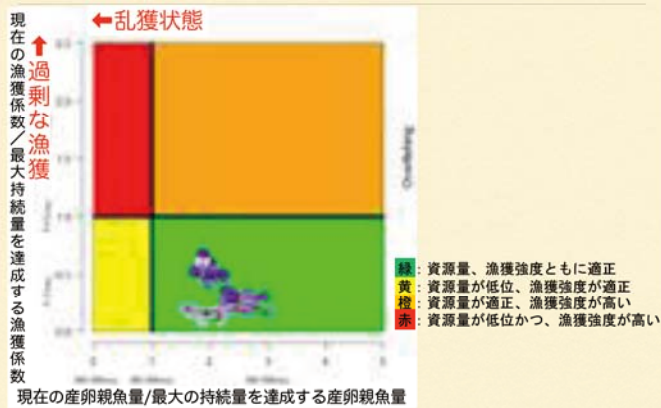
1. 漁獲量
竿釣 (日本・仏領ポリネシア・キリバス・ソロモン)
まき網 (中国, エクアドル, キリバス, エルサルバドル, ミクロネシア, マーシャル諸島, NZ, PNG, フィリピン, ソロモン, 米国, ス페인, バヌアツ, 台湾, 韓国)
 2. CPUE (豊度指数)
日本の竿釣とPNG, フィリピンまき網
 3. 体長組成
 4. 標識放流再捕データ
- 資源評価モデル
Multifan-CL (統合モデル)

中西部太平洋のカツオ資源状態

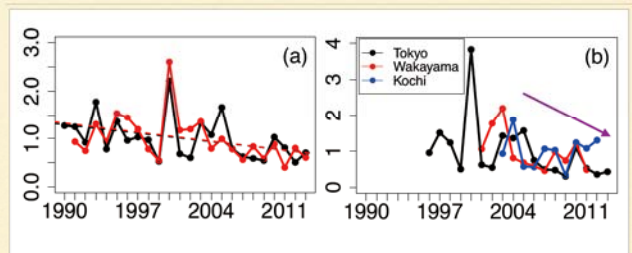
WCPFCにおける2014年資源評価結果



中西部太平洋のカツオ資源状態



日本沿岸カツオCPUE (曳縄と竿釣)



日本沿岸CPUEは一貫して2006年以降減少傾向

* CPUE: 漁獲努力あたりの漁獲量
1隻が操業1日あたりにどれだけ漁獲するか、竿1本あたり1日でどれだけ釣獲するか、等

中西部太平洋のカツオ資源状態と勧告

カツオの資源状態	科学委員会の勧告
<p>★過剰に漁獲されており、乱獲状態にも無い</p> <p>ただし、</p> <p>★ 漁獲死亡は増加傾向で、かつ資源量は減少傾向が続いている</p> <p>★ 赤道域における高い漁獲が、資源の分布水域を減少させ、その結果、高緯度水域への回遊の減少している懸念が生じている</p>	<p>★漁獲死亡率を現状から増大させないよう、まき網管理規制強化等の措置を委員会が実施すること</p> <p>★赤道域の大量漁獲の影響による分布域縮小の懸念を委員会は認識し、当該研究を継続すること</p> <p>★資源評価モデルを改良し、条約区域縁辺部の漁業データを含めたものとする</p>

2014.12.19 (金) 南郷ハートフルセンター 文化会館
第28回「食」と「漁」を考える地域シンポジウム
2014年のひき縄・竿釣カツオ漁をふりかえる

近年のカツオ標識放流結果



カツオの回遊経路推定図と漁業実態

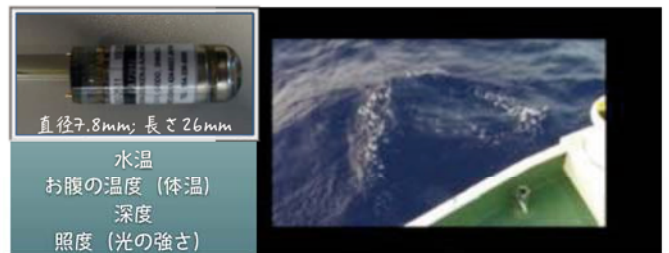


- [沿岸カツオ漁業 (ひき縄・小型竿)]
 - ❖ 和歌山県周辺、高知沖では3月～5月に春漁として盛漁期となり、漁獲の主体は40cm前後
- [近海カツオ漁業 (中型竿)]
 - ❖ 毎年1月後半に漁期がスタートし、北緯20度周辺海域が漁場となり、季節とともに北上、3月から40cm台のカツオの漁獲が増加する

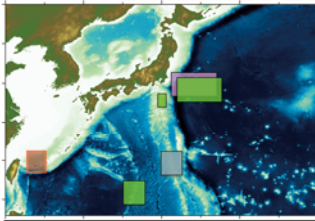
- ✓ 日本近海への来遊経路は具体的に示されていない
→ 推測の域を出ない(断片的な情報)
- ✓ 日本近海への来遊プロセスも不明点が多い
→ 来遊に関係する要因が定かでは無い

カツオ標識放流の方法

[電子標識の使用]



カツオの放流海域

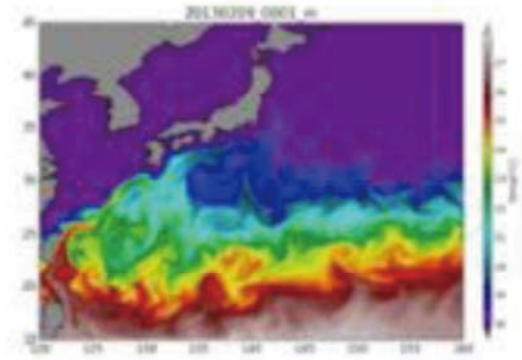


放流個体サイズ
35cm~50cm

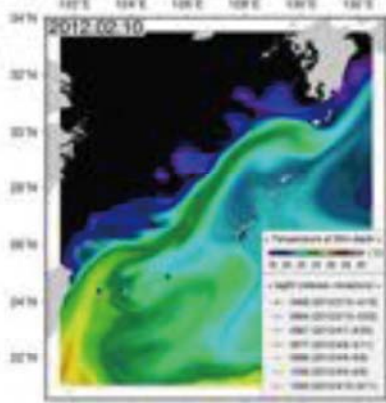
- 中型釣り便乗調査
- 中型釣り用船調査
- 味の素調査
- 公庁船共同調査

Year	用船 (釣り)		便乗 (釣り)		公庁船共同		味の素		Total	
	通常	電子標識	通常	電子標識	通常	電子標識	通常	電子標識	通常	電子標識
2011	-	-	-	-	18(0)	83(2)	372(0)	-	390(0)	83(2)
2012	3,199(148)	109(7)	-	-	5(0)	79(2)	2,999(59)	169(7)	6,204(207)	357(16)
2013	3,819(393)	118(6)	-	81(15)	6(0)	78(2)	675(2)	43(0)	4,500(395)	320(23)
2014	320(1)	54(0)	-	-	-	222(25)	742(15)	106(4)	1,062(16)	423(30)
total	7,368(542)	281(13)	-	81(15)	29(0)	503(32)	4,788(76)	318(11)	12,156(608)	1,183(71)
%	7.4	4.6	-	18.5	0	6.4	1.6	3.6	5.0	6.0

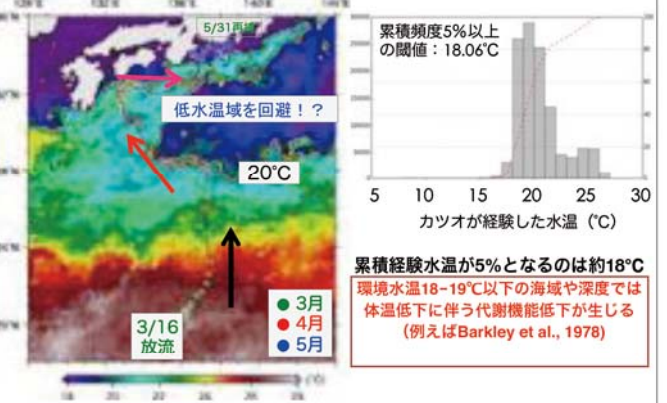
亜熱帯域から日本近海までのカツオの軌跡



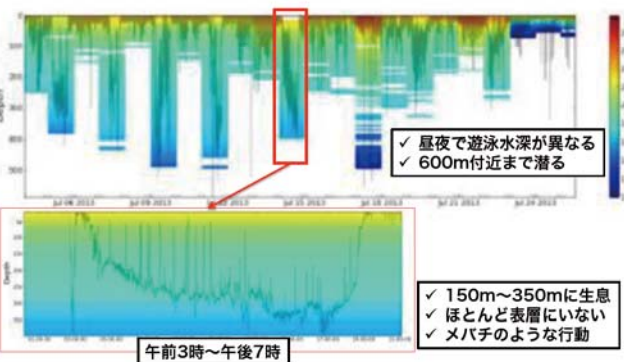
与那国周辺で放流したカツオの軌跡



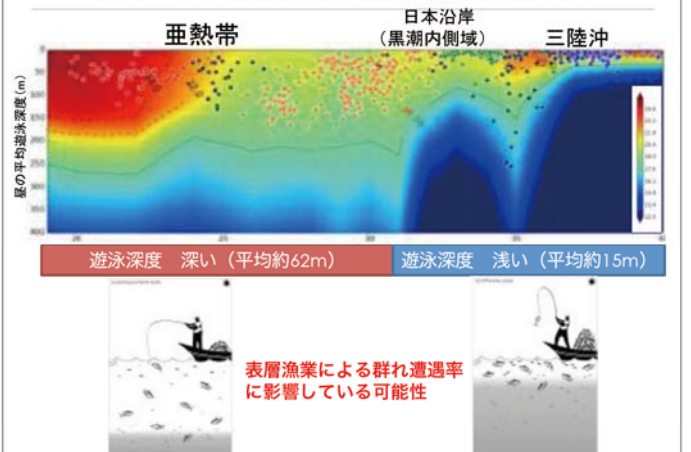
カツオの水平移動と水温分布との関係



カツオの鉛直行動について

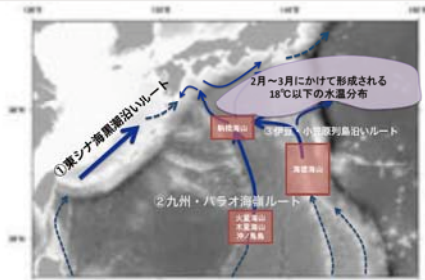


カツオ遊泳深度の海域による違い



まとめ

電子標識データから推定された亜熱帯域から日本近海までの移動経路



- 黒潮の南側に存在する冷水域が北上回遊をブロック
- 西や東へ方向転換・その場で滞留、などの北上進路が変化

北上を阻む冬季に黒潮南側に形成される冷水域

形成メカニズムを含めた沿岸域の漁況予測に使用できるか？

≪第1部≫話題提供

衛星情報からみた今年の海況

矢吹 崇

(漁業情報サービスセンター)



皆さん、こんにちは。漁業情報サービスセンターの矢吹と申します。今日のシンポジウムのテーマはカツオですが、私は海洋物理が専門でして、水温情報の話をいたします。

最初に皆さん、漁業情報サービスセンター（以下、JAFIC）のエビスくんを使っているかと思いますが、東北海域の水温は私が担当です。東北海域の水温はもちろん、カツオとの関係等、何かご意見がありましたら、ぜひお教えいただきたいと思います。

さて、月平均の水温についてお話します。月平均の水温というのは、月初めから月終りまでの水温のデータを場所毎に整理し、そのデータをデータ数で割って平均した値です。月毎の平均水温ですので、正確な水温図ではないのですが、全体の概況を見るときに便利です。また、JAFICで収集している漁場の情報についてもご紹介します。漁場の位置を丸で示したデータで、水色の丸がカツオで、青から紫色の丸がビンナガ、まき網は三角です。

1月からカツオ漁が行われていますが、JAFICのデータでは1月のデータがなく、2月から説明いたします。2月は南方でぼつぼつとカツオ漁が行われています。

次は3月です。3月は、西側の海域、東経130度から140度、北緯27度より南で操業されています。水温も20℃を超えるところ、23℃くらいの海域です。

4月になると海がだいぶ暖まってきて、漁場も移動していきます。黒潮の蛇行しているところでも漁場が形成されますが、4月下旬頃に水温は20℃前後になります。月平均の水温なので分かりにくいですが、黒潮が蛇行している海域、つまり房総半島の南にカツオが上がってきて、それが次の月にも出てきます。

5月は漁場が固まり、北緯30度付近が20℃のコンターなので、水温もだいぶ上がっています。漁場の位置は、房総半島や伊豆半島の南で、南北の帯状のような海域で漁が行われています。水温は約20℃で、その南の少し冷たいところにも漁場が形成されています。東経145度にも漁場はありますが、まき網の漁場もあります。5月の平均水温は19℃程度ですが、5月下旬に20℃を超える海域なので、漁が行われていたようです。

続いて6月です。6月はビンナガが中心です。水温も大分上がり、全体的に20℃を超えるようになります。22℃の海域で操業されているようです。

7月はビンナガに加えてカツオも漁獲され、25℃の等温線が上がってくるので、水温は全体的に高くなっています。

8月のデータをみると、操業はぼつぼつ程度で、あまりメインのカツオ漁ではありません。

次に東北海域を見ます。6月はビンナガがメインで、漁場は主に東経140度から145度の海域です。6月下旬頃から行われ、水温は約22℃だと思います。また、東経150度から152度の海域にも漁場があります。

7月は、25℃の等温線が黒潮まで上がり、その付近で漁場が形成されます。その東側、水温が24℃に上がった海域でも漁が行われています。

また、北の海域でもぼつぼつと漁場が見られます。北緯40度を超える海域では暖水の張り出しがあり、2014年は7月末頃からこの海域でも漁場が増えていました。平均水温は19度ですが、毎日の水温データをみると約24℃と高くなっています。

8月にはさらに暖まり、メインの漁場は、水温が22℃から24℃の、北の暖かい海域になります。東経150度、北緯40度の海域には、北東に伸びている暖水のジェットがあります。

9月にはさらにこの状態が続きますが、若干、コンターの傾きが出てきて、そこに合わせたように漁場が形成されます。また、東経145度、北緯40度の西側にも漁場ができ、これは9月末から10月にかけて形成されます。

10月ですが、2014年は終漁が早かった年です。主に東側と西側の2つの海域の水温と漁場位置をみます。東側は暖水が北東に流れていくところです。平均水温は18℃ですが、日毎の水温はもう少し高いです。西側は東北沖の暖水の渦のところで、この海域も水温は20度前後です。

カツオとは関係のない話ですが、2014年は北海道東沖の水温が非常に高いことが障害となり、なかなか北海道でサンマが獲れませんでした。

では次に、水温偏差をお見せします。「水温偏差」はあまり聞きなれないかもしれませんが、偏差は平均との差のことです。Terraという人工衛星に搭載されたMODISセンサーで測った、2001年から2014年1月までの水温データを全て集めて平均し、この平均との差を計算したものを水温偏差としています。

1月の水温偏差を見ると、水温が全体的に0℃から1℃低い傾向にあることがわかります。海域によっては1℃より低いところ、2℃以上低いところもあります。

まとめて2月から5月の水温偏差ですが、長く低温の傾向が続いています。2月から4月までは0℃から1℃、あるいは2℃低いです。5月には低温の海域が広がり、1℃より低いところが広く占めるようになります。黒潮は暖かいので、その周辺はかなり暖かいのですが、それ以外の海域では非常に低温です。

7月から10月の東北海域の水温偏差ですが、渦の影響が大きい海域です。暖水塊があると暖水になり、冷水塊があると冷水になるので、全体の気温としては分かりにくいです。

7、9、10月を見ますと、黒潮の南側でマイナスになっていますので、黒潮の影響のない海域では若干、低温の傾向が強いという印象です。8月は高温の傾向でした。ですので、東北だけで見れば、そんなに低温だったわけではなく、むしろ暖かかった年だと思います。

以上、2014年の水温について説明させていただきました。ありがとうございました。

2014年12月19日

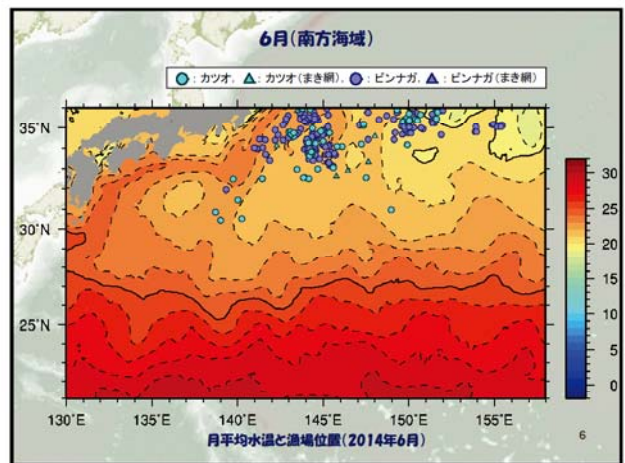
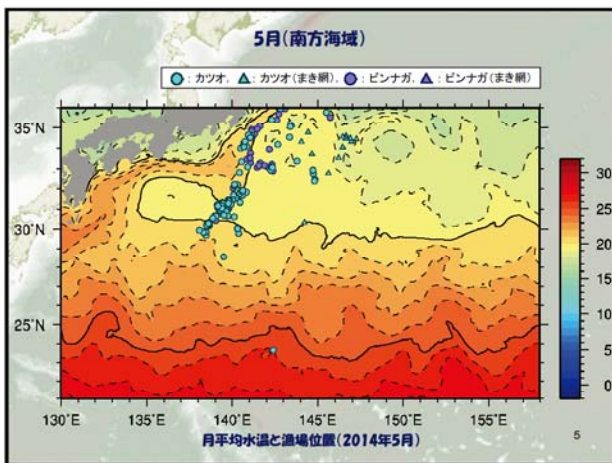
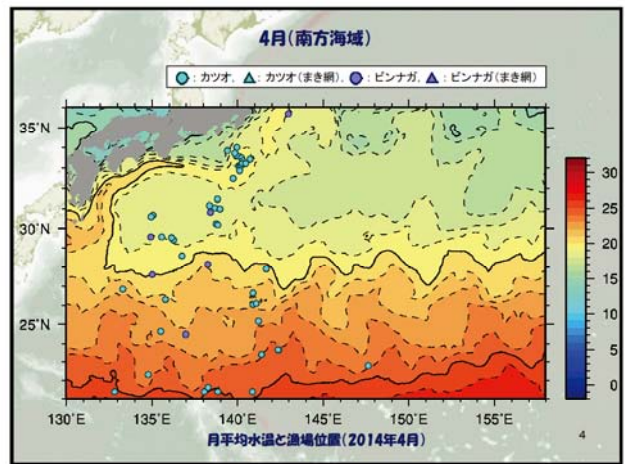
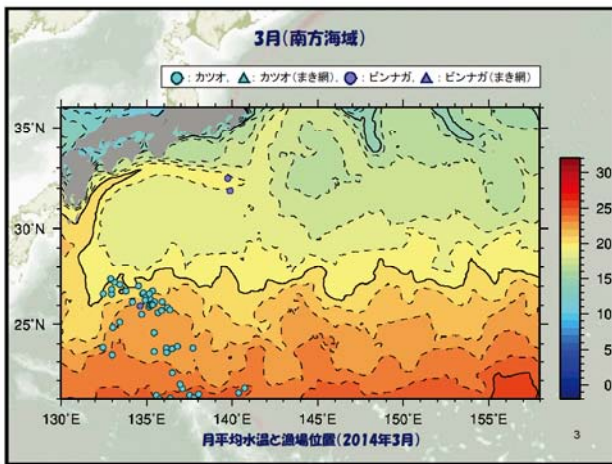
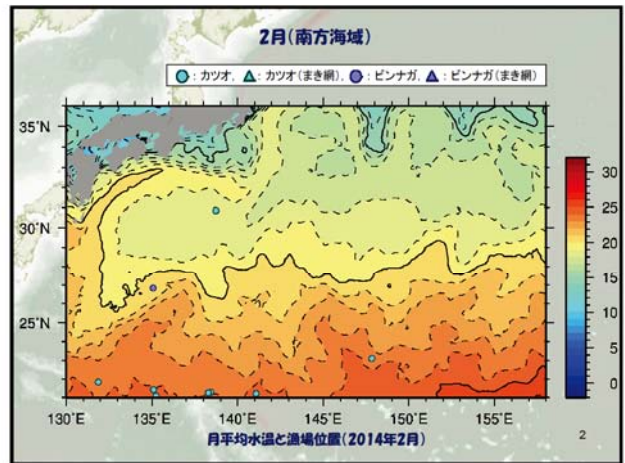
第28回「食」と「漁」を考える地域シンポジウム
2014年のひし縄・竿釣カツオ漁をふいかえる

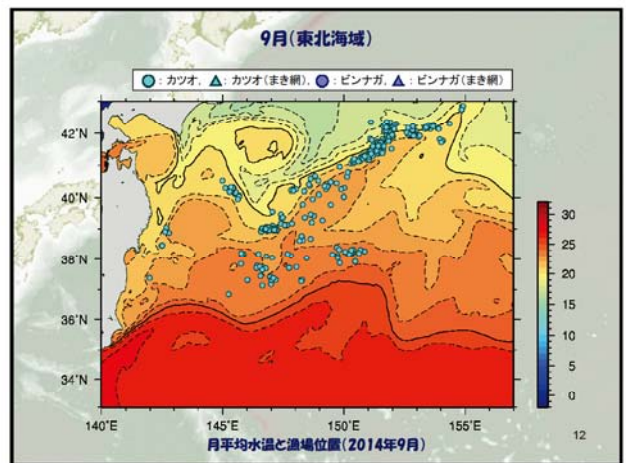
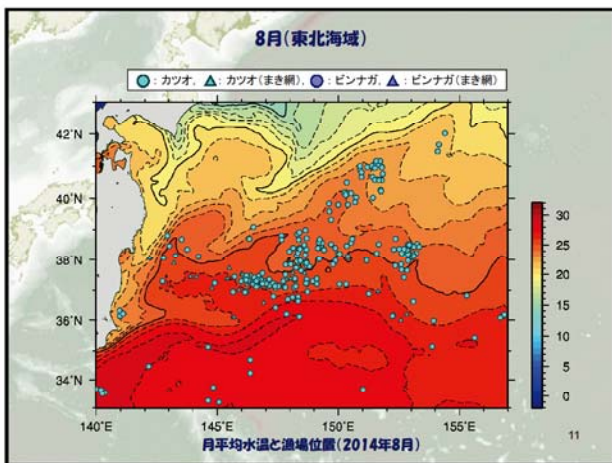
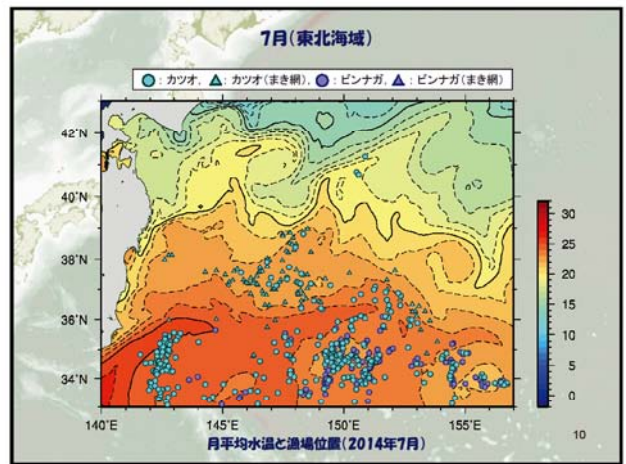
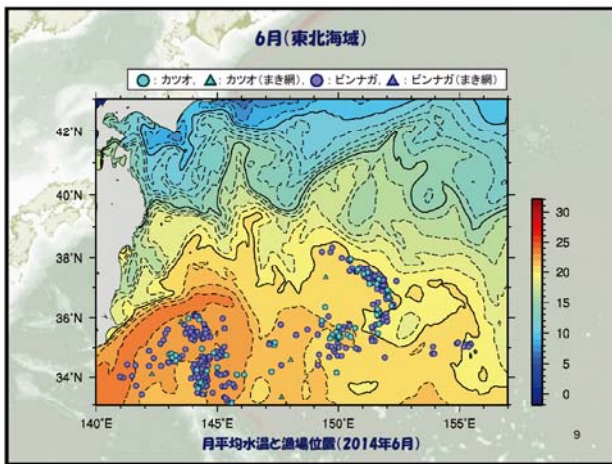
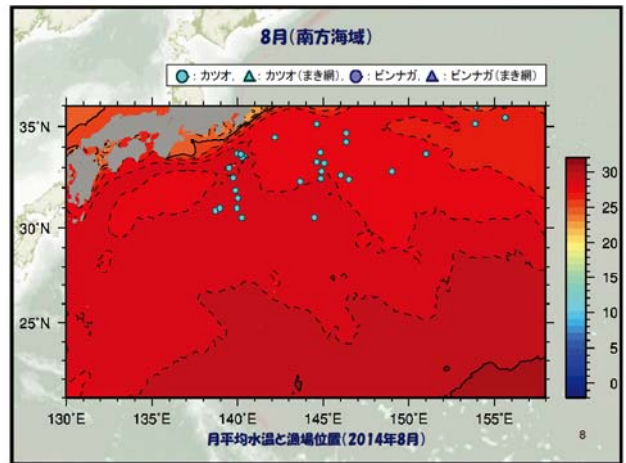
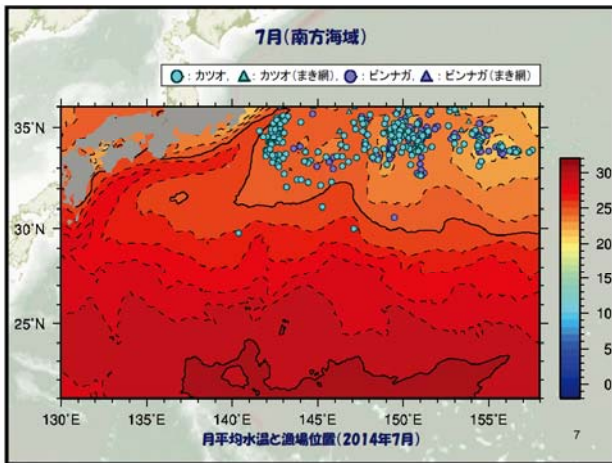
衛星情報からみた今年の海況

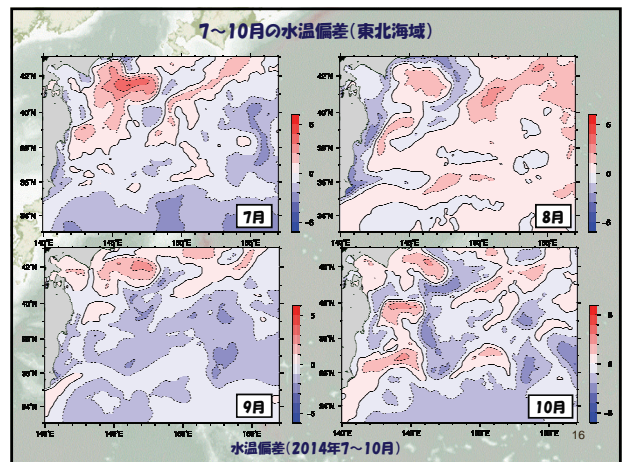
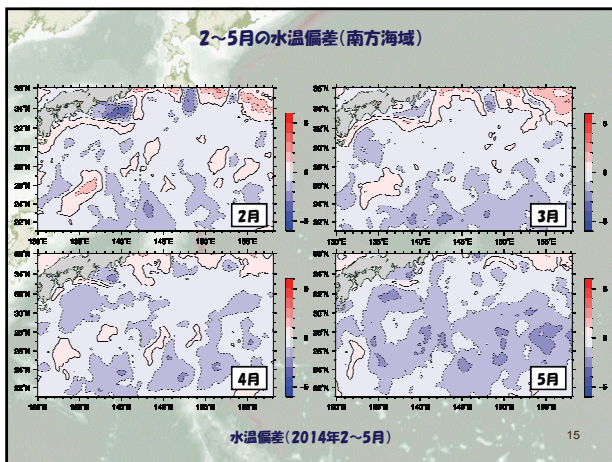
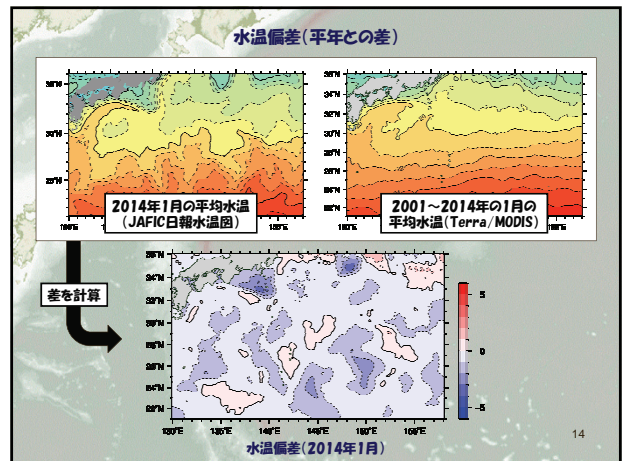
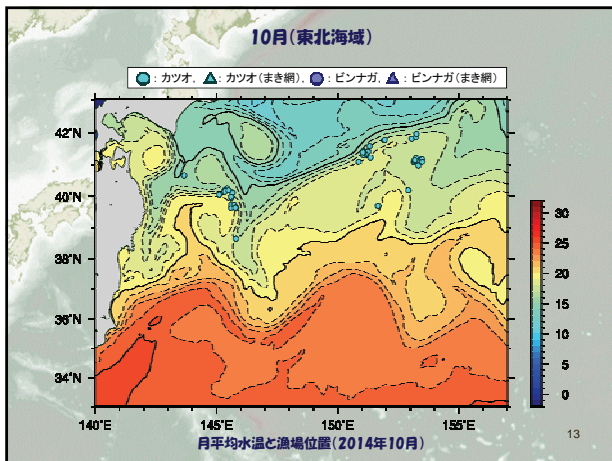
矢吹 崇
一般社団法人 漁業情報サービスセンター

東北海域の水温
かいて参ります！

1







≪第1部≫話題提供

2014年西日本ひき縄カツオ漁と近年の動向

小林慧一
(和歌山県水産試験場)



皆さん、初めまして。今日は和歌山県から参りました、和歌山県水産試験場の小林慧一です。どうぞよろしく申し上げます。

まず、こちらの写真を見ていただきたいと思います。本州最南端の串本町の串本港の荷捌き場で、2014年5月19日に新しく綺麗な荷捌き場ができました。5月19日といいますと、カツオの春漁が終盤に差し掛かった頃で、例年なら1t近くの水揚げがありますが、この日の水揚げは100kgあるかどうかという状況でした。本来ならば、向こう岸までカツオが並び、いったん入札ではけても、また次にカツオが揚がってくるという状況なのですが、たったこれだけで、2014年の不漁を物語っているかと思います。

私は本日、二平さんから2014年西日本ひき縄のカツオ漁の近年の動向というお題をいただきましたが、せっかくですから西日本に限らず、和歌山県の状況と日本全国の状況、ひき縄漁についてご紹介できたらと思います。

まず初めに、和歌山県のカツオ漁から報告いたします。和歌山県のカツオ漁は、ほとんどが和歌山県発祥のケンケン漁と呼ばれている、ひき縄漁です。3tから10t未満の漁船を用い、ご存じの方も多いかと思いますが、船の両舷から竿を1本ずつ出して、そこから釣り糸を2~3本ずつ、それと艫からも1本出して、疑似餌や、疑似餌に動きをつける潜航板、その他いろいろな種類の漁具をつけ、引き回してカツオを漁獲します。

基本的に1人で操業しています。早朝3時から4時、漁場が遠いともう少し早い時間から出漁されて、昼過ぎから夕方にかけて水揚げをするといった、日帰り操業を行っています。

このカツオのケンケン漁、ひき縄漁は、カツオがやってくる、太平洋に面した和歌山県南部地方で盛んに行われています。和歌山県下のほとんどのカツオが、田辺、すさみ、串本という3港に水揚げされます。本日より一緒に参加されている濱田さんはすさみです。

漁場ですが、1月から3月はビンナガやそれに群れる大型のカツオを漁獲し、黒潮の南縁での操業が多いです。その後、黒潮の中に入っていく、漁期後半には3~5マイル行った沿岸に近いところ、黒潮の北縁域が漁場になっています。このように漁場は和歌山県のすぐ沖にあり、和歌山県の目の前に来たカツオを漁獲し、水揚げするという操業形態です。

それでは、2014年の和歌山県のひき縄漁がどのような状況だったのかについて、水揚量から説明いたします。

主要3港の合計水揚量の月別推移をみます。赤線が2014年の値です。黒い実線の値が過去10年間、つまり2004年から2013年までの平均です。水揚量を記録しだしたのが1981年からですので、点線が過去33年間の平均を示しています。

過去10年間の平均を見ると、和歌山県のひき縄漁は、4月をピークに3月から5月の春漁が主体になっています。ここで年間の8割から9割のカツオが漁獲、水揚げされます。その後、6月以降の夏場にはほぼ水揚げがなく、11月を中心に若干まとまった量のある秋漁があります。こういった特徴を持っています。

そして、2014年の水揚量がどうだったのかといいますと、3月が5.6t、4月は24.3tと、極めて少ない漁獲でした。また、5月も42.0tと例年の半分ほどで、終わってみると、春漁は合計で72tというような結果でした。

こうした不漁年には、6月にまとまった水揚げがある年も過去にありましたが、2014年は例年どおり、6月の水揚げは低調で、夏場はほぼ水揚げがありませんでした。

一方、秋漁ですが、10月中旬頃から本格化し、10月に22.8t、11月に43.8t、12月に入り量がなくなりましたが、過去10年間の平均よりも良い漁獲量で、近年では非常に好調な秋漁になりました。春に比べて規模は小さいですが、秋漁の中ではいい年でした。2014年の秋漁は68tで、秋漁と春漁がほぼ同じという結果でした。

次に、どのようなカツオが水揚げされたかをお話しします。平日のほぼ毎日、串本港で体重測定をさせていただいて、その結果を示します。

まず、3月から5月の春漁ですが、今年の春漁は43cmから45cmが主体で、例年とそこまで大きな違いはありませんでした。しいて言うならば、41cmや42cmが多い年もありますので、若干ですが、個体が大きいかなという特徴があります。

一方で10月、11月の秋漁は、42cm、43cmが主体です。先ほど、二平さんの話にもありましたが、例年、和歌山県は50cm台から60cm前半で、2.5kg以上の中型から大型のカツオがまとまって水揚げされますが、2014年はそういった個体がほぼありませんでした。

続きまして、和歌山県における春漁の水揚量の経年変化を見ていきます。棒グラフの見方ですが、ピンクが3月、黄色が4月、黄緑色が5月の水揚量を積み上げたもので、先ほど申し上げましたように、1981年から記録があります。

そして、オレンジ色の点線が過去33年の、これまでの平均値です。グレーの点線が過去10年の平均値です。これだけを見ていただくと一目瞭然ですが、2014年の72tは過去最低の値で、過去10年平均の15%、過去33年平均のたったの9%にとどまっていました。

また、2004年から水揚げの水準が低下していることが分かります。こうした2014年の不漁現象ですが、他県でのひき縄はどうだったのかを見ていきたいと思えます。

西日本のひき縄によるカツオ漁が盛んな3県と東日本2県の水揚げ量の推移です。水色が宮崎県、緑色が三重県、ピンク色が高知県です。こちらを見ていただくと、2014年は3県でも過去最低になりました。また、和歌山県と同様に2004年以降、低水準で推移しているのが見て取れるかと思えます。

一方、東日本です。東京の八丈島も過去最低でした。千葉県も、昨年从不漁傾向が始めていまして、2014年も昨年に続く不漁という結果になっています。こちらも2006年、2007年頃から水揚げが落ちてきているのが分かります。このように和歌山県のみならず、2014年の春漁といいますのは全国的に大不漁だったと言えます。

次に、ひき縄によるカツオの水揚げがある、千葉県から鹿児島県まで、すべての水揚量を積み上げ、日本沿岸全体の水揚量を示しました。ここ10年は減少傾向で推移してきて、当然ですが、2014年は過去最低の値です。ここまでひき縄水揚量を用いて、和歌山県と日本全国の漁模様をご覧いただきました。次にカツオが日本周辺にどれだけ来遊しているのかを示す指標の一つである、CPUEを用いて説明していきます。

今回、和歌山県のひき縄漁の場合は、水揚量を水揚げのあった隻数で割り、1日1隻当たりの水揚量を示しています。2014年は17.6で、これは1人の漁業者が1日操業して水揚げできたカツオは17.4kgだったということです。和歌山県では不漁年と言われた1999年の33.6kg、2011年の26.0kgを下回る、過去最低の値になりました。

また、初めて20kgを下回りました。この時期に釣れるカツオは2kg程度の大きさですので、1日出漁しても平均10本ほどしかカツオを持って帰ってこられないということを示しています。

2004年以降、CPUEが低位になっています。ただ、今回算出したCPUEには一つ問題があります。水揚げがゼロだった船は、港についても水揚げせずにそのまま自分の船着き場に戻っていきますから、この17.6に水揚げがなかった船は考慮されていません。つまり、実際はこの値はもっと小さかったのではないかとということで、串本町のある漁業者にお願いして、操業野帳を書いていただき、その野帳から今回、CPUEを算出してみました。

まず、和歌山県では2011年が不漁年、2012年はこの10年間ではまあまあよかった年で、2013年は過去10年間で平均並みの年でした。この漁業者の、2014年のCPUEの傾向は、前の図で示した傾向とほぼ一致しています。注目していただきたいのは、2014年の値は10kgを下回っています。ですので、この漁業者の場合は平均して1日5本程度しか、カツオを水揚げできなかったということを示しています。

そこで今回、漁獲ゼロ率を算出してみました。漁獲ゼロ率とは、出漁したけれどまったく漁獲がなく、水揚げできずにそのまま船着き場に戻ってきた日の確率です。比較的良かった2012年では10%でした。つまり、10回沖へ出漁したら、1回程度水揚げできなかった日があったということです。2014年は43%で、ざっくりいうと2回に1回何も漁獲がなかったということを示しています。原油価格の高騰も考慮すると、損害がかなり大きいことを、こちらからもうかがえます。

次に、千葉県から鹿児島県までの全体をまとめて算出しました。日本沿岸と太平洋沿岸のCPUEですが、ここ10年は減少傾向で、2014年は過去最低です。このCPUEは、先ほども紹介しましたが、カツオがどれくらい日本周辺に来遊しているのかを示す、指標の一つになるかと思えます。ですから、日本周辺海域の来遊量が減少傾向であることを意味してい

と思います。

また、先ほど清藤さんからご紹介がありましたが、2014 年夏までのデータについてお話しします。中西部太平洋全体でのカツオの漁獲状況は、日本沿岸の状況と少し異なっているように見えます。1980 年代以降、まき網漁業による漁獲が年々増加しており、2013 年は過去最高を記録しました。最新の資源評価はいまだに良好な状態です。悪くなっているとはいえ、いまだ良好な状態だとしています。CPUE からみた、日本沿岸の不漁状況とは一致しないという評価です。

分布の中心域である熱帯域にはそれなりにカツオがいて、まき網漁業などで多く漁獲されています。日本周辺の来遊量が減ってきているということ、数値を使ってこちらから説明できると思います。

先ほど清藤さんから、分布の収縮現象が起きているとお話がありました。私もその点に興味があり、今回、具体的に紹介したいと思います。カツオ資源が多い時代は、分布の中心地である熱帯域のみならず、日本周辺海域を含む、分布の縁辺部にもカツオがそれなりに来遊ってきて、日本周辺海域でも多くカツオが漁獲できます。

一方で、資源が少ない時代に入ってしまうと、分布の中心域である熱帯域ではカツオがある程度いますが、日本周辺も南方もカツオの来遊量が減り、漁獲が難しくなります。今は、中西部太平洋全域でのカツオ資源の減少が心配される時代に、既に入ってしまったのではないのでしょうか。

今回、私なりに、来年の春漁がどのようになるか、和歌山県の漁業者の方によく聞かれますので、予測をしてみました。これまで和歌山県の漁業関係者の中で感覚的に言われてきた、秋漁がよければ翌年の春漁もいいという話を整理してみました。

これまでの春漁の水揚量と前年の秋漁の漁獲量を示した図をみると、傾向が似ています。つまり、2007 年や 2009 年、2011 年のように、前年の秋漁が悪かった年は水揚げがあまりよくありません。2010 年と 2008 年も同様かもしれませんが、秋漁がそれなりにいい年は、翌年の春漁もそれなりにいいということです。2012 年はその傾向から外れていますが、こういった関係が今回、得られました。

先にも説明しましたが、2014 年の秋漁は過去 10 年間で非常に好調でしたから、秋漁と翌年の春漁の関係式から導き出すと、2015 年の春漁はおそらくいいのではないかと予測できます。2015 年の春漁は、2014 年のような大不漁にはならないでしょう。ただし、2004 年から水揚水準が低下していると説明しましたとおり、2003 年以前の水準まで戻るかといえますと、そこはおそらく期待できないのではないかと考えています。

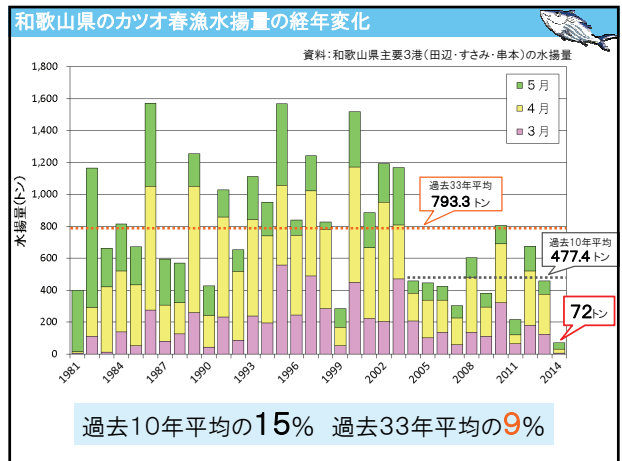
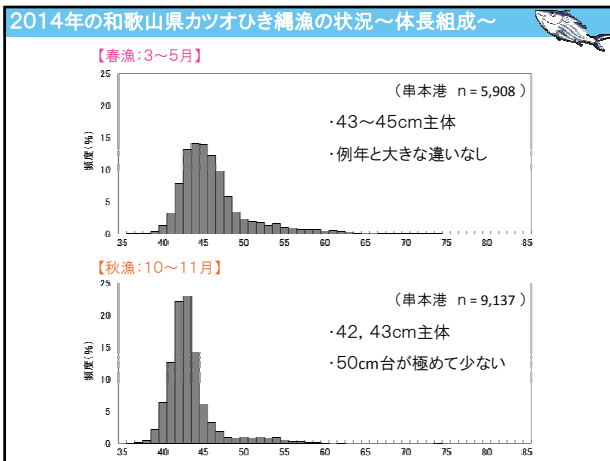
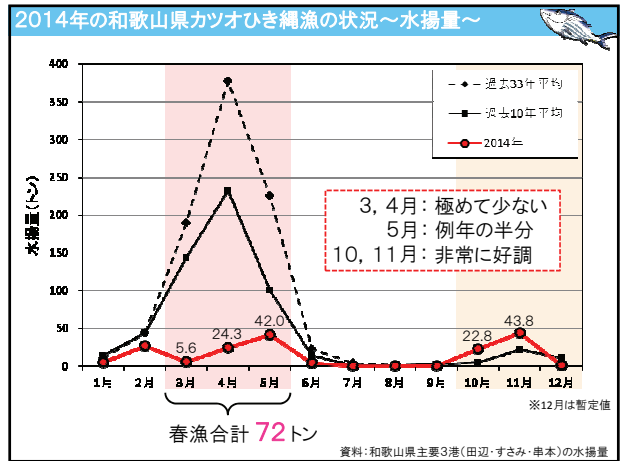
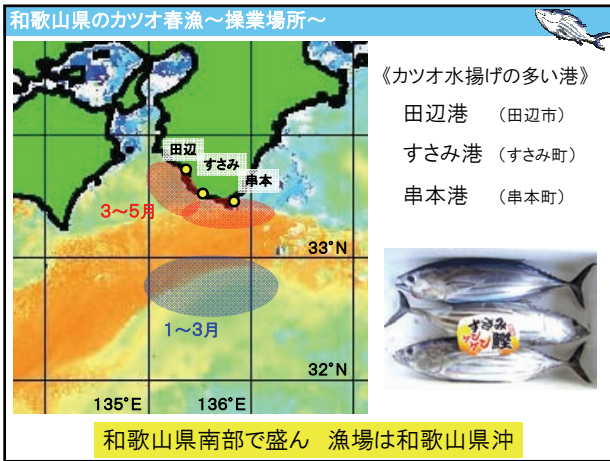
ただ、これにも問題がありまして、こういった関係性を見つけ出したのはいいのですが、これを裏付ける、カツオの生態に関わる根拠が私の中ではっきりしていません。二平さんがかねてからおっしゃられているように、カツオの秋から春にかけての回遊生態に関わるものなのか、ここ最近ですが、春に獲れるカツオと秋に獲れるカツオはとても似ていますので、熱帯域から北上する過程で何か関係性を持っているのかもしれない。類似するも

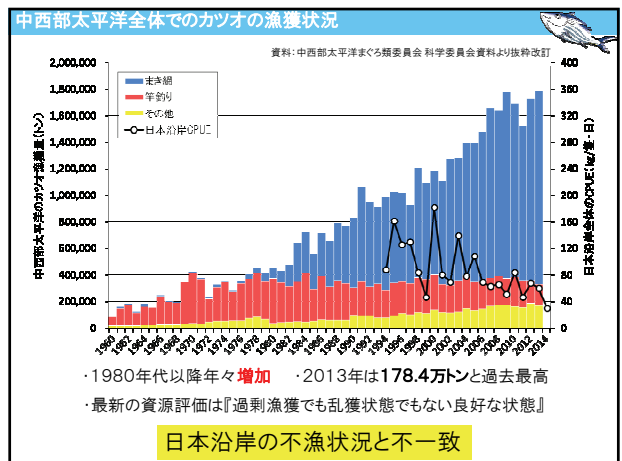
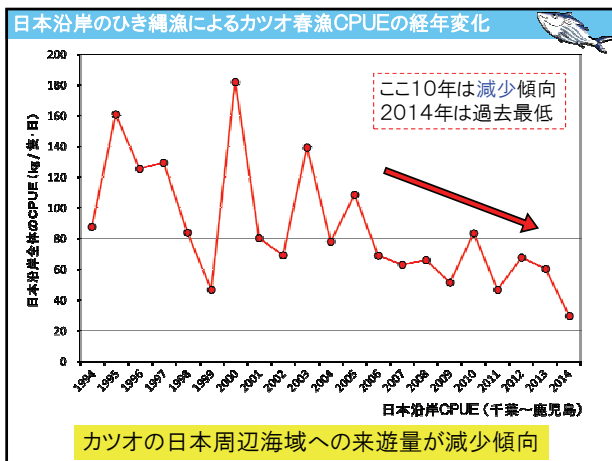
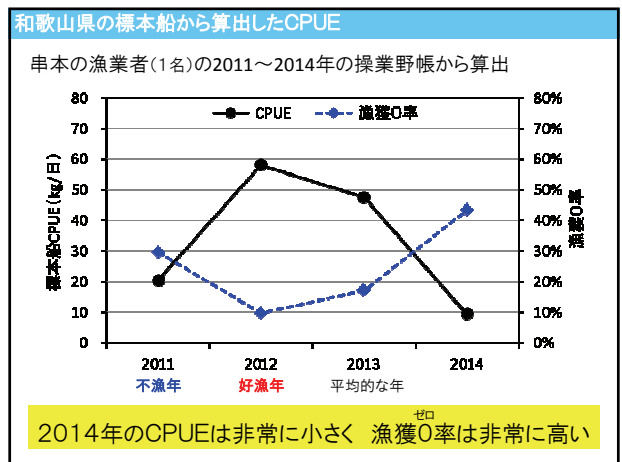
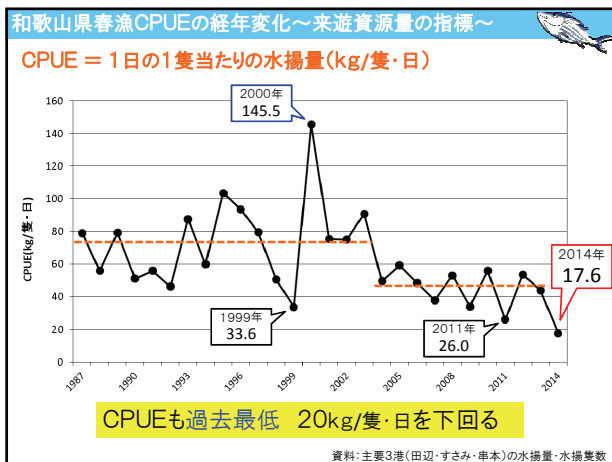
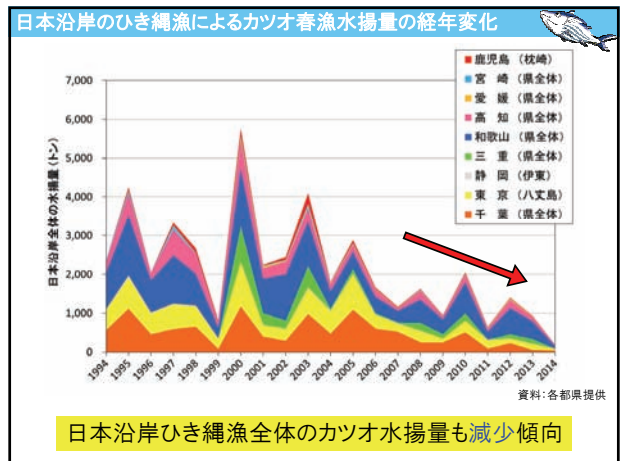
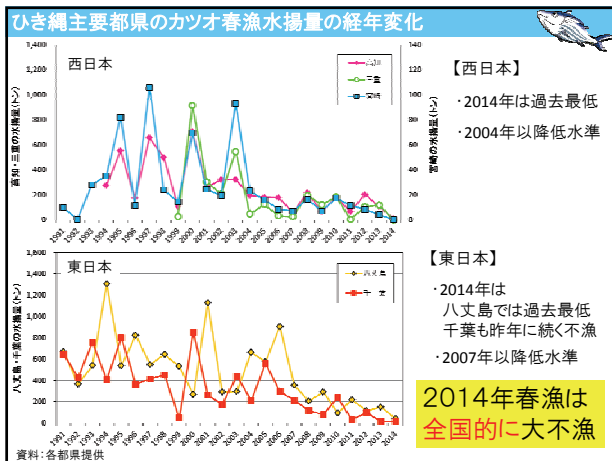
のがあるかどうかについては、今後の研究課題にしないといけないと考えています。

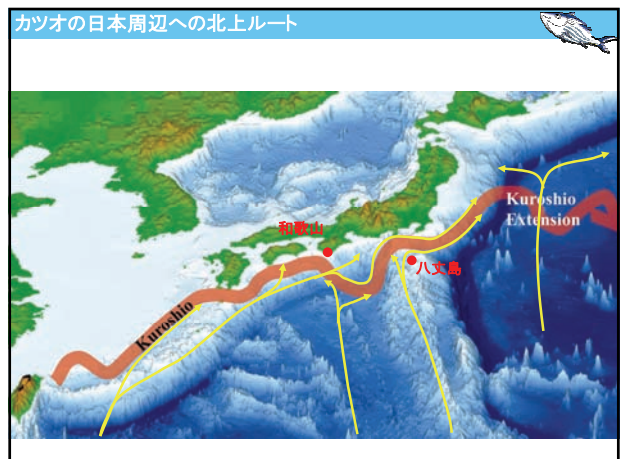
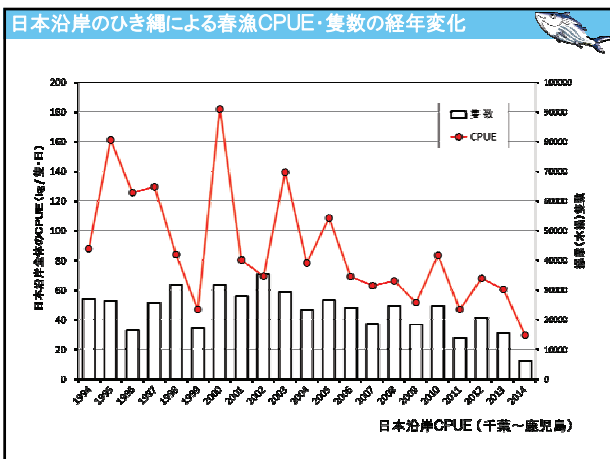
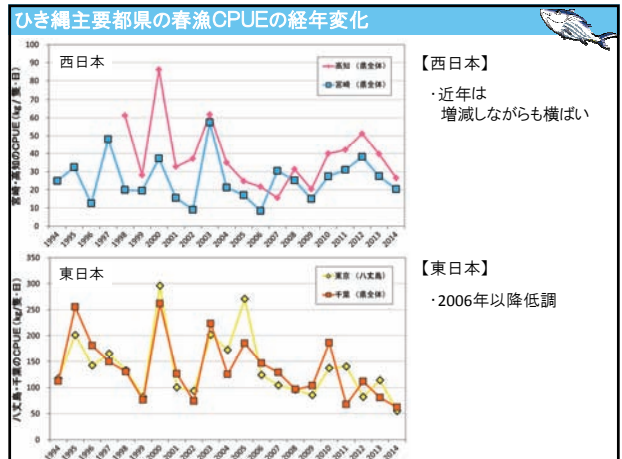
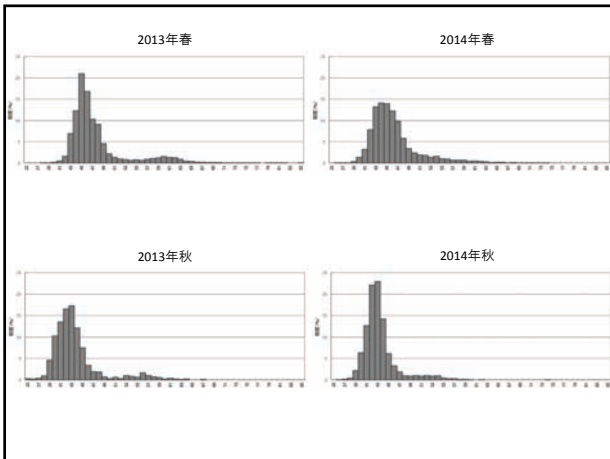
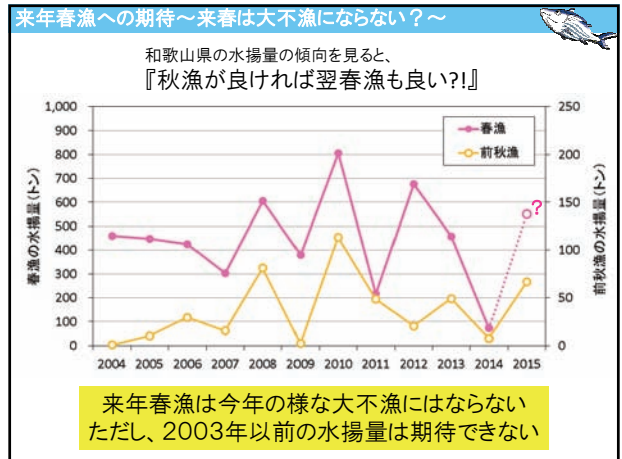
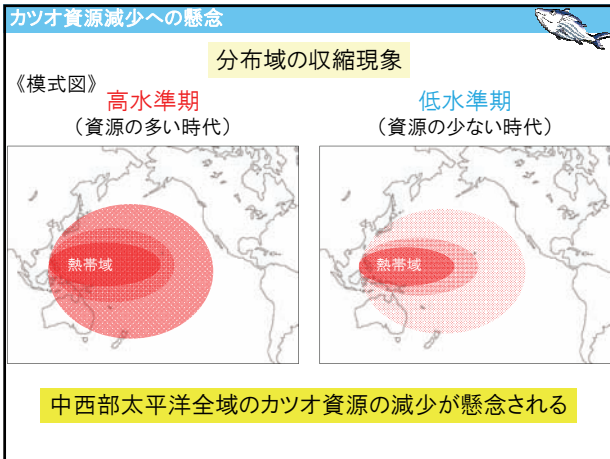
私の発表は以上です。実は、私は2014年4月に県庁から水産試験場へ赴任しまして、カツオを担当しております。勉強をしていけばいくほど思ったことは、カツオはとても日本人になじみのある魚ですが、分かっていないことが多いということです。

今後も精力的に宮崎県水産試験場などの地方水試、そして清藤さんがいらっしゃる、国際水産資源研究所といった国の研究機関と一緒にしまして、1つ1つ、カツオの謎を解いていき、カツオ資源の早期回復に今後も努力していきたいと思っています。

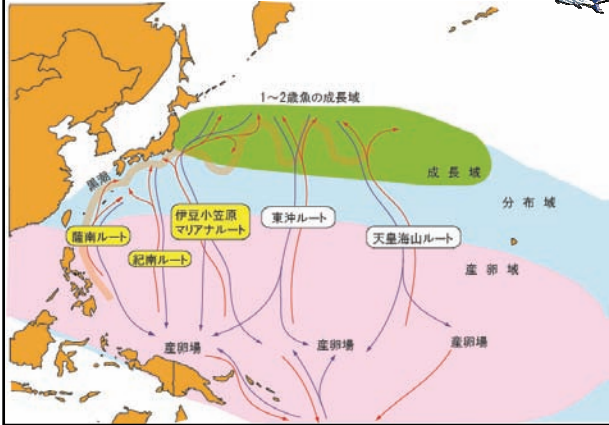
皆さん、最後までお聞きいただき、ありがとうございました。



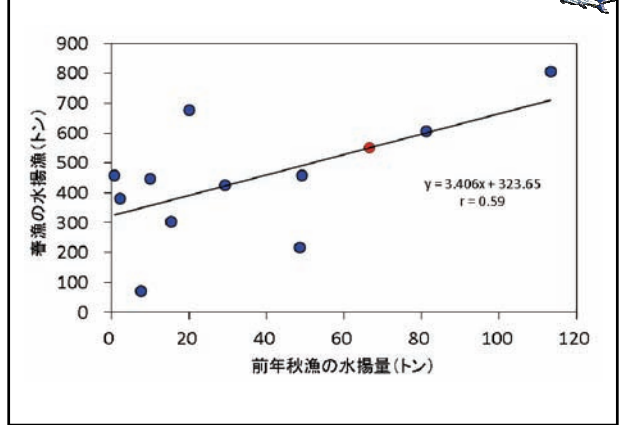




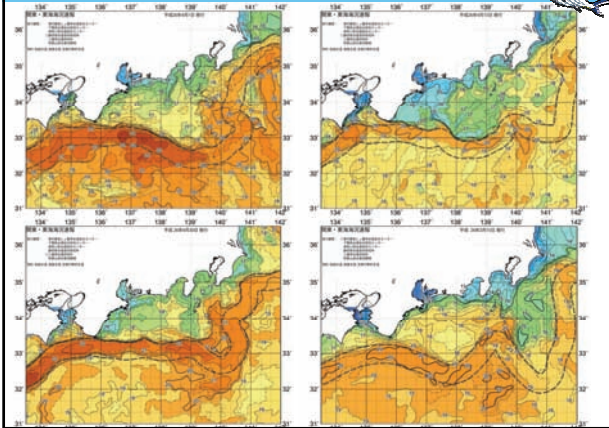
カツオの分布域と回遊経路～中西部太平洋～



前年秋漁と春漁の関係



春漁期の海況



≪第1部≫話題提供

2014年カツオ竿釣漁況と近年の動向

平山仁斗
(宮崎県水産試験場)



宮崎県水産試験場の平山と申します。私からはタイトルのとおり、2014年カツオの竿釣漁況と近年の動向について、主に宮崎県近海の竿釣りを中心に発表させていただきます。

初めに、水産試験場がデータを集計した、宮崎県の近海竿釣りによるカツオ漁獲量の推移をご紹介します。1977年からの漁獲量の推移を示した図があります。真ん中にある赤の点線のラインが過去30年平均のラインで、2.3万tのラインです。2000年頃までは、その平均ラインを越えているように見えますが、2000年以降は漁獲量が急速に落ちているのがわかります。

まず2009年に近海の竿釣りが大不漁と言われた年があり、そのときのカツオの漁獲量が1.2万tです。その後、多少漁獲量が増加するものの、2014年は宮崎でも漁獲量が1.1万tで、過去最低となる見込みです。

次に、漁場の変遷を1987年から10年毎のスパンの図で見ていきます。図中の丸はCPUEで、一つのマス目における、漁獲量を有漁隻数で割った数値になります。

1987年は、日本近海に幅広く分布しているように見えますが、10年後の1997年には、まだ近海域に分布が広がっているものの、南方海域で縮小しているのが見てとれます。さらに10年経った2007年はというと、まだ分布域は近海域にありますが、西から東沖に主漁場が移っているように見えます。

さらに2014年の漁獲量を出してみました。分布域はパッと見、ある程度広がっているように見えますが、CPUEを示す丸の1つ1つが、特に日本近海域で小さくなってきているように見てとれます。これは1つ1つの漁場が小さくなってきていることに関係していると考えられます。また、2014年は、南に分布域が広がっているように見えますが、不漁との関連もあり、特異的に春先に北上群が薩南海域や沖縄周辺からなかなか見られなかったために、漁船が南下して漁獲せざるを得なかった状況が反映されているものと言えます。

水産試験場では1977年からの30年間のデータを解析し、カツオ資源の推移を調べました。日本列島を8つの海域に分け、それぞれ漁場別の漁獲量や努力量、漁場面積等のデータに、資源解析の田中の方法を用いて、資源量指数及び漁業密度の指標値から解析をおこないました。

資源の指数は、感覚的には日本近海域における資源量を意味しています。魚群密度は魚群の密度のことです。計算方法の考え方を説明しますと、資源量指数は対象区画、つまり

緯度と経度の位置毎における CPUE を集計した値です。魚群密度はその対象区画の CPUE の平均値として出された数字です。

1977 年からの資源量指数の推移をお見せします。1977 年以降、1980 年代から 1990 年代半頃まで、資源量の水準は 1,400 台前後と高い数字でしたが、1990 年代後半から近海域で特に減少していき、近年では 1,000 台を下回る水準に下がってきています。

西と東で分けた資源量指数をみてみます。東のエリア、特に東と伊豆南、三陸の海域のグラフの見方ですが、棒グラフが東沖と伊豆南で、赤い折れ線グラフが三陸の推移です。

三陸のグラフは 2000 年頃にピークがあり、それ年以降は右肩下がりになっていることが分かります。魚群密度のグラフに移ると、青線が東沖の海域で、赤線が三陸海域の推移を示しています。やはり 2000 年頃から右肩下がりになっています。東沖も同様に、資源量指数も魚群密度も、同様に下がってきているということから、CPUE そのものの数値が全体的に下がってきていると言えます。

次に西側ですが、中南洋、薩南、紀南海域をグラフにしました。青の棒グラフが中南洋海域で、黒線が薩南海域、赤線が紀南海域の推移を示しています。特に中南洋の値が高いですが、1977 年以降、ずっと右下がりということがわかります。同様に薩南、紀南の海域でも、やはり右に下がってきています。

冒頭でも少し説明しましたが、2014 年の春先に漁船が南下して漁獲した影響で、中南洋海域の資源量がプラスされたということが、今年の特徴です。

さて、中南洋、薩南、紀南海域の魚群密度ですが、資源量指数と比べると、右肩下がりにはなっていません。つまり、西側では、資源量指数はかなり右に下がっている一方、魚群密度はそれほど下がっていません。それは主に分類域、漁場の分布そのものが狭まったことを意味していると考えています。

一方、2014 年における宮崎県沿岸のカツオひき縄漁獲量についてですが、2003～2014 年のデータをみると、沿岸でも極端に下がってきており、他県と同様に 2014 年は極端な不漁になっています。

また、2014 年の近海竿釣船の地域別漁獲情報のグラフがあります。青がカツオで、ベージュがビンナガ、赤がその他です。近海竿釣りの特徴は、5 月から 7 月頃にカツオやビンナガを漁獲しているという点です。2014 年 10 月末時点での近海竿釣の漁獲量は、QRI の速報値で集計をしたところ、約 2.1 万 t で、そのうちカツオは約半数の 1.1 万 t でした。過去 5 年間での平均値と比べると約 7 割の水準でした。

2009 年の近海竿釣りは大不漁年と言われ、その時のカツオ漁獲量は約 1.2 万 t でした。その後、2010 年と 2011 年にやや回復したものの、2012 年にはカツオが 1.3 万 t とまた不漁の年となり、2014 年は約 1.1 万 t になってしまいました。

2014 年をもう少し見てみますと、最初の 2 月から 4 月頃から既にカツオの漁獲水準が低く、その後も月当たり 1 千 t を前後するような数字です。つまり、年間を通してずっと低調で推移した結果、2014 年の年間漁獲量が過去最低となったということです。

2014年について、出現割合の数値から、%で表した各銘柄のサイズ毎の月別組成をみます。2月、3月に、6kg以上の特大サイズの割合が3割から4割となっていますが、2月、3月頃は薩南海域や南方海域へ南下せざるを得ない状況だったことから、中南洋に近いところが漁場で、魚体のサイズが大きくなっている特徴があります。

簡単ですが同様に、2009年から月別組成のデータをお見せします。2014年はやはり2月、3月が特大以上のサイズの割合が高いことが特徴ですが、2009年から過去5年に関しては、4月以降、大きさの違いはさほど見られません。ただ、2013年度と比べると、極小以下のサイズの割合がやや高い傾向がありました。

2014年の漁場ですが、年毎の操業位置を分布図で示しました。上の段は2014年の漁場、下の段が2013年の漁場をプロットしたものです。2014年は、漁期の最初に漁場が薩南海域よりも南にあったことが、分布図にも反映されています。5月になると漁場が徐々に東沖に移っていきませんが、例年、この傾向がみられます。続いて6～10月ですが、やはり主漁場は、東より中心の海域です。2013年と比較しても、似たような傾向だと思います。

まとめとして、日本近海域の資源量指数について説明してきましたが、過去30年のデータで見ると、明らかに漁獲量が減少傾向にあるといえます。

2014年の漁況は近海カツオに竿釣り、沿岸ひき縄ともに、過去最低となる見込みです。2014年の不漁は、春先からテレビなどでいろいろ報道され、原因は春季の低水温などの海況による影響とされていました。清藤さんからの報告にもありました。また、赤道亜熱帯海域の漁獲圧という、直接的な資源への影響も挙げられます。

資源学の田中氏は、資源の減少に伴う不漁はしばしば、分布域の限界付近で最も激しく表れる、と言われていています。現在のところ、総合的にも客観的にも、資源量全体の減少は日本近海竿釣りに影響を及ぼす主要因とするのが妥当ではないかとも考えられます。いずれにせよ、研究の精度をさらに高めていく必要があると感じています。

現状と課題ですが、漁業者の皆様方にとっては今後のことが一番の懸念事項、不安要素だと思います。来遊魚の低水準が継続するのか、もしくはさらに低下してしまうかもしれないという懸念があります。近年、日本近海域の漁獲量のCPUEは明らかに低下してきています。まとめの中で少し触れましたが、来遊魚低迷の中、WCPFCの国際会議は、カツオ資源量は良好と判断されています。

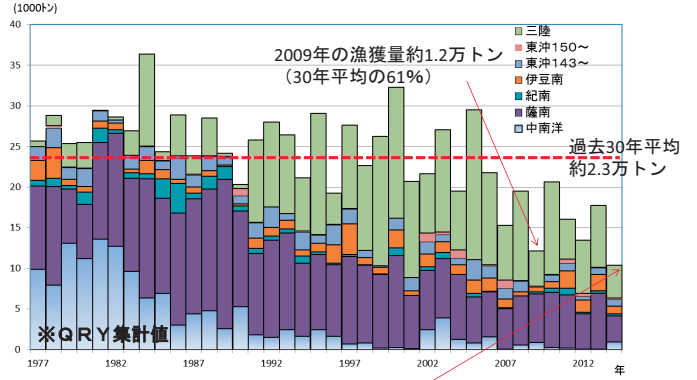
今年のWCPFC国際会議では、日本沿岸の来遊資源量の減少を科学的に示したことで、赤道域における高漁獲圧及びカツオ資源分布域縮小の認識が共有されたというところまで来ています。しかし、資源評価におけるCPUE算定方法など、まだまだカツオ資源を解明していく上で課題が多いのも現状です。

今後、当水産試験場、さらには国や県からの関係機関が共通の認識に立ち、カツオ資源の解明に向け、迅速かつ精度の高い資源解析につなげるため、連携して取り組んでいくことが重要と考えています。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

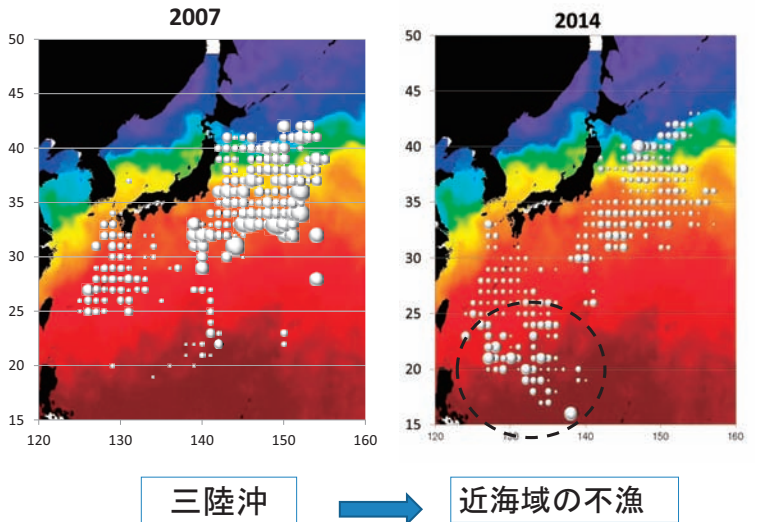
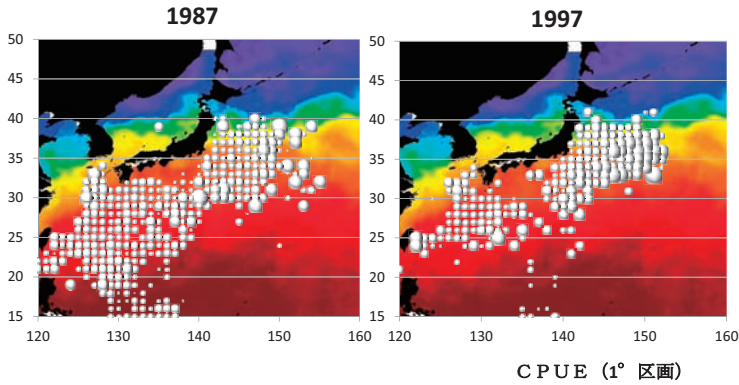


本県の近海竿釣によるカツオ漁獲量の推移

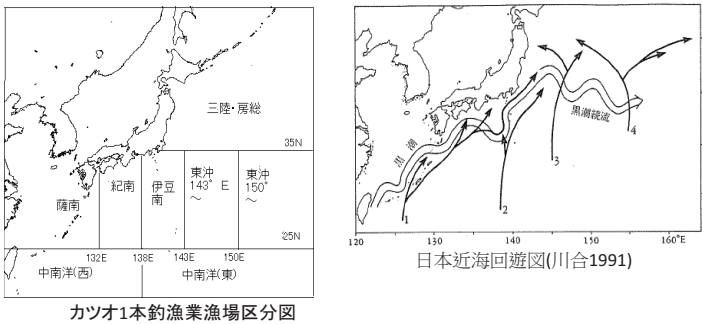


・2014年漁獲量は約11,000トン（QRY10月末時点速報値）と過去最低となる見込み。

漁場の変遷、近海域全域から主漁場へ(CPUE分布)

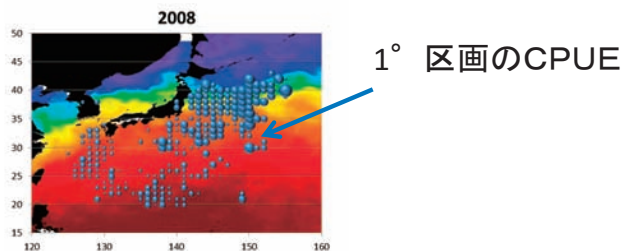


不漁原因を探るため、来遊量に関わる指標を30年間、解析



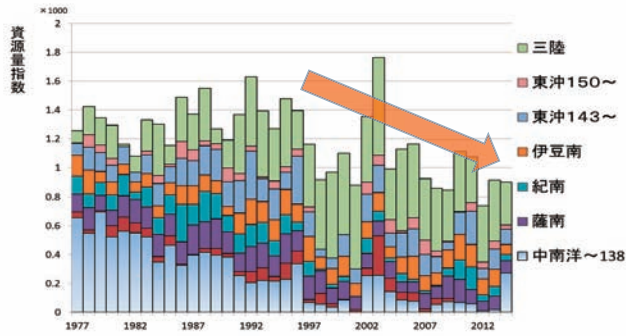
資源量指数と魚群密度

- ・資源量指数は対象区画の緯度、経度1° 毎のCPUE(漁獲量/有漁隻数)の集計値
- ・魚群密度は対象区画のCPUEの平均値



・漁場別の漁獲量、努力量、漁場面積から、資源量指数及び魚群密度という指標を用いて解析を行った。(指標はいずれも田中昌一1957,2006 による)

資源量指数(来遊量)は減少傾向

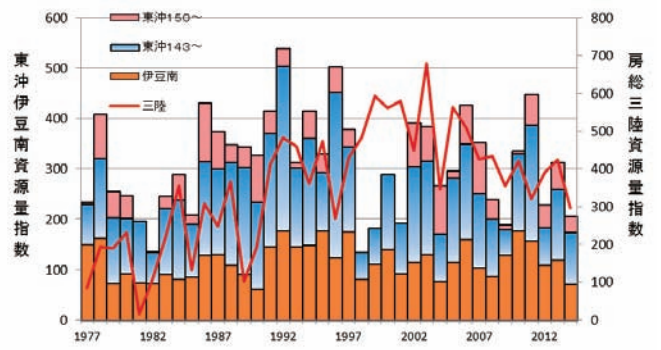


80~90年代半ばは、1400台前後と高い水準

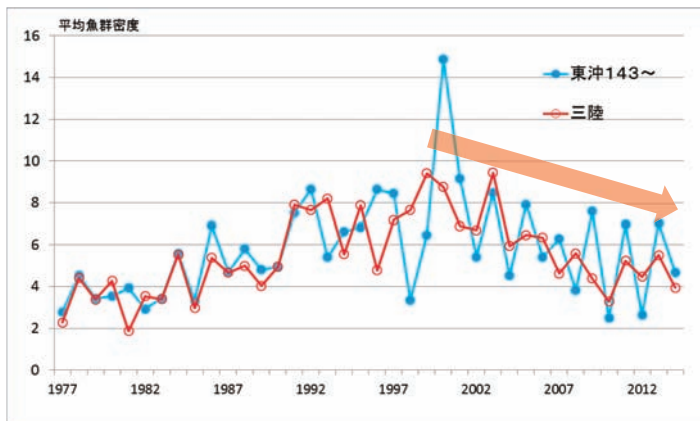


90年代後半から、近海域で減少し、1000台を下回る水準に

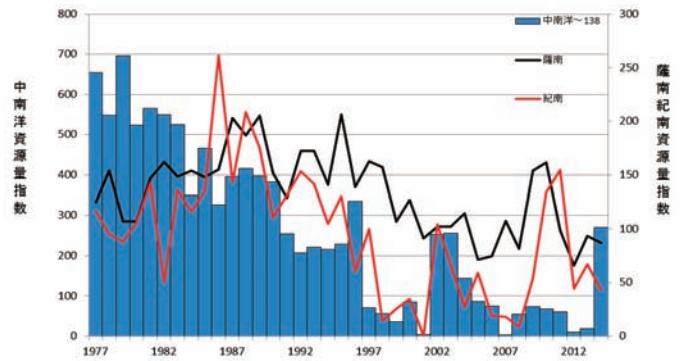
三陸での資源量指数が低下



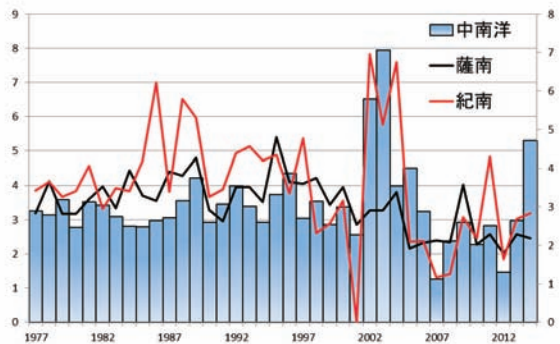
三陸、東沖漁場の魚群密度



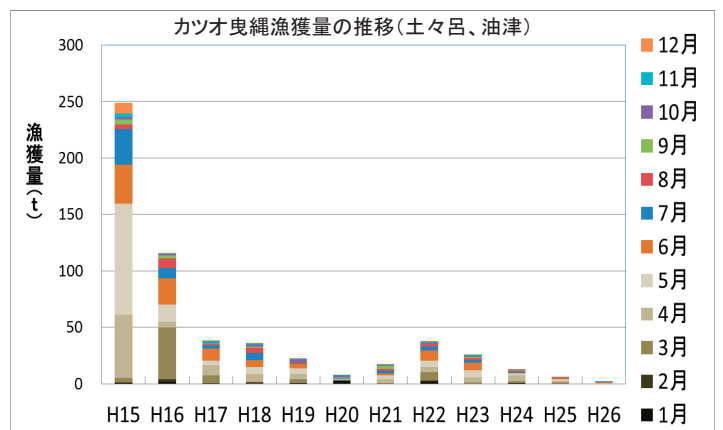
中南洋、薩南、紀南の資源量指数の推移



中南洋、薩南、紀南海域の魚群密度の推移

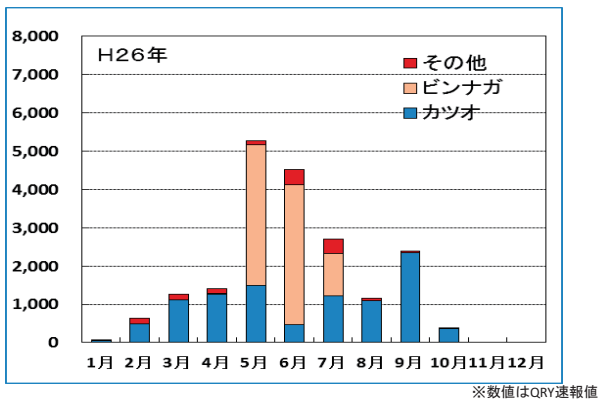


一方、近年の宮崎県沿岸では



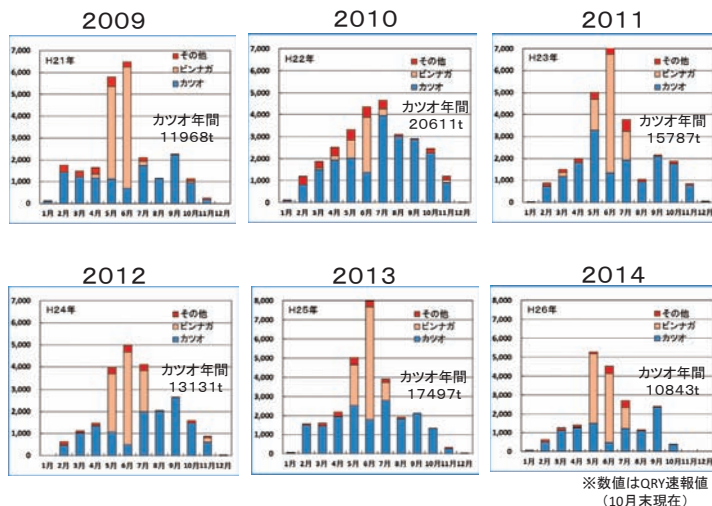
※H26は11月末現在

今年の近海竿釣り船の月別漁獲状況

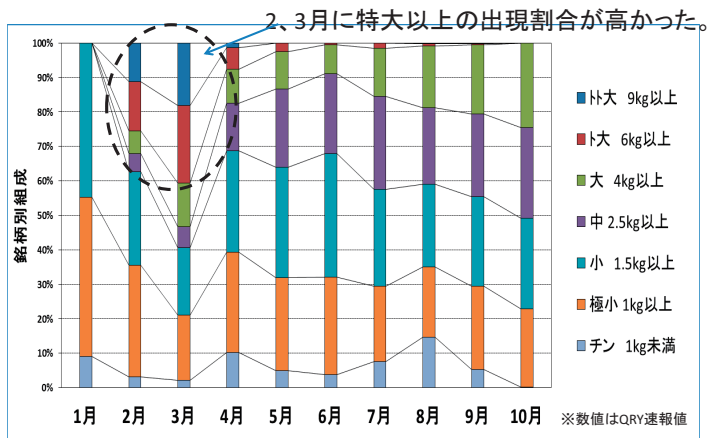


・平成26年10月末時点で近海竿釣り漁獲量は21,265トン。その内カツオは10,843トン。過去5カ年平均の約7割。

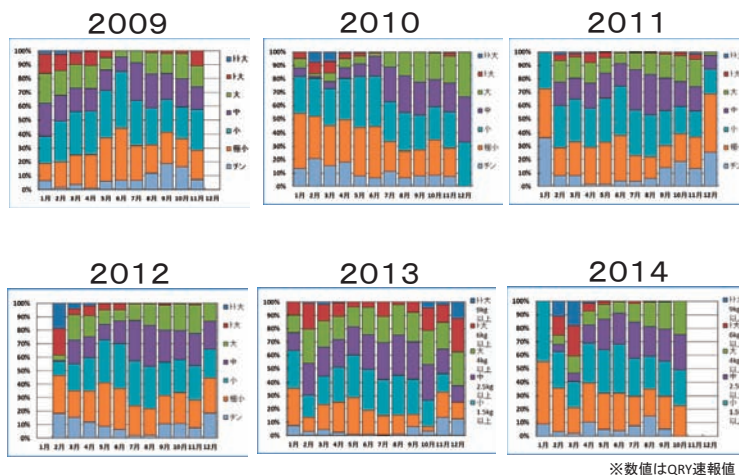
近年の近海竿釣り船の月別漁獲状況



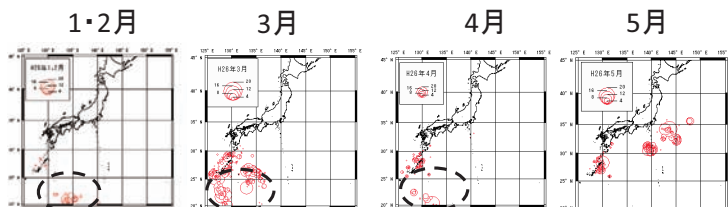
今年の月別カツオ銘柄組成



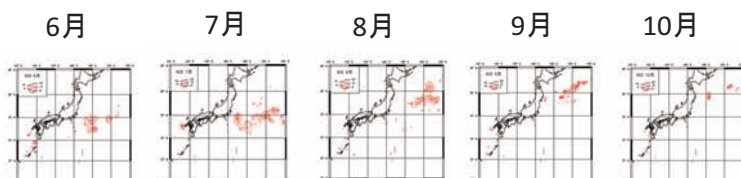
近年の月別カツオ銘柄組成



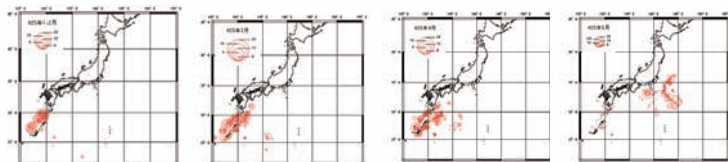
今年の漁場の移動(1~5月)



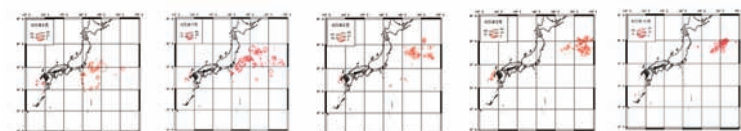
今年の漁場の移動(6~10月)



昨年の漁場の移動(1~5月)



昨年の漁場の移動(6~10月)



まとめ

- ・日本近海域の資源量指数は明らかに減少傾向。
- ・今年は今海カツオ竿釣り、沿岸曳縄ともに漁獲量は過去最低となる見込み。



今年の不漁について

- ・春期の低水温など海況による影響!?
- ・赤道・亜熱帯海域での漁獲圧!?

資源の減少に伴う不漁は、しばしば分布領域の限界付近において最もはげしくあらわれる。(田中昌一)

→ 全体のカツオ資源量の減少が日本近海竿釣りの不漁をもたらす主要因と考えるのが妥当ではないか!?

現状と課題

「来遊量の低水準継続もしくは低下の懸念」

- ・近年、日本近海域の漁獲量、CPUEは明らかに低下
- ・来遊量低迷のなか、WCPFCにおいてカツオ資源量は依然**良好**とされている。



今年の世界水産資源管理機関(WCPFC)国際会議において、日本沿岸の来遊資源量の減少を科学的に示し、国際会議の中で**赤道域高漁獲圧及びカツオ資源分布域縮小の認識は共有**された。



しかし、資源評価におけるCPUE算定方法など解析上の課題は多い。

今後も国や県など関係機関が共通の認識に立ち、カツオ資源の解明に向け、迅速かつ、より精度の高い資源解析につなげるため連携し取り組んでいくことが重要と考えている。



≪第2部≫パネル討論

司会：二平章（漁業情報サービスセンター・茨城大学人文学部）

清藤秀理（（独）水産総合研究センター 国際水産資源研究所）

矢吹 崇（漁業情報サービスセンター）

小林慧一（和歌山県水産試験場）

平山仁斗（宮崎県水産試験場）

濱田敏雄（和歌山県すさみ町 沿岸小型曳き縄漁船[澄丸]漁労長）

鈴木正男（千葉県勝浦町 沿岸小型曳き縄漁船[天松丸]漁労長）

浅野貴浩（宮崎県南郷町 近海一本釣船[5 清龍丸]漁労長）

上牧英男（宮崎県南郷町 近海一本釣船[88 正丸]漁労長）

岩切孝次（宮崎県南郷町 近海一本釣船[8 三代丸]船主）

二平：報告者の皆さん、大変素晴らしい報告をありがとうございました。今年の漁模様と、国際的な資源をめぐってどのような議論がされてきたのかについて、会場の皆さんも理解していただけたかと思います。ここから先は、壇上の皆さんと一緒に討論をしていきます。壇上の方々の経歴についてはプロフィールに掲載されていますので、ご覧ください。

海上や漁村の状況、調査の現場など、いろいろな立場からカツオを見ていらっしゃる方々の意見を中心に、壇上からも会場からもお話を伺いながら、進めていきます。皆さん、よろしく願いいたします。

まず、研究者の方々が報告されたように、私も2014年は非常に不漁だったと認識しています。まず、現場である海からみた2014年の不漁について、漁労長さんや船主さんから話を伺います。最初に和歌山県すさみ町の澄丸の濱田さんから、和歌山県の曳き縄の状況をお願いします。



濱田 : 皆さん、こんにちは。和歌山県の片田舎から来ました、濱田敏雄です。よろしくお願ひします。今、二平さんが言われたように、2014年の和歌山での漁は大変な不漁です。私らが漁場に行っても、魚が全然見えません。2014年の漁獲の最高は、すさみ町で1隻当たり100kgほどが2日あった程度です。



和歌山県水産試験場の小林さんが詳しく説明されていたように、すさみ町の人口の80%は曳き縄漁で生活しています。ですから、僕たちにとって不漁は死活問題です。和歌山県は漁場が少し悪いので、曳き縄漁以外は考えられません。養殖ももちろん無理です。私は45年間、曳き縄漁をやっていますが、こんなに悪い年は今まで見たことがありません。

八丈島や長崎県の対馬周辺まで出漁しますが、全国でも同じ状態です。2005年まで長崎県対馬へ、ヨコワを釣りに行っていました。最近では4隻ほどの出漁です。それと言うのも、魚が獲れないからです。大変困っています。

二平 : ありがとうございます。次に、千葉県勝浦町の天松丸の鈴木さんから、千葉県を中心とした今年の状況を伺います。

鈴木 : 千葉県の鈴木です。よろしくお願ひします。

最初に2点、宮崎の方へお礼を申し上げます。1つは、宮崎県の方々は勝浦にカツオを水揚げしてくださっています。勝浦は市民を挙げて歓迎し、ありがたく思っています。皆さんが水揚げして下さるおかげで、勝浦は賑わっています。2つ目に、私どもは宮崎県の方からはえ縄で使うナイロン縄を教わりました。本当にありがとうございます。

先ほど和歌山県の濱田さんと話をしましたら、1995年にお会いしたとおっしゃるのです。カツオが少なくなってきたのは1995年頃で、当時「漁村」という雑誌で編集をされていた神山さんが、全国のカツオ関係者の組織をつくり、東京に集まったことがあります。その時にお会いしたようで、水産庁にも一緒に行きました。カツオが少なくなっているということ、その当時から感じていたのです。

水産庁に行った話ですが、結局は水産庁も水



研の研究者も真剣に取り上げてはくれませんでした。漁師はみんな、カツオが少なくなって困っていて、この状況はおかしいと訴えても、当時の遠洋水産研究所の研究者は「カツオは減っていませんよ、赤道付近にたくさんいますよ」と言うだけでした。漁民が集まっていくら声を出しても訴えは届かず、そこで止まってしまったのです。

だから今日、私がここに来ました理由は、カツオは本当に大事な魚で、勝浦を支える大きな柱の一つだとお伝えしたいからです。その大事なカツオがだんだん減って行ってしまい、2013年も2014年も最悪でした。カツオが駄目になると、漁師になる人が少なくなって、後継者も減ります。水揚げと地元の産業は連動しています。水揚げが落ち込むと、若い人の職場が少なくなって、若い人は地域外に出て行ってしまいます。そうすると子供もいなくなり、学校の生徒も少なくなって、負の連鎖です。勝浦にとって、カツオはとても大事な産業です。

市場ならカツオがダメでもキンメやサバ、アコウ、メヌケといった他の魚で商売ができます。千葉のカツオ漁師はカツオが駄目ならキンメを獲るなどして、なんとかしのいでいますが、和歌山県や三重県、静岡県、福島県、茨城県はみんな小さい船での曳き縄漁です。今年、三重県から来た船の中には10日間出漁しても1匹も釣れないという漁業者がいました。結局、油代も稼げずに帰ったというほどひどい状態です。本当にカツオが少なくて困っています。

二平 : ありがとうございます。それでは、一本釣りの漁労長をされています、第5清龍丸さん、海を走り回って魚を追いかけてきた立場から、2014年の感想をお願いします。

浅野 : 宮崎県の浅野です。今年は春から南方に行っても魚が見えないとか、魚場が形成されても狭いとか、漁場にたくさん漁船が乗り込んでいくとつぶれるとか、とにかくおかしいです。

2014年は僕も1航海か2航海は魚が釣れずに帰ってきた状況で、なかなか魚が少ない状況でした。大体、1年に1千t以上釣るのが自分たちの仕事と思いますが、1千t以上釣らないといけないのだけれど、2014年は大概の船が1千t以下だったと思います。10月になると台風が来て、水温が下がり、ぱたりとカツオが見えなくなって、本当に困った状況でした。水揚げがない日は船主も大変だけれど、船員も大変です。





二平 : ありがとうございます。それでは、88 正丸の漁労長さんの上牧さん、よろしくお願いします。

上牧 : カツオが少ない、この一言です。いろいろなことを言っても結論は一緒です。少ない。これだけです。

二平 : 海の上で群れを見ていて、2014 年は春からずっとカツオが少ないという感じでしたか。

上牧 : そうです。

二平 : 上牧さんはこれまでのシンポジウムにもたびたび登場していただき、私もいろいろご指導いただいています。また後からお話を伺いたと思います。最後に、以前は漁労長をされていましたが、現在は船主になられた、8 号三代丸の岩切さん、よろしくお願いします。

岩切 : 岩切です。2013 年と 2014. 年を比べてみました。南郷漁協にはカツオ船が 13 隻所属しています。カツオだけではなく、ビンチョウも含めて、2013 年の漁獲は 1 万 5,900t 程度でした。2014 年はずっと減って 1 万 2,200t ですから、大体 3,700t 減っています。先ほどグラフがありましたが、半分以上はビンチョウです。いかに 2014 年はカツオが少なかったかということを数字が示しています。



二平 : ありがとうございます。以上が曳き縄、一本釣りの漁労長さん、そして船主さんから見た、今年のカツオ漁の状況です。先ほど、研究者の方々の統計にも表れていましたとおり、実際に経営をされている方々にとって、大変厳しい年でした。

その時に、漁が良い時代を振り返ってもらうのも何なのですが、ただ、今の若い方々や、先ほど発表された研究者の方々も含め、統計上でいい時代を見ることができても、実際の話はご存じないと思います。カツオをたくさん釣っていた時代は、どういう操業であったり、群れだったのかについて、少し昔を振り返り、若い人に教えるつもりでお話してください。澄丸さん、和歌山県の曳き縄の状況から、よろしくお願いします。

濱田 : 和歌山県の曳き縄の状況ですが、個人的なデータをここに持ってきています。一番良いときは1995年頃で、1日最高800kg獲れたときもありました。それ以降は先ほど示されたデータの通りで、2004年は獲れても1日200kg程度です。

2010年に若干上向きするときもありましたが、これも個人的なデータですが、カツオの漁獲が1,800kg程度の月が3か月続いていました。この量は1993年や1994年頃であれば3日で釣れる量です。それを1カ月もかけて漁獲して、まあまあ良い方だったかなと。

2010年から2012年とだんだん落ちていき、2014年の漁はいいときで1日100kgです。それまではナブラを見かけたら、カツオを300kgから400kgくらい、確実に獲れました。房総沖から八丈沖まで、ずっと一緒です。

4月から5月、僕らはカツオを追いかけて伊豆へ行くのですが、2014年は良いときで1日1tです。だから、2日くらい島で暮らして、小田原や下田、焼津へ水揚げをしていました。

漁が良い時代はまき網が1日250t獲っても、僕らもカツオが釣れるので、さほど気にしていませんでした。だけど最近、まき網の漁獲が250tと聞いたらびっくりします。

鈴木 : 千葉の状況ですが、漁船にはトモ帆、スパンカーセールという、キンメやサバといった底物を釣るために使う道具があります。桜の花が咲く頃になると、漁業者は毎年カツオの漁獲に備えて、全船がスパンカーを外して、カツオの準備をしていました。

漁獲が良い時は、出漁すれば全員漁ができるというほどで、本当に3月から6月はカツオだけを追いかけていれば大丈夫でした。今は誰もスパンカーを外す人がいない。カツオの準備をする人もいなくなりました。もう、出漁してもカツオだけでは食べていけないのです。

10隻もいれば1隻か2隻当たる船もありますが、外れる船がとて多いです。そして油代が高くなってしまって、カツオが獲れた時代は本当にもう夢のようです。長年漁師をしている人間はみんな、桜の花が咲く時分になるとスパンカーを外したということ覚えていますが、今の若い人にはそういう状況が分からないでしょう。当たり前に来ると思っていたカツオが来なくなりました。

二平 : 曳き縄について少しお聞きしたいのですが、私もいろいろ聴き取り調査をしました。千葉県岩和田の組合長さんや高知県久礼の漁業者さん、宇佐の曳き縄の方々、和歌山県の方にも伺いました。

曳き縄の漁業者さんのお話で共通しているのは、カツオがたくさんいた時は黒潮の縁へ行くまでに、群れが手前の陸側にいたということです。黒潮の、陸側の

縁まで船を進める前に、千葉県も高知県もカツオがいたそうです。

高知県ですと、土佐湾の中、高知の方は「野っ原」と呼んでいるところです。黒潮牧場などのブイがない時代ですが、黒潮に当たる手前の陸側にある「野っ原」から群れがたくさん見えていたと伺いました。まずは黒潮の北縁まで行かないうちにカツオが釣れて、港へ戻っていた時代があって、その群れが見えなくなってから、黒潮の北縁へ行くようになったそうです。

昔は黒潮の北縁へ船を並べれば、どの船も群れに当たったそうです。しかし、だんだんと群れが少なくなり、並んでいても漁獲がないものだから漁場を探すようになって、そうしてそのうち 1 隻が群れに当たると黒い煙を出して、そこに皆が集まるということです。群れに当たった船は煙を出すものですか？

鈴木 : 群れを見つけますと、そうですね、煙を出します。

二平 : そうすると、その漁場にカツオ船が集まってきて、そこで競争になると聞いたのですが、いかがですか。

鈴木 : 潮目に乗るとカツオがたくさん釣れます。煙が出ると次々船が来ますから、その潮目から離れて別の潮目に行けば、必ずカツオの群れに当たります。だから、船が来たら沖へ出れば間違いない。そういう動きをすれば必ず釣れていました。今は、潮目を外してしまいますとポカと言いますか、まったく当たりません。だから、カツオがたくさんいる潮目がとても大事です。カツオがいる範囲はすごく狭くなってきています。

濱田 : 今、天松丸さんがおっしゃったとおりです。私も他の漁船がいるナブラを追いかけることはしませんでした。次のナブラがいくらでもあったからです。

僕は約 35 年前にこの宮崎県沖までヨコワを釣りにきたことがあります。油津から目井津沖の方です。35 年ぶりに油津の港を見ました。市場が大きくなっていましたが、一番感じたことは船の隻数が減ったことです。

最初にいなくなったのはヨコワです。ヨコワがいなくなり、カツオもいなくなっていきました。僕は日本一の漁場の、長崎県対馬へ 9 月から 12 月にかけて 15 年ほど出漁しました。行けば 700kg から 800kg という漁獲量が 3 日も 4 日も続きました。カツオと違い、ヨコワですよ。

けれども日本海のみき網のおかげで、今は獲れても 100kg とか、50kg です。そういう現状になっています。

二平 : 聞きとり調査によりますと、黒潮の北縁に船が集中していると、黒潮の外側の

南縁へ行くとちゃんとそちらにもカツオ群がいたそうです。

カツオの群れが少しは少なくなっても、だんだんエンジンを大きくし、船を立派にすることで、漁場を探し回れるようになり、沖までの広い範囲を動けるようになってきました。こういう歴史があるので、1990年代は群れが減っていても漁獲量は何とか維持することができました。カツオの群れが少しずつ薄くなっていましたが、船を整備することで水揚量を稼げた時代がありました。

しかし、カツオがどんどんいなくなってしまう、いくら努力しても獲れなくなってきました。船の装備を立派にして、かなり広範囲を動いてカツオを漁獲していた時代はありましたか？

濱田 : ありましたね。現在、僕の漁船は520馬力のエンジンです。すきみでは10年に1度、エンジンの入れ替えをやっていました。人より早く漁場に行って、早く釣って、そして遅くまで辛抱して漁場をまわって、セリの時間に間に合うように帰港していました。当時は18~20ノットで行き帰りしていましたが、現在は魚が獲れないので、約10ノットで操業をして、行ったり来たりをしています。

正直な話、皆さんもおっしゃられていたように、カツオは黒潮の北口にいないでも、黒潮の沖へ出ればいくらでもいました。70マイルも80マイルも行けばカツオの群れが見えて、確実に釣れました。今は、どこまで走っても群れが全然見えません。

二平 : 千葉の鈴木さん、いかがですか。漁業者の努力で、ある程度水揚げを確保できていた時代はありましたか？

鈴木 : カツオがたくさんいたから、頑張れば儲けになっていました。例えば、八丈島まで行く場合、夕方7時から8時に一度水揚げをして、そのまますぐにまた別の漁場を探しに出ていくこともありました。漁業者が1人、2人で、とても大変な働き方をしていました。でも、操業すればカツオがいるから、それだけ儲けになったのです。今は無理ですね、いくら探しても群れが見つからないことが多いです。

一番大変なのは子育て世代だと思います。子どもが小学生、中学生という人たちは、本当に苦労されています。60過ぎた漁業者は、子どもたちが独立をしているのであと何年か頑張ればいいのですが、若い人たちは大変です。

二平 : 曳き縄漁はカツオを近い漁場で獲る漁法ですから、あまり遠くまでは行けませんが、一本釣りの方々は近場にカツオが見えなくても、2014年の春のように南へ船を走らせて何とか稼ぐことが可能ですので、走り回りながら操業されていたと思います。第5清龍さんは何年ぐらい船に乗られていますか。

浅野 : 船頭歴は約 20 年です。

二平 : 長いですね。私は 1974 年に茨城県の水産試験場へ勤め始めたので、1970 年代後半からずっとカツオの実際の状況を見てきました。そして、宮崎や土佐の船頭さんたちの話を聞く機会に恵まれていました。

昔は、宮崎県や鹿児島県の漁船は正月を終えるとすぐ、薩南海域をまっすぐ南へ船を向かわせていましたよね。宮崎県水産試験場の調査船・宮崎丸や茨城県の調査船・水戸丸も、同じように薩南海域を南下して、調査していました。

昔は北緯 17 度、16 度まで薩南海域をずっと南下して、そして、その海域でその年の操業が始まっていました。少し太めの 60cm 級のカツオと 40cm 級の小さめのカツオの 2 サイズが獲れるのが普通でした。第 5 清龍さんにもそういったご経験がありますか。

浅野 : 僕の頃は北緯 16 度までは行きませんでした。行っても北緯 18 度です。行けば水温に沿って、大体 20℃の海域で操業を始めると、群れが見えました。群れが見えないときは、昼間に休んで、夕方から釣るという操業形態でした。

二平 : 年明けの漁はまず薩摩海域の真南に行けば、カツオが見ていたということですね。

浅野 : ええ、近海るときは 1 昼夜か 2 昼夜休んで、南方へ行って釣っていました。それがだんだんカツオの群れが見えなくなって、今は沖ノ鳥島周辺の南で操業しています。

二平 : 今は真南へ行ってもカツオの群れが見えなくて、もっと東へ行く操業にだんだんと変わってきたということですか？

浅野 : そうです。一つは海巻の影響ではないかと思っています。西にはカツオがいなくなった状態です。

二平 : まず西の漁場からカツオの群れが見えなくなり、皆さん少しずつ東へ操業するようになった。同じ南方でも東へ動くようになったと見ていいのでしょうか？

浅野 : そうです。西へ行っても、無益です。

二平 : なるほど。調査船の宮崎丸や水戸丸も、ともかく薩南海域へ行って釣っていま

した。上牧さん、いかがですか。上牧さんの方が漁労長歴は長いですよ。何年ででしょうか。

上牧 : 35年か、36年でしょうか。

二平 : 第5清龍さんより15年長いですから、さらに15年前の歴史をご存じということですね。昔と今の漁と比較して、いかがでしょうか。

上牧 : 自分が一番印象に残っているのは、まだ17才、18才の頃でしたでしょうか。種子島沖で、時期的に5月か6月だろうと思います。昔の木船で、48t型でしたか、冷凍設備も何もなく、氷だけの航海で毎日40t以上釣って帰っていました。

二平 : 連続して1日40tですか。どのくらいまで南下したのでしょうか？

上牧 : 屋久島から種子島が見える海域です。1週間連続で釣れました。だから7航海ですね。そういう記憶があります。種子島は、ものすごく釣れたね。私がまだ17～18才の頃でしたから、今から20年ぐらい前にしておきましょうか(笑)。

二平 : 48t級の船ということでしたが、何人乗りでしたか？

上牧 : 当時、何人でしたかね。22名とか23名でしたか。

二平 : 種子島で釣ったカツオはどこに水揚げされていたのでしょうか。

上牧 : カツオは氷で冷やして、カツオ節の原料として枕崎に水揚げしていました。残念ガツオと呼ばれる3kgから5kgサイズです。残念ガツオは亀節にも本節にも向かないサイズのカツオのことです。亀節は2.5kgサイズのカツオを使い、6kgから7kg以上になると本節になります。3kgから5kgは製品として本節にするには小さすぎる、亀節には大きすぎるということで昔はダメなサイズでした。

二平 : なるほど。ただ、食べると美味しいカツオだと思うのですが。

上牧 : 食べたら、一番美味しいです。今、鮮魚の主流は3kgから5kgですね。私が舵を握ってから一番の漁獲は、約20年前の三陸沖です。海一面、カツオの群れでした。

二平 : 見渡す限り、カツオでしたか？

上牧 : 見渡す限り、カツオでした。秋で、東経 151 度、北緯 40 度の漁場だったと思います。私と同僚の船の 2 隻で釣り始めて、その後、友だちの船もぞろぞろ来て、合計 7 隻、皆満船にして帰りました。

二平 : 秋の北緯 40 度、東経 150 度は、カツオの中心漁場ですね。水温は 19.8℃か、もっと低いですか。

上牧 : あの頃は水温とか、気にしませんでした。毎年、同じところにカツオがいるもので、大体で走っていました。今みたいにそんなに水温観測技術も発展していないので、水研が発表する水温図も、FAX で月 1 回だったかな。

二平 : なかなか、そのとおりの水温になっていない図ですね。

上牧 : はい。昔は、大まかに黒潮の本流さえわかれば、本流のどちら側にいけばカツオがいると分かりましたからね。

二平 : 私は、JAFIC が出している水温図のコピーを船頭さんへ毎朝持って行っていましたが、こんな水温はないと、よく怒られたことを覚えています。だから、JAFIC へ電話をして、今の専務の為石さんにこんな水温はないけれど、水温図がないよりは参考にはなっていると伝えました。

上牧 : 12~13 年前に水産庁の方たちが来て、どうカツオを釣っていたのか、少し説明をしてくれと言われました。当時は、多いときには川が流れるようにカツオがいて、水温の蛇行があり、その水帯へ行けば、どこへ行ってもカツオがいましたと、話をしました。黒潮の手前で釣るか、同じ水帯の中でももっと先へ行けばと思っていました。川が流れるようにいたと表現しました。

二平 : 清藤さんの発表にありましたが、普通、カツオは深層の見えないところにいるのですが、昔は表層にいて群れが普通に見えたのでしょうか？

上牧 : 時期によります。春雨前線の時期になってきますと、カツオは表層に上がってきます。ピンチョウなども同じです。秋雨前線の頃、ちょうど我々が三陸沖で大漁の時期になりますと、その現象がみられました。

二平 : ありがとうございます。どうですか、岩切さん。漁労長をされていた時に、海一面にカツオの群れだとか、どこにいてもカツオが幾らでも簡単に釣れるときはありましたか。

岩切 : ありました。先ほど、上牧さんが言われましたとおり、あの漁場に私も行きました。そのときに無線で聞いた声は、本当に腹の底からの「カツオだ!」「早く来いよー、すごい群れだぞー」だったことを覚えています。そういうことがありました。

私、1967年に乗船しました。昭和の時代は1隻で春先に早めに出ていっても、北緯20度、東経130度に向けていけば、どこかに必ず群れはいるということが合言葉でした。必ずどこかにカツオはいると、私たちは南下していったものです。

一番先に駄目になった漁場は、浅野さんの言われたとおり、南西諸島や宮古の南東です。宮古の南東もいい漁場だったのですが、なぜかカツオの生態が変わったのか、水温の流れが変わったのか、宮古の南東が一番先になくなりましたね。

もう今では群れの数全然違いますし、漁も違いますし。何年前か忘れましたが、9月頃に三陸沖を諦めまして、五島列島に行ったのです。

五島列島は南西諸島より水温が高いので、関門海峡を通過して行きました。三陸の餌の残りで釣って帰ってきました。あのときは多分、山川、枕崎に水揚げしたと思います。その航海で本当にびっくりしました。群れそのものは少しだけしか浮いていないのです。誰かがそれを見つけて、27隻で700t獲ったことがあります。表面に浮いているカツオは少しなのですが、すり鉢を反したような群れだったのでしょうかね。

当時はソナーもなく、魚探だけで探して、びっくりしました。上から下に深く群れになっている、ああいうカツオの群れがたくさんいたのだと思っています。

二平 : 茨城の船頭さんたちは、そういう群れのことを「がんけ」といいます。「がんけ」というのは、崖という意味です。だから、魚探で見ると、上にも黒く映りますが、ずっと下深くまで魚が見えます。だから、「がんけ」と呼んでいて、カツオが厚くいて、どんどん下から湧いてくるように釣れると言います。一本釣りの290t型の船の船頭さんたちから教わりました。

岩切 : もう一つ、1990年か1991年でしたか、私が那珂湊に行ったときのことで。北緯34度から36度で、東経143度の、黒潮と親潮がぶつかる場所に壁ができますよね。カツオの群れが北にずっと、緯度で2度ぐらい続いていました。

その群れをまき網とカツオ一本釣り船が競合しながらどんどん獲りました。まき網は1日に1千tを獲ります。我々は釣っても10tとか20tです。あのとき、

二平さんにお会いして、まき網の状況と、こういうことが続いたらどうにかなってしまうのではないかと話したことを覚えています。

カツオはたくさんいたのだけれど、乱獲になった。先ほど試験場の方も南方には群れがいますと言われました。群れがいるからあんなに巻くのだと言われればそれまでなのでしょう。

漁獲技術は進化しています。先ほど、曳き縄の方も言われましたが、私たちはカツオを獲るために、また自分たちの経営が良くなるようにと、どんどん設備投資をしていきます。そうすることで、カツオの資源は少なくなっていっているけれど、漁獲をなんとか維持しているのが現状です。

二平 : 今は、カツオを探すためにいろいろな機械が開発されています。もちろん、船のスピードをあげるためのエンジンも。一本釣り漁船の装備の拡大化というか、高度化というか、カツオの群れが減っても、漁船の装備でトン数を維持しているということですね。上牧さん、具体的に装備の変化について教えていただいてもよろしいですか。

上牧 : 自分たちの漁労技術や装備の変化よりも数十倍、まき網さんは技術も装備もものすごいです。自分たちはそんなにたいしたことないのです。ソナーや鳥レーダーをつけるだけのことです。金額的に言えば、5千万円から7千万円でした。最初に話しました、40tの木船で、7航海を紙の魚探1枚でこなしていた時です。

二平 : 私たちが漁獲量の推移を見たときに、ずっと変化がなくて横ばいになっているからといって、変化がなかったとみるべきではありません。曳き縄も一本釣りも、装備を高度化して、一生懸命努力をされて何とかそのトン数を維持しているわけですから。

上牧 : それはものすごい努力です。経営者から船主の皆さん、本当に設備投資をして、少しでも速い船をと努力されています。5億円、6億円というお金を出して新船をつくる場所もありますし、1つでも先に素晴らしいソナーをつける。それはもう経営者の努力はびっくりするものがあります。

二平 : 私はずっとカツオを見てきています。曳き縄や一本釣りの漁業者の方々は、カツオが減っていることにとっても危機感をもって、設備投資もしながらなんとか経営できるレベルで漁獲していたという時期がありました。

ただその時期を過ぎて、曳き縄はどんどん獲れなくなり、一本釣りは今、なんとかピンチョウでもっています。努力でなんとかなっていた頃から、今、さらに

厳しい時代に来ていると思います。

上牧 : まき網さんなどは漁労技術やの進歩もあって、過剰な設備投資のおかげで見えないカツオも獲れるようになった。私は、そういう認識が強いです。

二平 : まき網の話の前に、まず、宮崎の漁船の流れとして、宮古の南東の漁場が消える中で、だんだん東へ出漁して、宮古よりも遠くの海域が漁場の中心になっていった。春先に中南方へ出ても、その後は日本近海の西の海域、昔は岸沖などで漁獲していたけれど、なかなか見えなくなってくるので、いきなり伊豆諸島へ入ってくるように変化しているのでしょうか。

上牧 : 僕らが若い頃は、ビンチョウなどを漁獲するときは、八丈島より東には行きませんでした。八丈島より西でビンナガ漁がありました。もちろん、そのときはカツオではなくビンナガしか獲らなかったので、東側のカツオの分布は分かりません。もしかしたら、東に行けば当時からたくさんカツオの群れがいたのかもしれませんが。

二平 : 宮崎の皆さんの場合は、ビンチョウへの依存度が高かったのですね。茨城県も漁船がいっぱいいた時代がありました。高知県のカツオ船などと比べますと、ビンチョウの漁獲が多いです。高知の場合はカツオだけを釣る、そのようなところがあります。

上牧 : 自分たちは、カツオはカツオでも、昔は加工用のカツオを釣ることが多かったんです。ビンナガも一緒に、加工用です。日にちをかけて釣るという傾向だったと思います。

二平 : 漁が良かった時代から、だんだんカツオが見えない、厳しい時代に入ってきて、漁船は努力して、漁獲量を支えました。しかし、沿岸の曳き縄船はあまり遠くの漁場に行けませんから、沿岸にカツオが来なくなると水揚げがどんどん落ち込んでいっています。たくさん釣れた時代の群れのすごさについても、皆さんのお話から理解できたかと思います。

漁船も大変ですが、カツオが獲れなくなりつつある中、地域への影響についても触れておきましょう。カツオ漁業が落ち込むことで、地域に困っている現象があるのでしょうか。すさみさん、いかがですか。お祭りが出来なかったと伺ったことがあります。

濱田 : 今、僕の町の人口は約 5,000 人しかいません。昔から町では、景気は海からと

よく言われていました。漁師が儲ければ、町全体も潤います。正直な話、今は、漁師はほとんど儲かりません。ですから、町全体がさびれている印象です。

鈴木 : 今まででしたら千葉県はカツオが来ると、大体カツオをやる船が多かったです。キンメ漁もありますが、カツオが揚がる時はとても安くなってしまい、キンメを獲る人はあまりいませんでした。

最近ではカツオが全然駄目なので、キンメを獲る人が増えています。その結果、漁場に漁船が集中して、魚をみんな釣ってしまいました。今は1日の操業時間を4時間と決めました。4時間以上はやらない。

魚は獲り過ぎればいなくなりますから、みんなで相談して4時間と制限しています。けれど、時間を制限しただけで、隻数は増えてきています。キンメの漁獲圧力がだんだん高くなってきていますし、何よりカツオが来てくれないと困りません。みんなが駄目になってしまうと思います。

二平 : 第5 清龍丸さん、カツオが獲れなくなると、漁労長をされている船の経営そのものも大変だと思いますが、もう少し広げて見たときに、地域全体やカツオ船と関連するような産業や業者への影響も含めて、いかがですか。

宮崎の皆さんは地元だけではなく、千葉県の勝浦や宮城県の気仙沼など、いろいろなところで水揚げをされていますから、各地の経済にも貢献されていると思います。

浅野 : カツオが釣れると、それなりの水揚げ金額になります。僕たちは全国いろいろなところに行きますから、港、港でお金を使います。カツオが釣ればお金になって、各地で金を使って、そこが潤う。いいことばかりです。それが、漁がなければ、5,000円買おうと思っていたことが2,000円にしようかとなります。そういう悪循環になっていきますから、カツオが釣れるに越したことはないのです。

二平 : 私が那珂湊で調査をしていると、朝、どんどん船が入ってきて、水揚げを終えた船員さんが、カツオを2本ぶら下げて町に出ていくのをよく見かけました。どこに行くのかと思いましたが、当時は朝からスナックが開いていました。おそらく、どこの港町も同じだと思います。午後3時頃に出航するとき、港に綺麗なお姉さんが並んで船を見送るのです。今は、那珂湊では見られなくなってしまいました。そういう光景が当たり前の時代がありました。

町のいろいろな店が船の仕込品を運んでいましたし、薬局もあり、地域のみんながカツオ漁で潤っていました。

上牧 : 全盛期、宮崎だけで 100 隻、全国で 300 隻です。自分たちは枕崎などで水揚げしていました。今、夜の 8 時頃に枕崎の港を歩いたら、寂しいものです。僕らが若い頃は、本当に賑やかでした。

カツオの漁期が始まると、船はカツオを目指して一斉に走り出しますが、今は、勝浦は勝浦、気仙沼は気仙沼で限定して入港しています。昔は勝浦や銚子、那珂湊、中之作、小名濱、石巻、塩釜、気仙沼と、それぞれの港に同じ時期に船が入っていくので、どこの港も同じように賑わっていました。銚子などもすごかった。そういう賑わいが昔はありました。今は船が少なくなりましたしね。

今でも相当数、一本釣りが地域貢献しているのだろうと思います。僕らが若い頃は 300 隻でした。それが、港々で金を使って、大いに地域貢献をしていましたよ。

二平 : 船の経営が安定していて、たくさん船がいれば、本当に沿岸のいろいろな町が元気になると思います。そういう経済効果を漁業はもっている。これは非常に大事なことです。

船そのものだけではなく、地域といろいろなつながりを持ち、単に経済的に貢献するばかりではなく、人と人とのつながりとしても大切なものがありました。今度の震災をめぐり、漁業のつながりでいろいろな支援があったと伺っています。漁業はそういうつながりをつくり上げていく、本当によい産業なのです。

岩切 : 私が中学校を卒業したとき、目井津地区で 60 人ぐらいいたのでしょうか。女の子が半分ぐらいで、男子の約 8 割が漁師になりました。その当時に中学校を卒業してマグロ船に乗った人が、先生の家遊びに行こうと誘ってくれたので、一緒に訪問しました。先生から「どれだけ給料をもらったのか」と聞かれ、これだけもらったと答えたら、「お前、私の年間収入よりも多い」と返されたことがありました。

カツオとマグロが景気のいい頃は、南郷に 1 週間か 10 日いれば、絶対に高級車が 1 台売れると日南の車業者が言っていました。いつでしたか、何年か前にそういう話になりまして、ああいう頃には戻らないのかなと思いました。

1 隻のカツオ船に対し、付随する業者の方々がたくさんいらっしゃいます。漁船が 1 隻減ることで、その方たちの生活が脅かされるのです。市長さんも日南市を再生しなければいけないと一生懸命やられています。漁師が良くなければ、絶対に日南市の景気は良くなれないと思います。

二平 : カツオの曳き縄船、一本釣り船がいかに重要か、よくわかるお話でした。

先ほど清藤さんや船頭さんたちからお話がありましたし、今までのシンポジウ

ムでも議論してきましたが、日本近海ではカツオの群れも来遊量も減っていると言われていています。しかし、国際的評価ではカツオは減っていない、資源は潤沢であるという見解です。ですので、熱帯でのまき網漁業は 270 を超える船があり、まだまだ増えています。外国船の 1 隻の規模は、日本のまき網船よりもはるかに大きな船です。日本の船だといかがでしょうか。

清藤 : 標準の日本の船ですと 700t クラスで、約 30 隻です。欧米のまき網になりますと 3,000t クラスとか、結構大きな船がアメリカなどにはありますね。

二平 : 日本船が 30 隻少しで、外国船が 270 くらいというのが今の状況です。その熱帯まき網を中心に、中西部太平洋全体で約 180 万トンのカツオを獲っています。

国際会議に出られている清藤さんがせっかく来て下さったので、国際会議の様も含め、もしお聞きになりたいことがありましたら、船頭さんたちからも質問したいこともあると思います。文句ではなく、質問や意見ということでお願いします。

上牧 : 世界全体のカツオ漁云々という話はしなくてもいいと思います。大事なのは日本近海でのカツオ資源量で、それをどう大事に守っていくかということを考えるべきです。ここで世界のことを我々が一生懸命考えても、国と国との話し合いの問題で、何ら解決する方法もありません。

また、日本の海外まき網船 33 隻、その大勢の人たちに我々の声が届くわけでもないです。自分たちはやはり、自分たち沿岸のカツオをきちんと管理をしていく、そのための話し合いをした方がいいと思います。ですから二平先生、もう世界情勢はいいですよ。

二平 : 上牧さんには、今まで何回もシンポジウムに出ていただいているいろいろとご存知ですから、おっしゃりたいことは分かります。私は以前、大変怒られました。

鈴木 : いいですか。私が聞きたいのは、国際会議の場で、カツオの研究に関して歴史があって、進んでいる国というのはどういう国なのでしょう。もしその国や研究者の名前をご存知でしたら、後日でも構いませんから教えていただきたいです。

清藤 : カツオそのものの分野や対象にもよると思いますが、日本はかなり過去からのデータを持っていますので、進んでいると言えば進んでいます。

本日お話した移動の話などは、アメリカなどで進んでいまして、我々も平行して進めていて、少し進んできたかなという感じです。

鈴木 : 私たちは勝浦沖で曳き縄しかやっていますが、カツオは国境に関係なく泳いでいます。私は高校しか出ていなくて、中学と高校で合わせて 6 年間、仕方なく英語を勉強しました。ただ、もし英語をもっと勉強していて、話すことができたなら、そういう関係者の方々と直接話をして、もう少しというのでしょうか、みんな困っているわけですから、もっと理解してもらえるのではと思います。

和歌山県の小林君があいさつの終わりに、「漁業者のために頑張ります。資源を増やすために頑張ります」とおっしゃっていました。

清藤さん、申し訳ないですが、漁師が困っているということをご存じでしょう。日本近海のカツオを釣っている漁業者が困っているということがわかっていれば、それに対するフォローを考えていたら、言葉に出てくると思います。

国際会議に日本を代表して出られているわけですから、曳き縄と竿釣りの代表ということですから。国際会議に出席している人が、本当に困っている漁業者のことをきちんと伝えてくれないと困ります。私はこういった場に参加するとき、自分 1 人の気持ちで出てきているわけではありません。私の地元の勝浦では、何百人という人間が困っているのです。

私も、千葉で困っている漁業者の声を自分 1 人で伝えるのはすごく難しいな、会議などに全員連れてきて、皆で困っていると言えば伝わるのではないかなと思います。でも、千葉県だけではなくて、東京都も静岡県も宮崎県も、全国の皆が困っている話です。

これだけ全国の漁業者を代表して、日本という国を代表して会議に出られるのですから、カツオが少なくなって困っているという思いを、命を張って伝えていただかないと困ります。

私は、漁業者を代表して、二平さんにそういう国際会議に出てもらいたいと思っています。

二平 : 私の話は国際的ではないので…。清藤さん、いろいろ厳しい意見でしたが、国際会議に出ている立場からいかがですか。

清藤 : いえ、もっともなご意見だと思います。我々も国際会議で理解してもらえるように研究成果を出して、主張するよう努力してきたつもりです。

今回も発表しましたが、曳き縄の漁獲量が減少しているということも、2009 年から情報を集めて、主張してきました。

2010 年から 2011 年頃にこういった話をしましたら、ニュージーランドとオーストラリアの研究者からも同じようなことを感じると言われまして、資源の収縮が生じて、縁辺部が困っているというところまで行きついて、今に至っています。

もう少し努力が必要だと思います。

鈴木 : インドネシアやフィリピン、タイでは手のひらサイズのカツオを獲っていますよね。資源のことを考えると、獲ってはいけないサイズだと思います。これらの国がこのようなカツオを獲ってはまずいのではないかという話が、水産庁や国際水産資源研究所が参加されている会議の中で出ているでしょう。

日本でも一時期、サバを獲りつくして、サバの水揚げの内、小さいサイズのものが 90%という時代がありました。やはり小さいサバを獲るのはいけなくなつて、国主導で小さいサバは獲らないように努力してきたわけです。

ですから今後は、国が手のひらサイズ、15cm とか 20cm というカツオを大量に獲らないように指導してはどうかと思うのですが、いかがですか。

清藤 : おっしゃるとおり、インドネシア、フィリピンでの小型魚の大量漁獲は、一つの問題として会議の中でも取り上げられつつあります。どうして小さいサイズの漁獲が問題になるのか、科学的にどういう形で伝えるのが良いのか、なかなか難しいのです。簡単に言えば、獲るなということなのですが、うまく動向を見ながら、主張していきます。

鈴木 : 愛知県の網製造会社では、海外まき網から網の注文がたくさんきていて、今、注文をしても 2 年先待ちという状況です。中には海外からの注文もあるというお話でした。海外まき網を含め、まき網から網の注文が多いので、30 億円を投資して工場を建設中だそうです。

つまり、ますますまき網の漁獲能力が上がるということです。右肩上がりと言いますが、どんどん漁獲して水揚げを確保していくと、海の中にいるカツオは反比例して少なくなっていくと思います。

今にというのでしょうか、急にというのでしょうか、漁獲が一気に落ちるときがくるのではないのでしょうか。そうして困るのは漁師です。カツオを獲っている漁師は困ります。

我々は、約 20 年前から国際水産資源研究所の方々、今の部長などに対して、カツオが少なくなっていると訴えてきましたが、「減っていないでしょう。いっぱいいるよ。」と、ずっと言いつばなしです。そうやって我々の言うことに耳を貸さず、今、生活ができなくなっているのは漁師です。今後、そのようにならないために、頑張ってください。

清藤 : 頑張るように努力いたします。

岩切 : 今話題にあがった、20cm 以下のカツオの問題に関連して、10 月 21 日付の毎日新聞に、ノルウェーのサバ漁が載っています。大変成功し、漁業者が高級車を乗

り回しているそうです。一度、この事例を参考にして、カツオもそうなるようにやっていきませんか。研究をしてください。

清藤 : ありがとうございます。

二平 : 清藤さんは日本代表として、国際会議の中で引き続き頑張っていたきたいと思います。国際会議での議論も以前と比べて変わってきたようで、今度の会議ではまき網のデータが使われるようになり、また、パプアニューギニアの解析結果も含めた議論も始まっています。

日本と同様、ニュージーランドといった、カツオ分布の縁辺域の国々や島国の漁業者たちからも、カツオ資源が分悪くなってきているという意見が出たそうです。正式会議での意見なのか、フロアでの意見なのか、分かりませんが、そういう意見が出されたということは、以前と随分様相が変わってきていると思います。

直接行ったことがないので分かりませんが、少し前に動いているのではないのでしょうか。最終的な結果は、資源は高位だと出てくるかもしれませんが、危なくなりつつあるから規制を強めなくてはいけないという雰囲気が少しずつ出てきているのでしょうか。

清藤 : これまでの議論がどうだったかと言いますと、私も 2009 年か 2010 年頃からしか参加していませんので、以前がどのような雰囲気だったか分かりませんが、少なくとも本日お話ししました、資源の収縮の話は随分、共有されてきてはいます。

熱帯域の島々は沿岸の零細漁業が中心で、カツオだけではなくキハダなども獲っています。そういう漁業者は若干、キハダ資源の収縮もあるのではないかと訴えているところもあります。

日本の沿岸漁業を伝える上で、私も不勉強なところもありますが、やはり現場の情報が足りません。そういう情報をもう少し集めて、日本の沿岸漁業である曳き縄や竿釣りがどういう漁業なのか、もう少し具体的に伝えていかなければいけないと感じています。

濱田 : よろしいですか。現場の状況が分からないと言われましたが、まき網船を許可すると聞いたときに、この県南地域だけは水産庁に反対にいきました。昭和 50 年頃のことです。そのときからずっと 40 年間、資源が枯渇すると言いつつはいますが、聞く耳を持たないじゃないですか。それを今さら情報が少ないとか、わけのわからないことをおっしゃられても困ります。

もう少し頑張ってください。私たちは今までずっと自助努力で頑張ってきましたが、ここらでなんとかしてもらわなければ、本当に限界です。私たちを生かす

のか、殺すのか、まき網を助けるのか。そろそろ答えを出してほしいです。

船主さん、漁労長さん、みんな後継者を育てながら頑張っています。全国会議で上牧さんが代表として話をしても、少しも変わらない。もう話をするのにも疲れています。対応できない理由を情報が少ないと言うのは止めていただきたい。

清藤 : 申し訳ありません。情報が少ないと言うのは、沿岸漁業について科学的に説明する情報が少し少ないという意味です。確かにまき網をどうこうという話は、言い訳になってしまいますが、我々科学者の対応する範疇にはない部分もあります。その辺に関しては、水産庁の行政官に伝えることが必要だと思います。

濱田 : そのようにして逃げるから駄目なのです。わかっています。

二平 : 清藤さんは研究機関の若手の研究者で、2009年以前のことはおそらくあまりご存じないかもしれません。

先ほどからの議論のとおり、曳き縄や竿釣りの方々がとても困っています。そういう状況を、水産庁にもっと真剣に見てもらって、そして、国際会議でも反映してもらいたいということでしょう。

上牧さんがおっしゃっていたように、国内問題です。具体的には曳き縄と一本釣り、まき網が同じカツオを獲っていますから、そこでの操業調整が必要です。

これはとても大事なことで、どうできるかは別として、もし皆さんにこういうことを考えてほしいという意見がありましたら、ぜひお聞かせください。何回もお話しされていると思いますが、水産庁などへの要望がありましたらどうぞ。

上牧 : 長期的に考えると、国際会議で一生懸命頑張って頂かなければいけません。手のひらサイズのカツオの規制もやってもらわなければならない。でも時間がかかり過ぎるのです。

私たちは生きていくために今年、来年、再来年の日本近海の資源の話をしてほしいのです。けれどもいつも濁ったような話しか出てきません。日本近海の資源は絶対に減っています。国際的な場とは分けて話をしなければいけません。日本近海のカツオが減ってきていることだけは事実です。

いつも言っているのですが、どうしたらいいのかということ、これをまず話さないと駄目です。何十年先の長期的な話をしても、私たちは半分以上、いなくなっているでしょう。みんなが生きていくうちにやらなければ。

短期的にどうすればいいか、大体わかるでしょう。網の制限に加えて、日本近海のカツオ漁獲の制限、いろいろやらないといけません。資源を守ることを考えて、研究して実行していただきたいです。それが一番先だと思います。

岩切 : 私たちは怒ってはいません。資源が枯渇していることは確かです。それで、今年の漁ですが、2月から出漁して10月で終わりました。通常であれば11月まで漁獲しています。それが現状です。資源が枯渇しているのです。

反対に国に伺いたいのです。私たちはどうすればいいのか。私たちが言っても耳を貸さない。聞く耳がないというのであれば、私たちはどうすればいいのでしょうか。

資源状況が良いときでも、カツオ漁は4年か5年に1回、漁が良くない時がありました。ところが、今は4年か5年に一回あるかないかで、好漁がでます。その好漁も、ピーク時の悪いときより悪い。

そろそろ分かっていたかかないと。どこまでいけばわかってくるのか、神様か何か呼んできたほうがいいのでしょうか。ここらがもう潮時でしょう。

二平 : 鈴木さん、いかがでしょうか。鈴木さんは沿岸漁業で苦勞されながら、大変頑張っているらしいです。小型船組合として、千葉県として、いろいろな良い取り組みをし、ものを言うべきところではきちんと発言されています。

鈴木 : 小型船の漁業者たちは、自分たちのできることはきちんとやっています。例えば、サバなら1人何キロまでとか、時間は1時までとか、メダイなら釣りは何本、時間は何時と、とにかく自分たちのやれることは実行しています。しかし、まき網という商売が私たちの生活を左右します。あの人たちがきちんと資源管理をしてくれれば、私たちは生活できるということです。

最近、佐賀明神丸の親方の明神照男さんと何回かお会いする機会がありました。明神さんは、自分の子どもの代はカツオを続けられるが、孫の代は続けられるかどうかかわからないとおっしゃっていました。その解決策として、年間のカツオ一本釣り漁獲量を決めたらどうかと提案して動かれています。年間漁獲可能量という条件を決めて、それを大きく下回ったときは国が何とかしてくれるようにと働きかけをしています。

勝浦沖には、キンメの禁漁期間があります。全国でも珍しく、勝浦沖だけは3カ月禁漁です。竿船だけではなく、まき網船も漁獲制限をしなければ意味がないのではないかと考える人もいます。明神さんの考えは、まず自分たちがやることで、他の人たちもそういう管理に賛同してもらおうという考えです。

岩切 : すみません。国際会議で漁獲量はどのように決められているのですか。

清藤 : カツオを獲る漁獲量は、今は制限がありません。

- 岩切 : 制限がないのですか。まず、漁獲量の制限を決めたいかがですか。カツオの漁獲量は 1980 年代で 50 万トンでしたが、2013 年には 180 万トンに跳ね上がっています。まき網船の隻数も増えていますから、日本沿岸の資源が下がっているのは事実です。
- 清藤 : 制限に関しては、どう規制するのか、どういう漁獲圧になったら規制を入れるのかなど、そういった議論が今、始まっています。
- 岩切 : フィリピンとインドネシア両国で 40 万 t 獲っているそうです。これは日本の 1.7 倍に当たります。この漁獲事実を資源という方面から調査をすれば、もっと資源が増えるような対策がとれると思うのです。
- 清藤 : その話も先ほどの小型魚の大量漁獲と関連していますので、同じように問題にはなっています。フィリピンやインドネシア沖での小型魚の大量漁獲などを含め、議論は進んでいるというところです。
- 鈴木 : そのことですが、カツオの漁獲量が 180 万 t ということでしたよね。国別のデータで、確か中国はありませんでしたが、実際、中国はどのぐらい獲っているのでしょうか。
- 清藤 : 中国は私も失念していました。今すぐ数字は出てこないのですが、近年は上がってきています。
- 二平 : 資本だけ進出して、台湾や島しょ国に切り替えて置いているということではなく、中国船籍の船もあるのですか。
- 清藤 : 一応、あるはずです。チャイナというカテゴリがありますので。
- 二平 : 以前、日本政府が中国船の建造をストップさせようと動いていると、新聞で報道されていましたが、中国船の建造は今、止まっているのですか。
- 清藤 : 不勉強ですみません、その点は私も把握していません。
- 濱田 : 世界的なカツオの消費がわかれば管理ができると思うのですが、そういった話し合いはないのでしょうか。

清藤 : 消費に関しては、統計値がどこかで記録されていると思うのですが、その方面からの議論は今、ありません。ただ、消費という、少し資源とは違う観点なので、なかなか難しいですね。

鈴木 : では、国際会議でアメリカなどが進んでいるということでしたが、国際会議の日以外に、研究者同士で交流されていますか。会議で話をするとして、日本でも地方と国が話をするような感じで、日ごろからカツオの研究と一緒に話をする機会は持っているのでしょうか。

清藤 : カツオそのもので一緒に何かということは、今のところありません。

鈴木 : やはり 1 回限りで話が決まるわけはありませんから、普段からコミュニケーションをとり、こちらの要求をわかっていただく努力をしませんと、いつまでたってもそんなことをされていたら、漁師がいなくなります。国際会議 1 回で決まる話などはありません。

本当に漁師や資源のことを思うのであれば、普段から何十回も連絡を取り合い、お互いにデータを交わしながら、カツオの資源をきちんと次の世代に残す努力をしてください。

清藤 : ありがとうございます。

二平 : WCPFC で科学的に計算をしている方がいらっしゃると思います。その方たちに日本に来ていただいて、国際水産資源研究所か水産庁で日本の沿岸漁業者さんと議論する場をつくっていただけませんか。実際に計算をしている方たちはいろいろ計算されているとは思いますが、日本の漁業の現状や船頭さんの話は直接聞いていただくべきです。科学的な評価の話ではないかもしれませんが、清藤さんがおっしゃるデータの奥にある正しさを、漁業者さんたちとの議論の中で知ってもらうこともまた、大切です。これはお願いですが、そういう場があるといいですね。

清藤 : はい。

嘉山 : 清藤さんが遠水研に行かれる前に、学生として遠水研の仕事をして、カツオで学位をとり、今、三崎近くの長井でカツオの商売をしている、嘉山といいます。

先ほどの WCPFC の資源評価データはだんだん悪い方向に向かっていました。マサバやマイワシで同様のモデルを作成してみると、マサバとマイワシにとっての北海道沖は資源の縁辺域なので、カツオにとっては東北沖と考えていいと思いま

す。日本周辺におけるイワシ資源の評価データと合わせると、資源が高位のときは北海道沖まで行きます。中位になると少しだけ行き、低位になると北海道沖まで行きません。カツオも日本まで来遊する太平洋全体の北上回遊群と熱帯にとどまっている熱帯滞留群の関係を見ることで、割合がだんだん出てくるのではないのでしょうか。

清藤 : コメント、ありがとうございます。それは餌という意味でのマイワシですか。

嘉山 : そうではなく、1980年代のマイワシとマサバは資源状態が良く、北海道沖まで来遊していました。1990年代から2000年代になると資源が悪くなり、銚子沖や、よくて八戸沖までしか行かなくなりました。今、また北海道沖まで来遊し始めています。カツオの資源評価と同じようにモデル化してどこに出てくるのかを見て、比較してみたいかがでしょうか。



清藤 : ありがとうございます。データも含め、他の魚種と比較できるかどうかを検討しなければいけません。興味深いコメントでしたので、考えたいと思います。

岡本 : 国際水産資源研究所の岡本と申します。今日は清藤さんの鞆持ちで参りました。

今年の6月以降、年後半の漁況は、確かに竿釣りは良くない一方、近海まき網がなかなかいい漁であったように感じています。結局、今年のみき網と竿釣りをトータルで見ると、平年よりは低いけれどもそれほど悪くなかったという印象です。この件については、二平さん、皆さん、どのようにお考えでしょうか。



二平 : まき網は確かに去年の1.3倍の漁獲量でした。北緯37度、東経147度の海域に集まったカツオを、かなり集中的に獲っていました。この点から、カツオはかな

りいたのではないかと考えることもできるというのが岡本さんのご意見だと思うのですが、船頭の皆さん、いかがでしょうか。

上牧 : 二平さんのおっしゃるとおり、今年は北緯 37 度、東経 147 度付近で長いことまき網漁がありました。今年のカツオはとても巻きやすかったのです。また、大きな要因はまき網漁業の網の発達です。まき網さんの自主努力ですが、それで漁獲が大分上がりました。

鈴木 : 自主努力と、もう一つ、もうかる漁業創設支援事業とあって、船を大きくしましたでしょう。この事業で 100t 船が 300t の大きい船になりました。国の補助があれば大きな船にして、ソナーも網も、最高のものを備えることができます。

例ですが、被災後、行政の補助で造られたサンマ船はとにかくずば抜けて良い漁をしています。まき網船も同様に、補助を受けて 300t クラスのいい船を造るということは、漁獲能力が格段に上がりますから、獲れて当たり前です。

上牧 : 例えばデータで去年も今年も 300t 揚がっているからといって、例年通りとする考え方が間違いです。漁師の企業努力、自主努力を加味して、資源がどうかを考えてください。データ上の漁獲が毎年 300t だから例年並みだと考えるのは駄目です。

二平 : 私も高知の船頭さんから聞いていたのですが、北緯 37 度、東経 147 度の海域に大きいまき網漁船も集まり、海巻さんも来ていたそうです。集中して獲っていましたよね。その時のカツオの群れは竿釣船がイワシをまいても釣れない群れだったとおっしゃっていました。その海域に集まっていたカツオは、まき網船が巻きやすい状態で、どんどん巻いていったということでした。

上牧 : 二平さん、当然、まき網があんなに巻かなければカツオ資源は残るのです。あの時、まき網船が全船集まってきて、巻き尽くしたわけです。それで少ないカツオがさらに少なくなり、戻りカツオがいなくなったのです。

二平 : ちょうど北緯 37 度、東経 147 度の海域は、カツオが三陸沖へ北上するコースです。そこでは昔から一時的に餌を食べないカツオが出現します。餌をまいてもキラキラと腹を見せるだけで、見向きもしない魚がいますよね。

上牧 : ただ、下を通っていき、あそこで浮くのです。大体、そのような感じですよ。

二平 : その海域でかなり集中的に巻いた結果が漁獲量に表れたのでしょうか。ですから、カツオ資源がどのレベルかと評価するには、少し議論が必要です。

まき網による漁獲量は昨年の 1.3 倍になっていました。一方、竿釣りは大体 6 割から 7 割止まりで、さらにその漁獲量の中身を見ると、秋の小型のカツオが中心でした。私個人としては、今年は非常に悪い年だったと見ています。しかし逆に、まき網が巻いた魚群もかなりいたので、来遊レベルは高かったという見方もあるのかもしれませんが。この点については研究者間で議論をしたらいいでしょう。

では、最後に報告者の皆さん、つらい立場であったかもしれませんが、一言ずつよろしくをお願いします。

清藤 : カツオに携わって約 5 年ですが、なかなか難しいと言いますか、非常に大変なものです。本日はいろいろ厳しいご意見もいただきまして、とても勉強になりました。同時に、プレッシャーも大きいと感じています。

国際会議という場で資源状況を分かってもらうためのデータや情報を収集し、どう使っていくかということを考えなければなりません。皆様から対応が遅いと言われる部分もありますが、努力をしていきますので、ご協力をよろしくをお願いいたします。

矢吹 : 私は物理の人間で、カツオの専門ではありませんから、この場にいるのが申し訳ないです。本日、参加させていただき、漁業者の皆さんが本当に困っているということがよく分かりました。JAFIC の仕事を通じて、漁業者さんの何かお力になればと考えています。今後とも JAFIC をよろしくをお願いいたします。

小林 : 私は着任して 1 年目がカツオの不漁年でした。初めて串本の市場に行って、漁業者の方にあいさつをしたら、お前 1 人で来るのではなくカツオも連れて来いと言われました。冗談で言ってくれたセリフでしたが、実際は全然冗談にならない状況でした。

濱田さんなど、いろいろな方のお話を聞いていますから、われわれ地方水試は現場に近いのですごく困っている状況がとてもよくわかります。しかし、国際会議でこの状況を理解しても



らうには、海外の研究者を納得させることのできる数値やデータが必要です。

群れの数や沖に行く前の「野っ原」であるとか、データにしにくい部分を何とか工夫をして、漁業者の方にいろいろお願いをしながら、新しい説得材料となるデータをとっていき、国際水研さんと一緒に頑張っていかないと、と改めて痛感しました。勉強をさせていただきました。本日はありがとうございました。

平山 : 私は宮崎県水産試験場に来て 6 年になりますが、カツオの担当は今年が初めてです。こういった不漁年を最初に経験をさせてもらいました。

カツオ資源、特に来遊資源が減ってきていることは 10 年前からかなり明確に出てきているのにも関わらず、清藤さんが行かれている国際会議で、なかなか納得させられるだけの根拠を確固たるものとして示せない分、長く時間がかかっているのかなど、試験場の一担当としてジレンマも感じています。

私も各近海竿釣船の方からいつも QRY のノートをお借りすることができて、大変助かっています。そういうデータももちろん、日本全体から得られるデータをしっかりと分析し、たくさんのデータの中からより確固たるものを出せるように、私も貢献できればと考えております。皆さん、今後ともよろしくお願ひします。

上牧 : 資源管理の問題は、長期的、中期的、短期的と 3 つに分け、まずは日本近海の資源管理の話を進めていかないとはいけません。これは早急を要する話です。長期的な話ばかり、国際会議の話ばかりをしても、話になりません。根気強くやっていくしかないわけですから。

二平先生はいつも短期的な話はしないですね。今度は、国内の短期的な資源管理の話をお願いします。

二平 : はい、わかりました (笑)。

岩切 : カツオ一本釣船とまき網船の漁場が競合しているからこういう問題があるので。私たち一本釣漁業は、例えば 100t のカツオの群れがあれば、約 30t を釣って、後の 70t は将来に向けた次の資源にということで、資源を獲りつくすことはありません。網は一網打尽に獲りますから、将来の資源ということは考えない。

網漁業と競合して操業をすれば、どんなに手を尽くしても私たちは弱い立場です。ですから今後、上牧さんがおっしゃるように水産庁や異種の漁業者たちも集まってもらって、日本近海のカツオをどうするのか、資源管理について考えた方がいいと思います。以上です。

浅野 : 研究者の皆さんが数字を計算してデータを出して努力されていますが、私たち

カツオを獲るプロは年々少なくなってきました。お願いですから、いろいろ研究して、われわれを助けてください。豊かな資源の海を返してください。本当に助けてください、この一言です。よろしくお願いします。

鈴木 : 清藤さんがカツオに携わって 5 年ということは、ご自身に関係ないことも申し上げてしまいましたね。その辺はどうぞお許してください。私は国際水産資源研究所が一番のポイントと思っています。国際水産資源研究所の方針でいい方向に向かうとずっと期待しているのです。ですから今日、こういう言葉が出たのです。今後ともよろしくお願いいたします。

濱田 : ただ一言です。私はもともと漁師ですから、海で食えるようにしてください。それだけです。

二平 : 本当に皆さん、ありがとうございます。今日はいろいろと厳しい話がありました。私にも、長期的な予測や国際的なことばかり言っていないで、もう少し身近なことについて考えろという要望もよせられました。

今日は曳き縄と一本釣りの漁業者さんをお招きしました。一番大事なことは、こういう地道な漁業が地域を支えているのだということを、もう一度社会全体で再認識することです。

選挙で真面目に言っていたのかどうか分かりませんが、地域創生という言葉が飛び交いました。本当に地域創生をするのでしたら、太平洋側の漁村に関しては、カツオ漁業を再生することだと私は思っています。このことは全国を歩いて本当に実感します。カツオが戻ってきたら浜は元気になり、地元の納入業者や商店といった関連した業界も活気が出て、明るくてにぎやかな漁村になるのではないのでしょうか。

それだけカツオは非常に大切な資源です。ですから、西側海域をはじめ、黒潮域を北上してくるカツオを増やさないと、地域は元気にならないのではないかと、私は常日頃感じています。

ある面では政策的な課題です。ただ、これは水産庁だけの問題ではありません。日本国民全体が漁業と地域という位置づけを理解し、この産業を本当に大切にしていけるのかどうか問われているのではないのでしょうか。曳き縄漁業や一本釣漁業が末永く、営々と続くような政策の仕組み、応援の仕組み、国民の支援が必要で、船主さんや漁労長さんだけの努力だけでは非常に難しい問題です。

もう一つ、国際会議では、国内漁業者さん達と認識が違います。日本が感じている問題と国際会議での評価がずれているという部分が厳然としてあります。

高知県での研究集会でも出たのですが、1 つだけの資源評価モデルで評価をして

もいいのかどうかという問題があります。同じ魚でもいろいろなケースが考えられ、いろいろ計算され、いろいろな数値が出されます。その中でどの数値を用いるのかという問題があります。

私は国際会議に出席したことがありませんからよく分からないのですが、採用したモデル 1 つだけで計算をして評価をする、それでいいのでしょうか。全国各地から英知を集めて、WCPFC の計算そのものが本当に問題ないのかどうか、別の計算のやり方があるのかどうか、計算結果や評価に誤りがないのかどうか、そういった議論が必要だと考えています。日本全体として WCPFC の評価を考えるシンポジウムや話し合いの場を設けていかないと、曳き縄漁業や竿釣り漁業だけでなく、まき網漁業の経営も困難になっていきます。

日本全体のカツオ漁業がこのままだと衰退の道を歩むのではないかという危機も、やはり感じます。カツオ漁業という生産はもちろん、そのカツオを原料としているカツオ節業界や地域経済も含め、多くの業界が落ち込んでいかざるを得なくなります。ですから、国際問題は大きな問題なのです。

われわれはそういう大きい視野で考え、国際会議で頑張られている国際水産資源研究所や水産庁を応援し、カツオ業界全体として国際的に意見を言わなければならないところへきています。

最後に、いろいろなところで聞かれますので、来年の漁模様について話をいたします。高知県での研究会でも話しましたが、これは個人的な考えです。個人的な見解ですので、私だけしか責任を持ちませんが、聞いてください。

鬼に笑われるでしょうけれど、来年のカツオ漁の見込みです。2000 年代に入り非常に悪い状況が続いています。昔のような好漁になることは状況から考えるとあり得ないでしょう。ただ、先ほど小林さんのお話にもありましたが、近年の中では主群になる大きさのカツオ、春の 2kg ものと 1.6kg ものがこれから出てきます。春に 1.6kg のカツオは、秋に 3kg になってきます。ですから、3kg の来遊状況はおそらくいいでしょう。期待して待っていてくださいと申し上げておきます。

小型のカツオが揚がる場合、あるとき、集中的に揚がって値を崩すことがあります。竿釣り業界で価格を下げない仕組み、値段を調整するような仕組みを皆さんで考えていただいて、努力していただきたいと思います。

まき網漁業も含めて、生産者が上手にお金を稼いでいただきたいです。

もっと細かく言いますと、最初の時期は、あまり期待は持てないのではないかと、私は見ています。沿岸域では、今年のような状況はまずないでしょう。ちゃんと 1.6~2kg のカツオが来るはずで、近年の中ではいい漁になるので、すさみのケンケンカツオ祭りは大丈夫、できると思います。

竿釣り漁業ですが、4、5月の 2kg のカツオは、先ほど申し上げたように期待できますので、待っていてください。早ければ 4 月、普通は 5 月頃からですが、1.6

～1.7kg サイズのカツオが入ってきます。これらは秋の3kg サイズです。これが主群になりますから、三陸沖も期待しててください。

高知県では笑われましたが、私の計算では、各船、今年の1.5倍以上の漁獲量が期待できると見えています。

来年、予想通りになって、本日報告をしていただいた千葉県と和歌山県の曳き縄、宮崎の一本釣りのおいしいカツオが食べられることを期待しています。正丸さん、たくさん釣ってきてくださいね。

最後に、シンポジウムに協力をいただきました漁業者の皆さんとパネラーの皆さんに、本当にお礼を申し上げます。皆さん、拍手をお願いします。(拍手)

それでは、これにて終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。



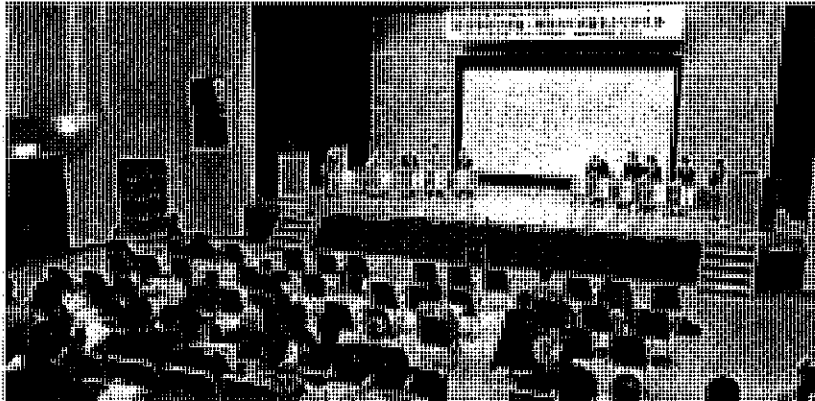
H26.12.21 日 南

カツオ不漁問題点探る

漁師や研究員 全国シンポ

東京水産振興会などは19日、日南市南郷町の南郷ハートフルセンターで「食」と「漁」を考える地域シンポジウム

ウム「2014年のひき縄・竿釣カツオ漁をふりかえる」を開いた。市内の漁師ら計約100人が参加し、今年の内のカツオ一本釣り漁の漁獲量が過去最低になる見込みであることなどが報告された。



今年のカツオ漁などを振り返った「食」と「漁」を考える地域シンポジウム

シンポジウムでは水産総合研究センター国際水産資源研究所の清藤秀理主任研究員が、日本を含む中西部太平洋のカツオ資源を管理する今年の国際団体の会議結果について報告。13年の同海域における推定漁獲量は過去最高の約181万ト

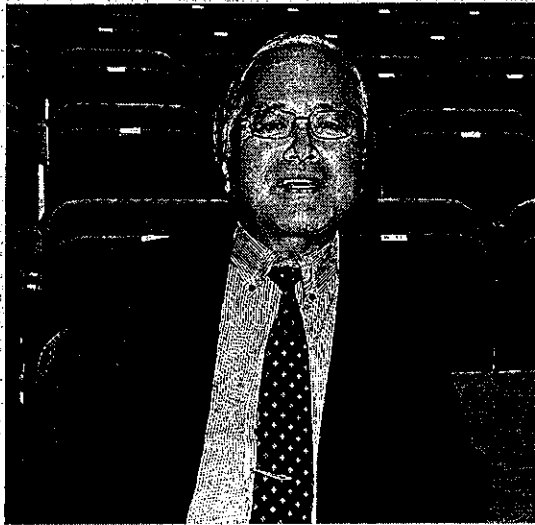
で、赤道域での巻き網漁によるものが多いことなどを説明した。

同海域でのカツオ資源については「過剰漁獲ではない」という以前の評価と同様だったものの「赤道域における漁獲増が資源の分布域を減少させ、高緯度水域(日本など)への回遊が減少している可能性がある」と懸念を示す文章が加えられた点を強調。巻き網漁の管理規制強化などを求める勧告なども紹介された。

県水産試験場の平山仁斗研究員は、今年の本県カツオ一本釣り漁の漁獲量が過去最低の約1万1千トにとどまる見込みであることを報告した。

パネル討論には本県や和歌山、千葉県のカツオ漁師計5人が登壇。「赤道域での漁獲量が過去最高なのに、日本沿岸の漁獲量が過去最低なのは関係がないわけではない」「赤道域での漁獲を制限するよう国は国際舞台で積極的に活動すべき」との意見が出ていた。

カツオ 全国的に大不漁



漁業情報サービスセンター(東京)
二平技術専門員に聞く

H26.12.23
宮日

支援する仕組み必要

カツオ一本釣りの漁獲量全国一を誇る日南市の南郷ハートフルセンターで19日、「食」と「漁」を考える地域シンポジウム「2014年のひき縄・竿釣カツオ漁をふりかえる」(東京水産振興会など主催)を開いた。シンポジウムを企画した漁業情報サービスセンター(東京都)の二平技術専門員に今後のカツオ漁などについて聞いた。(聞き手 日南支社・奈須貴芳)

「今年の本県カツオ一本釣り一万一千トにとどまる見込みが、り漁の漁獲量は過去最低の一」ある。

にひら・あきら 1948年、茨城県生まれ。北海道大水産学部を卒業後、茨城県水産試験場入り。カツオやイワシ、サバなどの生態や資源研究に従事し、2001年にはカツオの行動生態学研究で、水産海洋学会宇田賞受賞。茨城大人文学部市民共創教育研究センター客員研究員。

二平 全国の近海カツオ一本釣りも今年、戦後最悪の不漁年となるだろう。沿岸部のカツオ引き縄漁も壊滅的状况で、和歌山県では恒例のカツオ祭りが中止されたほど。近海カツオ一本釣りの漁期は例年11月いっぱいだったが、今年10月で漁場が消滅した。不漁の原因は、
二平 冷水や10月に相次いだ台風が挙げられているが、それだけではない。(日本を含む)中西部太平洋では13年、カツオの漁獲量が過去最高の178万トを記録した。世界の大型巻き網船約270隻が赤道域での漁獲を増大させ、日本へ北上してくるカツオの量そのものが少なくなったということだろう。

市内漁業者への影響は、
二平 カツオは大不漁だったが、(近海カツオ一本釣りが5〜7月に狙う)ビンナガが好漁となり、収益的には救われた。2009年も歴史的不漁だったが、今後は同様の年が頻発する可能性がある。
対策がなかなか進まない。
二平 日本沿岸の不漁が深刻なのに対し、国際的なカツオの資源評価は「良好」とされ、両者の認識を早急に埋める必要がある。(国際交渉を担う)水産庁と漁業者の連携を強化するため、意見交換の場を常設すべき。
今後のカツオ漁はどうあるべきか。
二平 政府は地方創生の必要性を声高に訴えているが、太平洋沿岸の多くの漁村ではカツオ漁が地域を支えている。カツオが戻ってくれば「浜」が潤い、関連産業、地域へと活力が広がる。日本国民全体として政策的にカツオ漁を支援していく仕組みが必要である。

「食」と「漁」を考える地域シンポとは

「農」や「漁」の営みは、人々が生きていくためのかけがえのない食料を生産し、農村や漁村において、自然と人間との調和的な関わりを保ちながら、地域文化の基礎を創り出してきたといえます。そして、農村や漁村での食料生産の営みの安定こそ、国の社会的安定性を維持するために重要不可欠なものであるといえます。日本の「食」を支える地域漁業の発展と食文化の育成のために、「食」と「漁」を考える地域シンポに取り組みます。

開催実績

第1回：銚子の魚イワシ・サバ・サンマの話題を追って

と き：2009年12月5日（土）13:00～16:00

ところ：銚子市漁業協同組合4階大会議室

報告者：川崎 健（東北大名誉教授）・小林 喬（元釧路水試）・岡部 久（神奈川水技）

参加者：140名

第2回：食としてのカツオの魅力を考える

と き：2010年1月9日（土）13:00～16:00

ところ：愛媛県愛南町「御荘文化センター」

報告者：二平 章（茨城大地総研）・河野一世（元・味の素食文化センター）

明神宏幸（土佐鯉水産KK）・藤田知右（愛南漁協）・菊池隆展（愛媛水研セ）

参加者：110名

第3回：「黒潮の子」カツオの資源動向をめぐって

と き：2010年1月11日（月）13:00～16:00

ところ：黒潮町佐賀「黒潮町総合センター」

報告者：二平 章（茨城大地総研）・新谷淑生（高知水試）・東 明浩（宮崎水試）

竹内淳一（和歌山水試）

参加者：120名

第4回：水産物の価格形成と流通システム

と き：2010年3月12日（金）15:00～17:00

ところ：東京都中央区「東京水産会館」

報告者：市村隆紀（水産・食料研究会事務局長）

参加者：80名

第5回：サンマの生産流通と漁況動向

と き：2010年8月21日（土）13:00～16:00

ところ：千葉県銚子市「銚子市漁業協同組合」

報告者：本田良一（北海道新聞社）・小林 喬（元釧路水試）・鈴木達也（千葉水総研セ）

小澤竜二（茨城水試）

参加者：107名

第6回：道東サンマの不漁をどうみるか

と き：2010年11月12日（金）13:00～16:00

ところ：北海道釧路市「マリントポスクしろ」

報告者：中神正康（東北区水研）・小林 喬（元釧路水試）・本田良一（北海道新聞社）
森 泰雄（北海道釧路水試）・山田 豊（北海道荷主協会）

参加者：170名

第7回：タコ日本一・魚のおいしいまちひたちなか

と き：2011年9月17日（土）13:30～17:30

ところ：茨城県ひたちなか市「ワークプラザ勝田」

報告者：二平 章（茨城大地総研）・根本悦子（クッキングスクールネット）・宇野崇司（那珂湊漁協）
根本裕之（磯崎漁協）・熊田 晃（磯崎漁協）・岡田祐輔（磯崎漁協）
根本経子（那珂湊漁協）・千葉信一（多幸めしシジケート）・鯉沼勝久（榎あ印）
横須賀正留（ひたちなかトカチャー研究会）・清水 実（ひたちなか商工会議所）

参加者：300名

第8回：鹿児島ちりめんの魅力を語る

と き：2011年10月15日（土）13:00～16:00

ところ：鹿児島県鹿児島市「ホテルパレスイン鹿児島」

報告者：廻戸俊雄（株式会社クッキングセンター）・小松俊春（元・江口漁協）
堤 賢一（志布志市商工会）・田浦天志（志布志市商工会）
大久保匡敏（鹿児島県機船船曳網漁業者協議会）

参加者：65名

第9回：黒潮のまちでカツオを語る

と き：2012年2月11日（土）13:00～16:00

ところ：高知県黒潮町「黒潮町総合センター」

報告者：田ノ本明彦（高知県水試）・菊池隆展（愛媛県農林水産研究所）
福田 仁（高知新聞）・嘉山定晃（長井水産株）・東 明浩（宮崎県水試）

参加者：69名

第10回：紀州漁民の活躍史とカツオ漁の今を考える

と き：2012年2月18日（土）13:00～16:30

ところ：和歌山県串本町「和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場」

報告者：川島秀一（リアスーク美術館）・坂下緋美（印南町文化協会）・杉本正幸（郷土史家）
雑賀徹也（郷土史家）・朝本紀夫（すさみ町商工会）・吉村健三（和歌山東漁協）

参加者：100名

第11回：スルメイカ・アカイカの資源動向をさぐる

と き：2012年5月9日（水）13:30～16:00

ところ：青森県八戸市「八戸水産会館」

報告者：桜井泰憲（北海道大学）・木所英昭（日本海区水産研究所）
酒井光夫（国際水産資源研究所）

参加者：150名

第12回：今年もカツオ水揚げ日本一をめざして

と き：2012年6月6日（水）13:00～18:30

ところ：宮城県気仙沼市「サンマリン気仙沼ホテル観洋」

報告者：森田貴己（水産庁増殖推進部研究指導課水産研究専門官）

馬場 治（東京海洋大学教授）・菅原 茂（気仙沼市長）

参加者：250名

第13回：秋のサンマはとれるのか？

と き：2012年9月12日（水）14:00～17:00（交流会は17:30～19:00）

ところ：東京都中央区豊海町「豊海センタービル」

報告者：石部善也（全国さんま漁業協会専務）

小林 喬（元・北海道釧路水産試験場漁業資源部長）

巢山 哲（東北区水産研究所主任研究員）・上野康弘（中央水産研究所グループ長）

参加者：80名

第14回：まぐろシティ・いちき串木野をめざして

と き：2012年11月24日（土）13:00～17:00（交流会は17:30～19:00）

ところ：鹿児島県いちき串木野市「シーサイドガーデン さのさ」

報告者：香川謙二（水産庁増殖推進部長）・鈴木平光（女子栄養大学教授）

上夷和輝（鹿児島まぐろ船主協会理事）・早崎史哉（鹿児島まぐろ同友会会長）

上竹秀人（鹿児島まぐろ船主協会会長）・田畑誠一（いちき串木野市長）

濱崎義文（串木野市漁業協同組合長）・松元 要（新洋水産有限会社社長）

井ノ原康太（鹿児島大学大学院生）

参加者：131名

第15回：道東海域で魚種交替が起きつつあるのか？

と き：2012年11月27日（火）13:00～16:30（交流会は16:45～18:30）

ところ：北海道釧路市「マリントポスクしろ」

報告者：戸田 晃（釧路市漁業協同組合代表理事組合長）

小林 喬（漁業情報サービスセンター道東出張所長）

森泰雄（釧路水産試験場専門研究員）・中神正康（東北区水産研究所主任研究員）

川端 淳（中央水産研究所資源評価グループ長）・山田 豊（釧路水産物流通協会）

参加者：118名

第16回：「食」と「観光」のまちづくりをどうすすめるか

と き：2013年1月26日（土）13:00～16:30

ところ：高知県土佐清水市「土佐清水市立市民文化会館くろしおホール」

報告者：中澤さかな（道の駅萩しーまーと駅長）・土居京一（（社）土佐清水市観光協会）

福田金治（松尾さえずり会）・問可柁善（高知県漁業協同組合）

瀧澤 満（窪津漁業協同組合）・武政光安（土佐清水鯉節水産加工業協同組合）

徳村佳代（土佐清水元気プロジェクト）

参加者：145名

第17回：カツオ・鯉節の食と文化

と き：2013年4月19日（金）13:00～17:00（交流会は17:30～19:00）

ところ：東京都中央区豊海町「豊海センタービル」

報告者：福田仁（ジャーナリスト）・二平 章（漁業情報SC・茨城大学地域総合研究所）

坂下緋美（和歌山県印南町文化協会会長）・秋山洋一（にんべん専務取締役）

近藤高史（味の素KKイノベーション研究所主席研究員）

竹内太一（土佐料理「ねぼけ」社長）・朝本紀夫（すさみ町商工会会長）
堀井善弘（東京都島しょ農林水産総合センター八丈事業所）

参加者：100名

第18回：下北の地域漁業とスルメイカの漁況動向

と き：2013年4月26日（金）13:00～16:30

ところ：青森県むつ市「むつ来さまい館」

報告者：山田嘉暢（むつ水産事務所）・野呂恭成（青森県水産総合研究所）
三木克弘（中央水産研究所）・高橋浩二（漁業情報サービスセンター）
木所英昭（日本海区水産研究所）・清藤真樹（青森県水産総合研究所）
澤村正幸（函館水産試験場）・渡邊一功（漁業情報サービスセンター）

参加者：90名

第19回：太平洋サンマの資源動向と来遊予測

と き：2013年8月7日（水）14:30～17:30

ところ：宮城県気仙沼市「気仙沼市魚市場3階会議室」

報告者：佐藤亮輔（気仙沼漁協代表理事組合長・気仙沼水産復興グループ運営会議代表）
小林 喬（元・北海道釧路水産試験場漁業資源部長）
巢山 哲（東北区水産研究所主任研究員）・渡邊一功（漁業情報サービスセンター）
ウラジミール・ツルポフ（ロシアサブサングループ・アジアパシフィック）

参加者：140名

第20回：魚食の文化をどう伝えるか

と き：2013年9月27日（金）13:00～17:00（交流会は17:00～18:30）

ところ：東京都中央区豊海町「豊海センタービル」

報告者：根本悦子（クッキングスクールネモト）・宮本博紀（大日本水産会）
大森良美（日本おさかなマイスター協会）
高橋千恵子（NPO 法人食生態学実践フォーラム）・木村 恵（東京水産振興会）
渡邊一功（漁業情報サービスセンター）

参加者：60名

第21回：マサバ資源は増大するのか？

と き：2013年10月29日（金）14:00～17:00

ところ：千葉県銚子市「銚子市漁業協同組合」

報告者：川端 淳（水研セ中央水産研究所）・内山雅史（千葉県水産総合研究センター）
森 泰雄（釧路水産試験場）金光 究（茨城県水産試験場）

参加者：60名

第22回：サケの資源と流通をめぐる今日的課題

と き：2013年11月9日（土）10:30～17:30（18:00～19:30 懇親会）

ところ：北海学園大学国際会議場

報告者：清水幾太郎（中央水研）・帰山雅秀（北海道大学）
宮腰靖之（北海道さけます内水試）・小川 元（岩手県水産技術センター）
高橋清孝（元・宮城県内水試）・宮沢晴彦（北海道大学）
佐野雅昭（鹿児島大学）・鈴木 聡（北海道漁連）
山口修司（北海道水産林務部）・津田 要（北海道漁業共済組合）

参加者：126名

第23回：ウナギと日本人

と き：2014年7月7日（月）13:00～17:00（17:30～19:30 懇親会）

ところ：東京都中央区豊海町「豊海センタービル」

報告者：太田慎吾（水産庁漁場資源課長）・望岡典隆（九州大学農学研究院准教授）
堺 美貴（有限会社「日本橋」代表取締役）
高嶋茂男（株式会社「日本養殖新聞」取締役）
飯島 博（認定NPO法人アサザ基金代表理事）
御手洗真二（全国内水面漁業協同組合連合会業務部長）

参加者：90名

第24回：道東海域へのサバ・サンマの来遊動向をさぐる

と き：2014年8月8日（金）13:00～16:30（17:30～19:30 懇親会）

ところ：北海道釧路市「マリントポスクしろ」

報告者：黒田 寛（北海道区水産研究所）・内山雅史（千葉県水産総合研究センター）
三橋正基（釧路水産試験場）・渡邊一功（漁業情報サービスセンター）

参加者：120名

第25回：サンマをめぐる国際情勢と今期の来遊見込み

と き：2014年8月17日（日）14:00～17:00（17:15～18:30 懇親会）

ところ：宮城県気仙沼市「サンマリン気仙沼ホテル観洋」

報告者：田中健吾（水産庁資源管理部首席漁業調整官）
巢山 哲（水産総合研究センター 東北区水産研究所八戸庁舎）
高橋晃介（水産総合研究センター開発調査センター）
渡邊一功（漁業情報サービスセンター）

参加者：90名

第26回：さかなの観光まちづくりとサバのブランド化

と き：2014年9月27日（土）13:30～17:00（17:15～18:30 懇親会）

ところ：宮城県石巻市「石巻グランドホテル」

報告者：後藤義男（ぬまづみなど商店街協同組合理事長・沼津魚仲買商協同組合理事長）
鯉沼勝久（魚のおいしいまちひたちなか推進協議会会長・(株)あ印代表取締役社長）
武輪俊彦（八戸前沖さばブランド推進協議会会長・武輪水産(株)代表取締役社長）
田中憲壯（西日本魚市(株)取締役相談役）
須能邦雄（石巻魚市場(株)代表取締役社長）

参加者：100名

第27回：風間浦鮫鱈のブランド化と「ゆかい村」観光

と き：2014年11月11日（火）13:00～17:00（18:30～20:00 懇親会）

ところ：青森県下北郡大間町「北通り総合文化センター ウイング」

報告者：朝本紀夫（和歌山県すさみ町商工会長・NPO法人魅来づくりわかやま理事長）
森 庸宏（(公社)青森県観光連盟主幹）
立川博之（東京神田鮫鱈料理老舗「いせ源」専務）
竹谷裕平（(地独)青森県産業技術センター水産総合研究所主任研究員）
中塚義光（蛇浦漁業協同組合代表理事組合長）
長谷雅恵（下風呂温泉旅館組合おかみの会会長）

参加者：120名

以上



第28回 「食」と「漁」を考える地域シンポ 報告集

2015年9月 発行

■編集・発行 一般財団法人 東京水産振興会

〒104-0055 東京都中央区豊海町 5-1 豊海センタービル 7階

TEL 03-3533-8111 FAX 03-3533-8116

一般社団法人 漁業情報サービスセンター

〒104-0055 東京都中央区豊海町 4-5 豊海振興ビル 6階

TEL 03-5547-6886 FAX 03-5547-6881
